389. 7-Ki88ウ
1200500741393
389.7
Ki88

始

389.7
Ki 88

清野謙次著

太平洋民族學

〔太平洋圏學術叢書〕1.

岩波書店刊行

959
51

序

大東共榮共榮圈の諸民族が共存共榮の實を擧げるためには、何人と雖も一と通り廣義の人類學を學び置かねばならない世となつた。

古く昭和六年に世に問うた拙著「日本原人の研究」に述べたる如く、私として人類學・考古學の研究に志したのは本職となつた醫學よりはずつと古い。人類學・考古學は中學二年級から始つて、醫學はやつと大學生時代からであつた。爾來四十年、絶えず蝸牛の歩を續けて來たが、其れも一つには日本に人類學と考古學とを研究する人が十指を屈するほど少ないからであつた。それは誠に尤もな話で、當時の日本は人類學を必要とするほど世界に進出して居らず、又多少進出して居つたとしても國際的に甚だ無勢力な立場にあつて、指導者では無く、並び大名たるの格であつたに過ぎなかつた。

今や時勢は變つた。日本は大東亞共榮圈の主動者として・此圈内に棲息せる數多の民族に共存共榮の實を擧げしめなければならなくなつた。それに就いては諸民族を理解するのが第一條件となつて、朝も野も今更あわて氣味であるのは疑ひ無いことである。

本來廣義の人類學は人類の過去を考へ、其現狀に鑑み、以て人類の將來進むべき途を考究するに資せんとする

にある。此意味に於て人類學の研究は唯體質部門の研究のみでは足りない。考古學も民族學も必要であつて、此三部門が揃はない以上は、或る意味に於て片輪である。

學問としての完璧問題は之を他日に附することとして、兎も角も棄てて置け無いのは、刻下差し迫つての「大東亞共榮圏の諸民族に就て一と通り知識を得たい」と云ふ問題である。四十年間閑事業視せられた私の人類學が昨今非常に多忙となつたのも、此要求に基づくので、私としては私のつまらない知識が少しでも國家の御役に立てば其れで結構だと喜んで居る次第である。

此廣大なる大東亞共榮圏の數百の諸種族習俗を一と通り知り度いと云ふ要求に基づいて書き試みたものが本書である。實の所、今年の初め私は某方面の方々に御眼にかゝつて、要職の方々、現地へ行かるゝ人々のために必要となるべき話をした。其時に之れは本にして置かうと決心した。それと云ふのも直接に話す人の數は多きを望めないし、又雙方共に時間も乏しい。本ならば好都合の時間に離れて居つて讀んでもらへるわけである。

さて執筆するとは決心したものの、どの程度、どの範圍で書く可きかに就て迷つた。然し日本の現狀に則して是非入用なのは次の三項目だと思つた。

（一）本書は平易に書かねばならない。專門家に役立つと同時に專門家ならざる何人にも容易に概念的知識を得せしめなければならぬ。差し當つて現地の民族に接觸するに際しての概念を與へるのを主眼としなければならない。その爲めには民族學を主とし、各種族の現時に於ける風俗・習慣を記するに重點を置き、各種族の體質と考古とは從とする。

（二）古く坪井正五郎博士時代から、人類學は人類體質論、由來論（主として考古學方面）及現狀論（人種學及土俗學）を兼ね修める必要ありと敎へられて生長し來つたのではあつたが、私の從來の研究は餘りに體質に偏し、考古に偏し過ぎて居た。時勢が今日の如くなると私は改めて全體的修養の不足を感ぜざるを得ない。得意とする專門部門の研究を行ふのもよいが、もつと全體的修養を行ふ必要ありと氣付いて、私は更めて一生懸命に勉强を初めた。此書を書くのは實の所私自身の修養に大ひに役立つた。廣い世間に御同感の好學の士あらば本書出版の勞は酬ひられたのである。何にしても國運の發達に適應して勉强するのが學問報國の第一であることを痛感しつつ執筆した。

（三）大東亞共榮圏の廣大なる區域に就て、それぞれの人々が自家の專門的立場から軀を挺して考究するのは日本人に課せられたる使命である。未だ戰爭が始まつた許りだから秩序も整はないので日本人獨特の研究は餘り行ひ得られ無い。然し今日に於て日本人の當然爲す可きことは、歐州の學者が從來どの程度の研究を行つてどの程度の所まで爲し遂げ居るやを知つて、今日以後研究を要するのはどの地域のどの方面を先とするやとの見當を附けて置く事である。今日までは歐米人が主權を握つて居つた地域であつたから、彼の地に於ける卓越した業績を參考として學び、一朝必要な場合には直ちに役立つ知識を供給する書物でなければならぬ。

以上の三箇條の主張の下に筆を執つたものの、抱負は大きく實行は思ふ樣には行かなかつた。私として一番苦

しかつたのは一日一刻も早く書き上げてしまはねばならない事であつた。御承知の如く戰局は日に日に發展する。現地へはどしどし出發せられる。私は筆の運びが遲い方であるので氣が氣で無かつた。印刷を一日も急ぐので本書の前半部と挿入圖とを岩波書店に渡して印刷に取り掛つてもらつて居る間に、後半部、すなはちオーストラリア民俗誌以下をやつと今日脱稿し得たのであつた。此の間酷暑の熱帶に行動せらるゝ皇軍將士の勞苦に感激しつゝ筆を執つたから、私としては生れてから初めての快速な著書が出來たのであつた。然し餘りに急速に附圖の撰定を行つた爲めに或部分は圖の挿入數が著しく多く、他の部分は圖數が少なきに失した。之れは當初書物の大さの豫定が立つて居らなかつたため、記述範圍が決定しなかつたのと、出版取り急ぎの關係上、範圍決定前、既に圖の製版に取り掛かつたためである。そして圖を書物全體の配置から考へて分散せしめたために記事と同頁に必ずしも圖を挿入し得なかつた、之れは深く讀者諸氏に御海容を乞ふ次第である。

本書を記するに際し、私は上記の如く歐米學者の研究の程度を讀者に批判していただけるのを主眼とした。然し徒らに多數の說を列擧しては專門家ならざる讀者を苦しめ迷はすのみであるから、學說の統一を圖る必要があると思つた。それで私は主としてブシャン及ハイネ・ゲルデルン氏の書及圖によりて本書を記す事とした。私としては獨逸語は一番お馴染みが深いし、此派の著述が割合に中正で、且つ全體としての記述がまとまつて居つたからである。然し記し了つて考へるに種族分類に際して餘りに言語學に偏し、民族學中心に過ぎてゐるのはいさか感心出來ない。

私は讀者諸氏にお願ひするのは、此書の中に書いてある學說が徹頭徹尾眞理だと思つていただき度くないことである。本書の中には多數の眞實と多量の眞理とはあるが、之を自らの經驗に訴へて批判するのは實に今日以後に於ける日本人――日本の學者の務めなのである。又私は日本の考古學者諸氏に御願ひする。南太平洋民族の多數は近年まで石器時代に居つたのだ。そして急激に高級金屬文化に接觸した爲めに、今日なほ變態的原始文化の狀態にある。石器時代を學ぶのは必ずしも發掘する計りが能でない。南洋の變態的石器時代住民は發掘によりて獲られざる有機性遺物、言語その他の無形風習をも多數保持して、諸君の研究に來らるゝのを待つて居るのを考へていただき度い。

私は平易に本書を書いたつもりである。然し專門家に取つても參考となる材料、參考となる學說は本書の中に乏しくない。私は自信を以て之も明言し得る。また本書の中には大東亞共榮圈の北の部分は書いて無い。之れは私に取つては頗る物足らない。少なくともベーリング海峽を中心として亞細亞と亞米利加の北部の民族と其交涉とを勘考して見度いが、之れは他日に期することとする。また大東亞圈を結成するのに政治學と民族學とが如何に提携するのが必要なるかは、最近拙著「太平洋の民族政治學」（平野義太郎合著、昭和十七年、河出書房出版）中に記した。

執筆中に太平洋協會から、本書を其學術叢書の一部として出版す可しとの勸誘を受けた。私としては勿論欣然として之れに應ぜざるを得ないと共に、協會諸氏の御厚志に對して深く感謝の意を表する。

昭和十七年三月二十一日

太平洋協會に於て　清野謙次

目次

第一部　インドネシア及び印度支那半島の民族……一
序説　民俗進化上の三區分……二
第一篇　低文化階級の民族……七
第一章　低文化民族の人種學的分類……七
一　ネグリト族(九)—二　ウェッドイド族(二)—三　原始マライ族(四)
第二章　ネグリト文化の概括……二五
一　アンダマン島のネグリト族(七)—二　フィリッピンのネグリト族—三　マライ半島のネグリト族(三)
第三章　セレベス、スマトラに於けるウェッドイド族……二六
第四章　ボルネオ及びフィリッピン等の原始的マライ族……二八

第二篇　中等度文化の民族……二三

まへがき……二三

第一章　食料・農耕・家畜・狩獵・漁撈……二四

一　二種の農作物(三四)—二　燒畑耕作(三七)—三　段丘耕作(三九)—四　家畜(四二)—五　狩獵(四二)—六　漁撈(四二)

第二章　嗜好品……四三

一　檳榔實嗜食(四三)—二　酒類(四五)—三　煙草(四六)—四　阿片(四六)

第三章　住家と聚落……四七

一　杭上(高床)家屋(四七)—二　平床家屋(四七)—三　建築材料(四八)—四　圓形家屋(四九)—五　角形家屋(五〇)—六　屋根の特性(五一)—七　樹上家屋(五三)—八　家屋の大きさ(五四)—九　家屋の裝飾(五六)—十　家屋の種類(五六)—十一　聚落(五七)—十二　村落防護(五八)—附記・橋梁(五九)

第四章　衣服と裝飾……六〇

一　裸體(六〇)—二　腰卷きと褌(六〇)—三　座蒲團(六二)—四　脚絆(六二)—五　鉢卷きと笠・帽(六三)—六　被服材料(六三)—七　機織(六五)—八　衣類の文樣(六七)—九　裝飾品(六八)—十　鼻飾(七一)—十一　耳飾(七一)—十二　櫛(七二)—十三　戰鬪服裝・舞踊服裝(七三)

第五章　身體毀傷又は身體變形……七六

一　鼻及び耳の穿孔(七六)—二　頭蓋變形(七六)—三　拔齒と齒變形(七七)—四　涅齒(七七)—五　割禮(七八)—六　腰變形(七九)—七　入れ墨(七九)—八　瘢痕裝飾(八一)—九　彩色(八一)

第六章　發火法……八一

第七章　竹器加工・編み物・土器製作・家具製作……八二

一　竹加工(八二)—二　籠及び編み袋(八四)—三　土器(八四)—四　木器(八五)

第八章　金屬加工……八六

第九章　器具と武器……八九

一　斧(八九)—二　棍棒(九〇)—三　槍(九一)—四　刀劍(九二)—五　クリス劍(九七)—六　弓と矢(九八)—七　圓彈弓(一〇〇)—八　弩(一〇一)—九　吹筒吹矢(一〇一)—十　毒矢(一〇二)—十一　投石(一〇二)—十二　楯(一〇三)—十三　鎧(一〇七)—十四　兜・帽子(一〇八)

第十章　船……一〇九
一　獨木船(一〇九)—一一　板張り船(一一〇)—一一　二隻船(一一一)—一一　帆檣錨(一一三)
第十一章　音樂器械……一一三
一　木板太鼓(木鼓)(一一三)—一一　叩音器(一一四)—一一　革張り太鼓(一一五)—一一　銅羅・銅鼓(一一六)—一一　吹奏器(一一七)—一一　弦器(一一八)
第十二章　社會構成……一一九
一　氏族・同族(一一九)—一一　トーテミスムス(一一一)—一一　母權制(一一二)—一一　父權制(一一三)—一一　父母同權制(一一五)—一一　夫妻(一一五)—一一　婚約と結婚(一一六)—一一　長幼序次(一一七)—一一　成年表徴(一一七)—一一　男の家(一一八)—一一　地位階級(一一九)—一一　酋長組織(一一一)—一一　政治單位(一一四)—一一　兩黨の存立(一一六)
第十三章　交易・通貨・了解手段……一一七
一　通貨・價格單位(一一七)—一一　通信方法(一一八)—一一　結繩(一一八)—一一　了解手段としての文字(一一九)
第十四章　宗　教……一一九

一　神(一一九)—一一　自然靈・死者靈(一一一)—一一　祖先禮拜(一一一)—一一・禮式・儀禮(一一一)—一一五　シャーマン教(一一五)—一一六　占卜(一一六)—一一七　アニミスムスと妖術(一一七)—一一八　動物信仰・動物崇拜(一一八)—一一九　巨石崇拜(一一九)—一一一　惡魔除け(一一一)—一一一　タブー(一一一)—一一一　妖怪(一一六)
第十五章　疾病・死・葬送……一一七
一　疾病(一一七)—一一一　死後の靈(一一九)—一一一　埋葬樣式(一一一)—一一一　墓(一一一)—一一一　葬儀形式(一一七)—一一一　祖先頭蓋禮拜・巨石文化(一一八)
第十六章　首狩り・人身供奉……一一七
一　首狩り(一一七)—一一一　人身供奉(一一七)—一一一　喰人風習(一一七)
第十七章　インドネシアの藝術……一一八
一　塑像(一一八)—一一一　彫刻裝飾(一一一)—一一一　繪畫(一一一)
第十八章　文化構成……一一一
一　古式文化地域としての西部諸島(一一一)—一一一　古式文化地域としての東部諸島(一一一)—一一一　中古文化存在地域としての中央部諸島(一一一)—一一一　中古文化存在地域として

の印度支那半島(一九一)—五　米作の文化に及ぼせし直接影響(一九二)—六　牛飼養の文化に及ぼせし直接影響(一九三)

第三篇　高文化階級の民族……一九六

一　古埃及と西部亞細亞古代文化との傳來(一九六)—一一　ヒンヅー植民(一九七)—二　ヒンヅー教の渡來(二〇一)—四　アッサム地方のヒンヅー教(二〇四)—五　南派佛教の渡來(二〇五)—六　國家組織・その他宗教的社會的進歩(二〇六)—七　物質文化方面の進歩(二一〇)—八　美術工藝の進歩(二一二)—九　文學・文字・劇・音樂・舞踊(二一四)—十　東南亞細亞藝術の獨自性と妥協性(二一六)—十一　支那文化の影響(二一七)—十二　イスラム教の影響(二二〇)—十三　歐洲文化の影響(二二四)—十四　南洋の習俗と日本習俗との類似(二二五)—十五　日本文化進出の黎明(二二七)

結語……二二八

附篇　東亞地中海の海洋民族——オランング・ラウト……二三二

續篇　東亞地中海の海洋民族——オランング・ラウト——マカッサール人——テルナート人……二四二

第二部　印度支那半島及びアッサム地方の民族……二五五

まへがき……二五八

第一章　オーストロ・アジア語系統の諸民族……二六一

第二章　安南語系統の諸民族……二六六

第三章　印度支那語系の諸民族……二六七

第一節　チベット・ビルマ系民族……二六七

第二節　タイ・支那系諸民族……二七七

附章第一　印度支那半島に於ける民族轉移の方法及び國家の結成……二八五

附章第二　人類學的附言……二八九

第四章　異國渡來の植民民族……二九一

第三部　オーストラリアの民族……二九五

第一篇　オーストラリア……二九六

一　島民の體質的性狀(二九六)—二　島民の心性(二九九)—三　言語學的分類(三〇二)—四　文化諸相とその序次(三〇五)—五　計數(三〇七)—六　種族の種類(三〇八)—七　住居(三〇九)—八　衣服(三一〇)—九　裝飾(三一二)—十　食物(三一三)—十一　發火法(三一三)—十二　狩獵・漁撈(三一四)—十三　武器(三一六)—十四　家具・石器(三一〇)—十五　船(三一二)—十六　社會(三一三)—十七　宗教・靈石・鳴り木(三一六)—十八　成年儀禮(三一七)　十九　舞踏・樂器・遊戲(三一二)—二十　葬送・人肉食用(三一三)—二十一　オーストラリアの文化層(三一四)

第二篇　タスマニア島……三一六

一　人種(三一七)—二　住居・食物・衣服・船(三一八)—三　石器(三一九)—四　武器・裝飾・彫刻(三二〇)—五　社會構成・家族生活・宗教(三二一)—六　葬送(三二二)—七　言語(三二三)

結語……三二三

第四部　オセアニアの民族とその民俗(概論)……三二五

第一章　人種の三大區分　メラネシア人——ミクロネシア人——ポリネシア人……三二六

第二章　人類學的觀察……三二〇

第三章　民俗學的觀察……三二八

一　オーストラリア古文化層(タスマニア人文化とブー・メラング文化)(三二八)—二　トーテム文化層(西パプア文化)(三二九)—三　東パプア文化層(母權的二階級制文化)(三二二)—四　弓文化(三二五)—五　マライ・ポリネシア文化(三二八)—六　ミクロネシア文化(三二二)—七　オセアニアに於けるアラビアの影響(三二三)

第五部　メラネシア民族……三二五

第一篇　ニューギニア島……三二九

一　人種(三二九)—二　家屋(三二八)—三　農耕(三二八)—四　漁撈(三二八)—五　狩獵(三二八)—六　食物(三二八)—七　衣服(三二八)—八　裝飾(三二五)—九　武器(三二八)—十　首狩・食人(三二九)—十一　器具(三二九)—十二　編み物(三二四)—十三　土器(三二四)—十四　船(三二五)—十五　社會構成(三二七)—十六　結婚(三二七)—十七　祭禮(三二八)—十八　言語(四〇〇)—十九　宗教(四〇〇)—二十　葬風(四〇一)

第二篇　アドミラルチー島及びその西部諸島……四〇四

第一章　アドミラルチー諸島……四〇四
一　人種(四〇四)—二　住家(四〇五)—三　食物(四〇六)—四　漁撈・船(四〇六)—五　衣服・裝飾(四〇七)—六　武器(四〇九)—七　土器(四一〇)—八　美術工藝(四一一)—九　酋長(四一二)—十　社會(四一三)—十一　宗教(四一三)—十二　葬送(四一四)—十三　ウシアイ族(四一五)
第二章　西方諸島……四一六
第一節　ウウル島及びアウア島……四一六
一　住家・食物(四一六)—二　衣服・裝飾(四一七)—三　武器(四一八)—四　家具(四一九)—五　船(四一九)—六　言語(四一〇)
第二節　ニニゴ島……四二〇
一　住家(四二〇)—二　食物(四二二)—三　衣服・裝飾(四二二)—四　武器・家具(四二三)—五　社會(四二三)—六　葬送(四二三)
第三篇　ビスマーク群島……四二四
第一章　ニューブリテン島——史前遺蹟……四二四
第一節　バイニング族……四二六
一　家屋・聚落(四二七)—二　農耕・食物(四二七)—三　衣服・裝飾(四二八)—四　武器(四二九)—五　器具(四二九)—六　舞踏(四三〇)—七　社會構成(四三一)—八　宗教(四三三)—九　葬送(四三三)
第二節　ガゼルレ半島のその他の種族……四三四
一　聚落・住家(四三四)—二　食料・漁撈・船(四三四)—三　衣服・裝飾(四三五)—四　男子の生活(四三六)—五　樂器(四三七)—六　舞踏(四三八)—七　鄉土組合(四三九)—八　酋長(四四一)—九　貝貨(四四一)—十　階級制の成立(四四一)—十一　魔術(四四二)—十二　葬式(四四三)
第三節　その他のニューブリテン島民……四四四
一　住家(四四五)—二　身體彩色・瘢痕裝飾・頭蓋變形(四四五)—三　衣服・裝飾(四四六)—四　武器(四四七)—五　石斧・貝斧等(四四八)—六　藝術的作品(四四八)—七　船(四四九)—八　貨幣(四四九)—九　社會(四四九)—十　宗教(四五一)
第二章　ニュー・アイルランド島及びラヴォンガイ島……四五一
一　住家(四五二)—二　食物(四五三)—三　衣服(四五三)—四　裝飾品(四五三)—五　武器(四五四)—六　斧・工作器具(四五五)—七　船(四五六)—八　漁撈(四五七)—九　貝貨(四五七)—十　社會構成(四五八)—十一　舞踏・樂器(四五九)—十二　食人風習(四六一)—十三　宗教(四六二)—十四　葬送(四六三)

第三章　セント・マチアス島……四六四
一　家屋・家具(四六四)—二　食料(四六五)—三　衣服(四六五)—四　裝飾品(四六五)—五　武器(四六六)—六　船(四六六)—七　器具・機織器(四六七)—八　舞踏棒・音樂器(四六七)

第四篇　ソロモン群島……四六八
一　人種(四六八)—二　家屋(四六九)—三　食物(四七〇)—四　衣服(四七一)—五　裝飾(四七一)—六　武器(四七三)—七　石斧(四七五)—八　船(四七五)—九　文樣(四七六)—十　土器・器具(四七七)—十一　商業・齒貨・貝貨(四七七)—十二　酋長(四七八)—十三　社會・言語(四七九)—十四　結社(四八〇)—十五　祭禮(四八一)—十六　宗教・巨石文化(四八二)—十七　葬送(四八三)

第五篇　サンタ・クルーズ島……四八五
一　家屋・家具(四八五)—二　食物・漁業(四八六)—三　衣服・頭髮(四八六)—四　裝飾品・裝身法(四八七)—五　武器・手仕事(四八八)—六　船・貝貨・羽貨(四八八)—七　機織・裝飾技術(四八九)—八　酋長・社會・結婚・言語・舞踏(四九〇)—九　宗教(四九一)—十　葬送(四九二)

第六篇　ニューヘブリード群島……四九三
一　人種(四九三)—二　家屋・巨石文化(四九四)—三　衣服・結髮・裝身法(四九五)—四　裝飾品・玉質裝飾品・頭蓋變形(四九六)—五　食物・船(四九七)—六　武器(四九八)—七　工藝技術・編み物・彫刻・土器・古代文化(四九八)—八　酋長(五〇〇)—九　社會・結婚・組合・舞踏(五〇〇)—十　宗教・靈屋・祖先像・メンヒル(五〇三)

第七篇　ニューカレドニア群島……五〇五
一　人種(五〇五)—二　家屋(五〇六)—三　食物・人肉食(五〇六)—四　衣服・裝身(五〇七)—五　戰爭(五〇七)—六　釉ある土器・玉製器(五〇八)—七　社會(五〇八)

第六部　ミクロネシアの民族……五一一

まへがき……五一三

第一篇　カロリン群島　パラオ群島……五一六
一　人種(五一六)—二　家屋(五一六)—三　住家(五一七)—四　入れ墨(五一八)—五　食物(五一九)—六　武器・器具(五二〇)—七　機織・工藝(五二〇)—八　船(五二三)—九　貨幣(五二三)—十　社會(五二三)—十一　結婚(五二四)—十二　舞踏・音樂(五二五)—十三　宗教・食物タブー(五二六)—十四　葬送(五二六)

第二篇　マーシャル島　ギルバート島……五二〇

一　住家(五三〇)—二　食物(五三一)—三　衣服(五三三)—四　入れ墨(五三三)—五　裝飾品(五三四)—六　武器(五三五)—七　船(五三六)—八　航海・器具(五三七)—九　漁撈・飼鳥(五三八)—十　編み布(五三九)—十一　舞踏(五四〇)—十二　政治・社會・宗教(五四一)

第七部　ポリネシアの民族……五四三

まへがき——人類學的性質……五四四

第一篇　サモア群島……五四七

一　住居・家具(五四八)—二　食物(五四九)—三　衣服・裝身(五五〇)—四　入れ墨(五五一)—五　戰爭武器(五五二)—六　游泳・船(五五三)—七　漁撈(五五四)—八　男女の仕事(五五五)—九　樹皮布の製作(五五七)—十　社會組織(五五八)—十一　結婚(五五九)—十二　接待婦(五六〇)—十三　踊と歌・遊戯・數(五六〇)—十四　宗教(五六一)—十五　世界創造(五六三)—十六　葬送(五六三)

第二篇　ニュージーランド島……五六五

一　人種(五六五)—二　家屋・文樣・彫刻・玉斧(五六六)—三　食物・衣服・入れ墨・首飾(五六七)—四　好戰心・人肉食用・奴隷(五六九)—五　宗教(五七〇)—六　葬送(五七〇)

第三篇　フィヂー群島……五七一

一　人種(五七一)—二　家屋(五七三)—三　衣服(五七三)—四　髮飾(五七四)—五　入れ墨・瘢痕裝飾・ミカ手術(五七四)—六　人肉食用(五七五)—七　武器(五七六)—八　樹皮布・釉ある土器(五七七)—九　船・魚漁(五七七)—十　社會(五七八)—十一　舞踊・競技(五七九)—十二　結婚(五七九)—十三　宗教(五八〇)

第四篇　トンガ群島……五八二

一　住家・巨石文化(五八二)—二　衣服・頭飾・入れ墨・武器(五八三)—三　樹皮布・造船(五八四)—四　社會・宗教・葬送(五八四)

第五篇　ハワイ群島……五八六

一　人種・家屋・食物(五八七)—二　衣服・裝飾・入れ墨(五八八)—三　武器・工藝(五八九)—四　船・舞踏・歌(五九〇)—五　宗教・階級(五九一)

第六篇　タヒチ島　パウモツ島　マルケサス島　クック島……五九一

一　人種(五九二)—二　住家・巨石文化・食物(五九四)—三　衣服・入れ墨・裝飾(五九四)—四　武器・工藝(五九六)—五　船(五九七)—六　漁撈(五九七)—七　社會・結社(五九八)—八

舞踏・歌・遊戯・竹馬・數(五九八)—九　結婚(五九九)—十　宗教(五九九)—十一　葬送(六〇一)

第七篇　イースター島……六〇一

一　ポリネシア系文化(六〇三)—二・木彫像(六〇五)—三　文字の彫刻せられたる木板(六〇六)—四　巨石像・巨石文化(六〇八)—五　葬送(六〇八)

結語　特に亞米利加文化への交渉……六〇九

第一部　インドネシア及び印度支那半島の民族

序說　民族進化上の三區分

インドネシアとは、どちらかと云へば政治的用語であるが、學用語としても使用せられる。殊に言語學者と民族學者の一部は此語を多く使用するが、人類學者の中には之れを全然使用せざる人もある。

（註）インドネシアの語原は詳かでない。一八八四年獨逸人類學者アドルフ・バスチアンの著書に始まると云はれたり、ロガン著「印度群島並に東亞」に始まると云はれたり、色々の說があるが、蘭印に民族運動が擡頭して以來、住民の知識階級は蘭印東印度と云ふのを嫌つてインドネシアンと名乘るのを好み、遂に和蘭政府に迫つてインランデル（土民）に代ふるにインドネシア人なる名を以てせしめた。

地域的にインドネシア（又はマライシアと云つてもよい）の境界は大小各種に理解されるが、舊蘭領東印度諸島を意味する人が多い樣だ。ところがインドネシア人と云つた場合には舊英領北ボルネオも、フィリッピンも、臺灣の山地住民をも併せたものを云ふ學者が多い。但し此地域住民の全部を云ふのではなくして、其地域內からネグリト族と海岸マライを引き去つた殘りの住民――換言すれば一部學者のプロト・マライと略ゞ等しい範圍のものをインドネシア人（マライシア人）と云ふ學者が多い。

これでは言葉の定義が大衆的に中々分り難くなつて不便であるから、私は此書に於てニューギニア以西の東亞地中海の諸島を一括してインドネシア諸島と稱し、其住民をインドネシア人と呼ぶ（尤もインドネシアを、此廣さで理解する人も私以外相當にある）。すなはち大スンダ列島、小スンダ列島、ボルネオ、セレベス、ハルマヘラ、フィリッピン諸島と其間に介在する小島である。之れは曾ては蘭、英、米等に分割所屬して居たので政治上に區分されたが、今は一團となつて大東亞共榮圈に入つたから、一括して取り扱ふに便利となつた。

（註）ニューギニア、ニューブリテン等は人種及民族の上からメラネシアであるし、日本領內南洋はミクロネシアである。從て此二地域はインドネシアで無い。

インドネシアの廣大なる地域に居住する住民は殆ど一億人に近く、之れを小區分すると非常に多數の大小種族に分類せられ、各種族毎に其言語、習慣、風俗を異にする。それで各種族に分けて、――換言すれば各論的に民族を記載して行つては非常に浩瀚なるものとなり、且つ之れを覺え切れるものでない。

幸にして彼等の住居地は赤道を挾んで南北十五度線以內に在る關係上、熱帶にして多雨多濕なりと云ふ氣候環境であり、生活狀態が自然に似て居るし、且つ血緣的にも各種族は近親であるので、お互ひに其風俗・習慣に共通な所も多い。若し此共通な所を目標として總括的に記述し、傍ら其異なれる所を勘考し、所謂總論的に記載し行くならば、彼等を理解するのは困難でない。それで以下インドネシアの民族記載には此方法を取つた。

今やインドネシアは大東亞共榮圏の極めて重要なる部分となつた。日本人は彼等の生活、彼等の性情、彼等の習俗・慣行を根本的に理解し、好意を以て之れに臨まなければならない。彼等に直接に接觸する現地の役員、作業者は勿論の事、國内の人々も彼等に對する認識を高めて、理解ある判斷を下さざる限り、永遠の平和と、共榮共存の實を擧げ得られない。

インドネシアの住民を深く理解してもらふ爲めに書いたのが此書である。私は此書によつてインドネシア人に關する常識を養つていただき度いのだ。常識と云つても、大衆的な、いはば平凡な記載もあるが、部分によりては深く文化史的につき込んで書いたから、相當に高等な常識も加味したつもりである。

要するに一般人も各專門家もインドネシアに關する認識を高めるのが今日の急務である。そして今日以後インドネシアに對して、何を爲すべきか、何を爲さざる可からざるかは、此常識によりて自づから決するのだと思ふ。

さてインドネシアの民族を說くに當つて發達の程度により之れを三階級に區分するのが便利である。すなはち

（一）　低文化階級の民族としてネグリト、ウェッドイドの如きものが居る。主として大島の交通不便なる山地に逃遁し、或は洋中の孤島に住居して居るが、其生活は極めて原始的で概して農耕以前の狀態にある。智能の發育は劣等だから、政治的にも經濟的にも重要ではないが、學問的に原始民族としての研究に興味が深い。下文に於ては此階級の文化は略記するに止める。

（二）　中等度文化階級の民族は大體に於て初期農業から水田農耕の程度に達したもので、最も廣い地域に分布して居るし、全地域の住民から高文化及び低文化住民を除外したものである。インドネシア固有文化を保持せる外に、印度、支那、イスラムの中古、近古文化を加味した生活である。能力は稍〻優れて居るから、人的資源として役立つし、インドネシアに於ける中堅階級である。それで私は以下此文化階級を主として記述した。

（三）　高級文化民族は強く且つ永く異種高級文化（印度、イスラム、支那、歐洲）の影響を受けた民族で、所謂知識階級——此地方での政治的指導者である。大陸に近い部分に多い（ジャワ人、バリ人、スマトラのアチェー族とミナンガバウ・マライ族、ルスンの平地住民）。航海に長け又は交通の便宜な住民も此部に屬する（海岸マライ人、ブギー族、マカッサール族、アムボン及モルッケン住民の或るもの、セレベスのミナハサ人）。猶これに就ては附篇「太平洋の海洋民族」を參照あり度い。

上記の如く文化の進步發達程度によりて便宜上三階級を分つたのであるが、高中低の三種は要するに目分量たるに過ぎない。其中間に位置する種族も少なくないし、又一種族にして其居住地の關係上、一部は中等度なるに拘らず、一部は既に高文化程度に達せるものもある。其れと云ふのも是等民族は大島に於ては各民族毎に一定地域を占めつゝ、各地域に境界を接して雜居して居るが、お互ひの習俗は各〻其特性を保持して思つたほどは移行しない。然し概して海岸地に於けるものは進步的で高文化である。海岸地であつてもルスン島北部東岸のネグリト族の如く、大洋に面して來り訪れるもの稀なる所もある。山地には熱帶ヂャングルが存在せるために溫帶よりも著しく交通を阻害し、河川の舟運を便にするもの無き以上、舊慣依然として存在し、民俗の發達が著しく遲れ

るのである。

〔附記〕印度支那半島とインドネシア諸島とを一緒にした區域を古來東南亜細亜と呼んで居る。本書にも以下此名稱を使用した。此名稱は「極東」「近東」「後印度半島」「前印度」と云ふ樣な歐洲本位の名では無く、純然たる地理學的の學術名だからである。

すなはち亜細亜地圖を擴げる時に、其中央に近いのが「中亜」或は「中央亜細亜」であり、之れに對して「東亜」、「西亜」があり、又「東南亜細亜」として此印度支那半島とインドネシア諸島を入れ、「西南亜細亜」としてアラビア、イラン方面を意味する。これは分り切つた話で今更説明にも及ばない樣だ。

然るに近來新聞雜誌に印度支那半島とインドネシア諸島とを合一せし地域を西南亜細亜と書いたものが少なくない。其人の氣持ちでは「日本の西南にあるから」或は「歐洲本位の東南」と誤解しての新名らしいが、それでは亜細亜は無駄になる。

インドネシア諸島を「西南太平洋諸島」又は「マライ諸島」と呼ぶは地理學上、人類學上正しい學術語だ。

また後文に往々アラビア、ペルシア、メソポタミア地方の古く榮えた王國の事を引用するが、上述の理由で西印度或は西南（又は西）亜細亜諸國と呼ぶ。

インドネシアの民族誌は印度支那半島、竝びにアッサム地方の民族と近い關係を持つから、後文甚だ屢、之れを引用した。

第一篇　低文化階級の民族

第一章　低文化民族の人種學的分類

永い間眠つて居つたインドネシアの諸島に二三千年以來相次で高級文化の波が到來した。其著明なるものとして知られて居るものだけでもヒンヅー教、佛教、モハメッド教、支那方面よりせる文化の諸流と人民の渡來とがあつた。そして其渡來せし處にて華やかなる文化が開き諸種の文化形式を殘した。然し之れとわづかに離れたる部分殊に内陸は今日に於ても尙原始文化の狀態にある。そして此原始文化の所持者は幾多の小種族があるが、之れを三群に分つて記述するのが便利である。すなはち

（一）ネグリト族 Negritos。これはアンダマンに住める者、フィリッピンに住めるアエタ族 Aëta、マライ半島に住めるセマング族 Semang の三種に分れる。

（二）ウェッドイド族 Wedddoide。これはセイロン島に住居せる原始民族ウェッダ Wedda に似たる種族であるが、諸島の内陸に散在する。

（三）ネグリトに非ず、又ウェッドイド族にも非ざる原始的小種族が各島に散在する。之れを便宜上原始マ

ライ族 Primittiv-Malaien と總稱する。

以上三種民族はすべての原始民族が近接せる高級文化民族の影響によつて農業に移行する以前に見るが如く、彼等は食物蒐集者であり、狩獵者であり、そして又漁業者である。彼等の性質は一般に善良で、和親的で、正直である。嘘は知らない。そして概して平和愛好者なのだ。

世界一般の原始民族に見る如く、彼等の社會組織は單調で且つ愛鄕的の形式である。其社會單位は少數の家族群から成つて居る處の小範圍のものである。酋長制度は未だ充分に發達して居らぬ。婦人の位置は一般に惡くは無い。一夫一婦が普通である。トアラ族アンダマン住民では之れが唯一のものであるが、マライ半島の住民クブ族、フィリッピンのネグリト族では時としては一夫多妻の例もある。ボルネオのプナン族パラワン列島のバタックでは一妻多夫の事もある。結婚前にはアンダマン、クブ族では（稀にアエタ族でも）結婚前は自由婚であるが、結婚後には通常貞操が守られる。東スマトラのサカイ、パラング、ママック族の一部、マライ半島の一部では母權の强大なる事實が認めらる。

物質文化に關しては、之れ等の民族が殆ど石器を使つて居ない事が注目さるべきであらう。ネグリト及びウェッドイドの文化は一見新石器時代を經過せざる如く見えるほど簡單である。然しトアラ洞窟を發掘した結果に依れば（サラシン氏）多數の石器が發見せられ、此ウェッドイド族は立派なる石器時代を經過したものだと思はれるし、スマトラのトブレルス遺跡を發掘した結果に依つてもこれが立證せられる。然し兎に角之れ等住民に於ては武器及び器具の材料として石が缺如して居るのは顯著なる事實であつて、之れに代ふるに木材、竹材、籐材等を以てする。此意味に於て木時代或は竹時代とも云へる。棒の如きは根瘤を掘り、或は原始農業に於て苗を植ゑるに用ふる穴を地に穿つに使用される掘り棒が武器以外の用である。衣服はアンダマン人及びマライ半島住民が幾分着用して居る外は裸體に近い。身體裝飾品も亦乏しい。洞窟住居が時によつて見られるが、家屋は甚だ發達せざるものである。家畜の數も乏しいが、犬だけが家畜として通有のものである（但しアンダマン人は除外す）。鷄は飼つて居る事が多いが、之れは近接民族から輸入したものであらう。

狩獵、漁業の外に野生の草木、木瘤、果實と野蜂の蜜とが主要なる食物である。近年輸入された酒類の外に飲料を釀す事を知らない。アンダマン人の如きは殊にさうであつた。宗教的方面も甚だ原始的で、中等度文化種族に發達せる幻術、妖術も之れを使用するだけの宗教心の發達がない。

要するに之れ等の種族は其生活に於て最も原始的なものであるが、各種族に於て文化形式を異にして居るから之れに就いては後に記述する。

いま民族誌に入る前に上記三種族の人種學的記載を行ふこととする。

一　ネグリト族

前述の如くネグリト族の主として占居せる地はアンダマン島、マライ半島の中央部山岳地方（セマング族）、ル

第一圖　ネグリト族の分布

スン島東北部（アエタ族）の三箇所である。圖に示した横線の部位がそれである。圖の縱線はネグリトの混血が濃厚なる種族の所在地を示すものであるが、ルスン、マライ半島以外、ミンダナオ、印度支那半島南部等今日ネグリトの殆ど住居せざる地にも可なり濃厚なるネグリト混血が廣く存在する。これで分る通り、ネグリトの分布は昔時甚だ廣かつたのである。

最近私はフィリッピンのネグリトを中心として可なり詳細にネグリト原始文化を論じ、インドネシアに於ける石器時代文化に論及した[註]から、茲には比較的簡單に――少くとも上記論文と重複せざる範圍に記述することとする。

註　此論文は太平洋協會出版「フィリッピン自然と民族」（昭和十七年河出書房發賣）にある。有志諸氏は參照せられたし。

一般にネグリトは身體小にして、皮膚色は近接民族よりも暗黑色であり、頭髮の強く縮れたるを特色とする。然し上記三箇所のネグリトは其所在地が離れて居るので身體的に多少の差がある。即ちフィリッピン及びアンダマンのネグリトは強い短頭で身長は平均百五十糎（男性一四七―一四八糎・女性一三八―一四〇糎）であるが、マライ半島のネグリト即ちセマングは寧ろ中頭で身長稍大（男性一五二糎）である。

マライ半島にもセマング Semang と云はるゝネグリトが住居する（Perak, Kedah, Kelantan 地方）。但しセマングは山地に住して居るのであるが、南部に於ては後述のスノイ Senoi 族と接し、其間に雜種を生じて居る。

アンダマン人はミンコピ Minkopi と呼ばれるのであるが、一八五八年の疫病以來著しく其數を減じ、一八五八年六千人と推測せられたるものが、一九一一年には千三百人に減少した。

ネグリト族の使用し居れる日常言語はアンダマン島では外界との交通が不便であるために一番多く其固有なる言語を保存して居るが、フィリッピン島のネグリトはインドネシア語となり、セマングは他民族語たるオーストロアジヤ語を話す。

二　ウェッドイド族

ネグリトよりも廣く分布せるものはサラジン氏等がウェッダ類似種族なるが故に、ウェッドイドと名付た人種

である。此人種の毛髪は波狀であるが、ネグリトの如く强く縮れては居らず、身長は小型ではあるが、ネグリトよりは大型で男性一五三―一五八糎である。皮膚の色もネグリトよりは淡であつて、中等度の渴色を呈する。頭髪は黑色で、眉間は强く突出して居るために眼は凹んで、其ために野生の顏貌を强く現はす。眼に蒙古襞を缺如する。鼻根は偏平にして鼻背は低い。之れに反して口部は前方に突出し口裂は大きく唇は割合に薄い。

ネグリトと同樣にウェッドイドにも各種あると云はれる。之れは他種族との混血に依るのでもあらうし、又局所的に特殊の發達を遂げたのでもあらう。それでスノイ男性は身長一五二糎、トアラ Toala 及びサカイ Sakoi は一五六糎、頭形は中頭であるが、スノイ Senoi はどちらかと云へば長頭に傾き、トアラは廣頭に傾く。

ネグリトと異つてウェッドイドには割合に純血なものが少ない。マライ半島中央部の山岳地帶特にペラク、ケランタン、パハング、スランゴールに住居せるスノイ及びサカイは此種族の純粹なものとして知られて居る。

スマトラに於ても此種族に近似せるものがあるが、シヤク Siak 州のサカイ Sakoi 族、パレムバング州のクブ Kubu 族は可なりの混血があるらしく、又ルブ Lubu 族、ウル Ulu 族、ママク Mamak 族、のみならずバタク Batak 族、ガヨ Gayo 族等にも此ウェッドイドの混血が存在するらしいと云はれる。エンガノ島及びメンタワイ島の住民にも此混血が認めらるゝのみならず、ニコバル島の住民、特に大ニコバール島の內部に住せるショームペン Schom Pen 族にも著明なる混血があると云ふ。ジャワ・ボルネオにもウェッドイドの混血は多少及んで居ると思はれるが、セレベスに於ては特に之れが顯著である。卽ち南西部のトアラ族、南東部のトケア Tokea族に混血が著明であるのみならず、セレベスの東南に存在せるムナ島に住せるトムナ Tomuna 族の一部にも及んで居る。フィリッピン及びモルッケン及び小スンダ島の住民にもウェッドイドの混血がある。又北方に於てはウェッドイド種族は印度支那半島にも及び、此半島の住民に於ける非蒙古體質と云はるゝものの中には、此種の混血が少くないものらしい。此非蒙古的體質なるものはイラワディ河に沿ひて深く西南支那に及べるものである。

言語の點に於てウェッドイドに屬せる諸種族には其固有語を話すもの一もなく、悉く近接民族語に化せられたと云はれる。例へばウェッダは古いシンガーレス Altsinghalesisch 語を話し、サカイはミナンガバウマライ Minangkabaumalaisch 語を話し、クブ族はマライ語を話して居る。そしてマライ半島のセマング及びスノイはオーストロアジア Austroasiatisch 語を話す。

以上私はインドネシア地域の古人種層の主要なるものにネグリトとウェッドイドありと云ふ說が假りに正しとして敍事を進めたのである。此中でネグリトの存在は今日では殆ど公認の域に達して居り、近年發表せられたるニッポルド氏の著述の如きはネグリトに關する綜合的好著である。

(註)　Nippold, W. Rassen-und Kulturgeschichte der Negrito-Völker Südost-Asiens. Leipzig 1936.

然しながらサラシン・ブシャン氏一派の主張するウェッドイド族の存在は (Buschan. Illustrierte Völkerkunde. Stuttgart 1923.)、ネグリト族の存在ほど確定的のものでない。然し私は今ウェッドイドを含めて敍事を進めることとする。といふ譯は今日是等民族は旣に大東亞共榮圈內に入つたので、我國學者が親しく彼等に接し、

此學說の當否を研究し得るからである。そして其れが我國人類學者に課せられたる一問題でもある。

三　原始マライ族

インドネシアの原始民族からネグリト族を除去し、又更にウェッドイド族を除去した殘りが、此原始マライ族だと云ふ。然し原始マライ族中にどの程度の小種族を入れてよいものやら可なり疑問がある。それと云ふのもネグリト及びウェッドイドの混血範圍が廣くして、或意味で之れをネグリト及びウェッドイド中に準じてしまうと、其後に幾種族も殘らないからである。マライ半島のジャクン Dschakun、マントラ Mantra、ブシシ Besisi、ブランダス Blandas、リァウ群島のオラング・ブヌア Orang Benua、それからバンカ、ビリトンの古住民、スマトラの小種族卽ちオラング・ママク Orang Mamak、オラング・ルブ Orang Lubu、オラング・タラング Orang Talang、クブ Kubu 等がそれだと云はれる。これ等小種族殊にクブはウェッドイドの血を混ずる、そしてマライ半島の小種族にはセマング族の混血があるし、又パラワン島のタグブヌア Tagbunua、ミンドロ島のマンギアン Mangyan 人にもネグリトの混血が强い。ボルネオ島のプナン Punan、オト Ot、ブキタン Bukitan は割合に純粹で無難なウェッドイドではないかと云はれる。

第二章　ネグリト文化の概括

三種のネグリト族（アンダマン、マライ半島、フィリッピン島）は弓矢を持つて居るが、ウェッドイド族等は之れを有しない。但しネグリトの弓矢の形狀は場所の異るによりて種々である。ただセマングの弓と小アンダマン島人のそれとは類似を示して居る（但しトアラ洞窟に於ける石鏃の發見は、ウェッドイド等も嘗ては弓矢を有せし事を語るものであらう）。其他ネグリトは獸の頭骨及び四肢骨を吊り下げたる狩獵用の太鼓を有す。ネグリトの天神或は天氣神に對する信仰にも共通のものがある。此神はセマング人はカリ Keri と呼び、アンダマン人はプグア Pugua 或はビリク Biliku と呼び、後者は多くは女神である。

皮膚に傷を入れて作る瘢痕裝飾はアエタ及びアンダマン人には屢〻見られるが、セマングには稀である。アエタ及びセマングは樹皮を以て衣服を作るが、之れは近世に於てスノイ族或は其他の人種から學んだものらしい。そして此技術はアンダマン人に存在しない。アエタ及びセマングは種々の形式の木製櫛を作るが此種の櫛も、南洋の他種民族に廣く分布して居るから、他種族から其製作を學んだのかも知れない。

アンダマン人及びセマング族は死者を葬るに屈葬を行ふ。特殊の場合に於てのみ樹木の上に屍體を置いて風葬を行ふ。住宅はアエタ、セマング共に極く粗末なる草葺小屋であるが、アンダマン人は圓形或は卵圓形の可なり大なる草葺の家を作る。此兩者の住宅の間に相互關係ありや否やは甚だ疑はしい。其他三者の一致する事は一神

崇拜である。

之れ等風俗上の共通點は原始ネグリト文化の存在を物語るものであらうが、彼等の位置が相互に離れて居るためにマライ半島及びフィリッピンでは高等文化種族と接觸する事によりて種々の技術、例へば鐵器の使用、吹矢、高床家屋の建築だとか、笛、或は彈弦音樂器、或は所によりて原始農業を行つて居るが、之れ等はいづれも他人種から學んだものである。

全體として云ふとセマング及びアエタはアンダマン人よりは文化が低い。殊に器具及び裝飾品の數と形式とが乏しい。又土器製造術、小艇建造、貝斧使用及び家屋建築に於てアンダマン人はアエタ及びセマングよりは勝れて居る。それにも拘らず、アンダマン人は印度洋中の孤島に住し、外敵からの防禦心が強くて外部からの交通を阻んで居つたものである。

此所に於てか共通的のネグリト文化を考へるに際して二つの可能性が生ずる。（一）それはアンダマン人は新石器時代文化に於て、他種民族の影響を受けた事が強かつたのに反し、アエタ及びセマングは此影響を受くる事が僅かであつた事、（二）アエタ及びセマングは近傍に高度文化の種族が住居せるため、反つて他種族に壓迫せられて山中或は海岸に後退し、之れがため文化の退化を來したものであらうと云ふ事、此二つの可能性は何れも事實上存在したものだと思はれる（ハイネ・ゲルデルン氏說）。

一　アンダマン島のネグリト族

アンダマン人は言葉の上から云ふと十二種の小種族に分れるが、大きく分けると三種族となる。中部アンダマンの北半部及び北部アンダマンに住せるものはエレウ族 Yerew である。中部アンダマンの南半部及び南アンダマンに住せるものはボジンギジ族 Bodschigngidschi である。小アンダマンにエンゲ族 Ünge が住して居る。但し此外南アンダマンの內陸にはジェラワ族 Dschirawa が住むが、此族はエンゲ族と關係深いものであるから、エンゲ族の中に入れて扱つてよいものらしい。

家族長の首に酋長がある。酋長の權力は大でない。一夫一婦であるが、結婚前の野合は禁ぜられて居らぬ。小兒時期からの婚約は稀にある。妻死ねば妻の妹と結婚する事及び寡婦が夫の兄弟と結婚する事がある。親類以外との結婚は自由である。童男童女は十一乃至十三才に於て成年式を行ふ。此際種々の食物の禁忌がある（龜肉、蜂蜜、豚脂）。此禁忌は一定の儀式が行はれると止めになる。しばらく會はなかつた親族が會合する時の方法は注意すべきもので互に抱き合つて激しく泣く。

食物としては狩獵の獸肉、特に野生豚のそれが重要である。魚、龜肉の外に貝、昆虫の蛹蜜、野生植物の實及び根、特にヤムが重要である。肉は火に炙り、或は過熱せし石上で燒き、或は土器の中で煮る。

エレワ族とボジンギジ族とは定まつた住家を持たないことセマングの住居狀態に似て居る。彼等が住居しよう

と思つた場合には雨露を防ぐだけの草茸天幕を作る。やゝ長く居る場合には少しく上等なる小舎を作る。長く居る場所には直徑十米突高さ五米突の圓形小舎を作る。ヱンゲ及びジェラワ人は狩獵及び漁業に際しては乾燥時期を撰ぶのであるが、更に丈夫な住宅を作り、雨期の用に供す。此住宅は更に大型な楕圓形の小舎で中央部は圓錐狀の高まりを爲し、二十米突の直徑で十米突の高さがあり、原始的家屋とは云ひ兼ねる程のものである。

寢床としては繩を上手によつてこしらへた編み筵を用ひる。そしてジェラワ人は木枕を使用する。

衣服として兩性ともに椰子の葉で作つた巾細き帶を使用し、帶から總が下つて居る。女は特に此總が長く垂れて恥部を被ふ。然し男性では往々全く裸體である。ジェラワ族では女すらも殆ど裸體に近い。子を負ふには女は荷ひ紐を使用する。其他の裝飾としてはパングヌスの齒から作つた紐狀の腕及び足飾を卷く。又兩性共に同樣の紐で作つた鉢卷きをする。其他貝殼、珊瑚枝、獸骨、或は人骨に穴をあけて絲で貫いた首飾を卷く。其他細かい貝殼に穴をあけて絲を通した首飾及び腕飾を用ふる事もある。全體として云へばアンダマン人の裝飾品は原始文化階級の民族の使用品として通常見る範圍内の各種形式を示して居る。但し耳飾及び鼻飾は無い。瘢痕裝飾はヱレウ及びボジンギジ族には存在するが、ヱンゲ及びジェラワ族には無い。男性と女性の瘢痕裝飾は同じ程度に行はれる。水晶を打ち割つた破片を以て皮膚を切ることに依つて瘢痕を作る。また此破片を剃刄に利用して頭髮の一部分を剃る。

狩獵及び戰爭に廣く用ひらるゝ武器は弓である。之れは木から作られて弦には樹脂を塗つて固めてある。ヱンゲ、ジェラワ族では横斷面が半圓形をなせる簡單な弓を使つて居るが、其他の種族ではS字狀に彎曲し、中央部が細くなつた平盤なる大型弓を使つて居る。此弓はニューヘブリート島のそれと類似せるのは注意すべきである。矢は羽の添加を見ない丸矢である。そして細竹から出來て矢の先には火で焙つて固めた木がついてゐて、之れに貝殼製の鏃或は鐵鏃がついて居る。古くは魚骨を以て作つた矢の根を使つたし、又赤鰐の棘を使つた事もある。野豚狩りには有紐離頭矢を使用するが、此矢の先には引つかゝりがついてゐて、之れに紐が結びつけてあるので、野豚に適中せし後には矢先は獸體に止り、獸の遁走を防ぐに重要なる役割をして居る。其他槍も野豚狩りに使はれる。ボジンギジ人は銛を海龜獵に使用し、西南太平洋の原始民族共通の事實として楯を使用する事を知らない。防禦武器としてはジェワラ人は木皮で作つた廣い帶を使用するだけである。

狩獵は食料を得る目的のみならずスポーツとして行つて居るのである。狩し得たる野豚の頭蓋骨は注意して保存せられる。それでジェワラ族の部落に於る大型の家には頭蓋骨の數百個が掛べられて居る。魚はやはり矢で打つか手網で捕へる。然し時としてはツバ根の中毒に依つて捕へる事もあるし、稍大型の網を河口に裝備し之れに魚を追ひ込む事もある。

武器及び器具の材料としては木材、竹材（例へば小刀に作る）、野豚の齒、特に屢〻貝殼を使用する。貝殼の大きさと品種とを撰んで、或は小刀とし、斧の柄、矢の根、食匙、皿等に作る石材は極くわづかより使はれて居らない。即ち加工せざる自然石を槌、砥石及び料理石に使用し、加工せる石材は頭髮を剃るのと瘢痕裝飾とに使

用する。此加工は水晶質の石片を熱し、之れを冷却せしむる際に打撃を與へて鋭利なる破片を取りて之れを使用するのである。かくの如き事實はアンダマン人が近い頃まで新石器時代にあつた事を示すものである。

レープスドルフ Roepsdorf 氏はアンダマンの古い部落跡から二箇の磨製石斧と一箇の石鏃とを得た。此種遺跡がまだ一向島内で究明せられて居らないので、之れはアンダマン人の殘したものであると云ひ切るのにはまだ材料が充分ではないが、石器は此島産の石で造られて居る。又アンダマン人が使用せる貝斧は其形狀に於て新石器時代の斧に似て居るし、此斧は西南太平洋諸島に擴がれる形式のものでもある。

鐵を製造する方法をアンダマン人は知らない。輸入鐵片を熱せずして石を以て打ち叩き、槍又は矢の先に使用し、又斧及び小刀の刃として使用する。

船は火の助を借りて（島民の或者は船造りの際に丸木船に凹みをつけるのに火を焚いて凹ませる）、貝斧及び鐵斧を以て丸木に凹みを穿つ。片側に防頭覆裝置として浮木を附したる小型のカヌーの外に、ボジンギジ人は十五人乃至四十人乘つて航海に堪へる大型丸木船を造る。但しかくの如き大型のものは鐵の使用せられし以來出來たらしいと思はれる。

土器は男女共に製作するが、適當なる土塊から之れを引伸して作る事もあるし、又土紐を重ねて卷上法にて作る事もある。そして模樣を付して素燒とする。此外木製及び竹製の容器をも使用する。

其他の物質文化方面で注意すべき事は家畜を全然缺いて居る事である。犬すら之れを飼はず、そして發火法すら解しない。それがため旅行するには火種を持參する不便がある。但しアンダマンの口碑を檢討すると、彼等は曾て發火法を解して居つたのであつたが、今日之れを忘却してしまつたものらしい。

唯一の樂器としては楯形の木製鳴り板がある。凹んだ面を地上に置いて踊りの時に足拍子と共に之れを踏み鳴らすのである。踊り祭は終夜に亙つて續く事があるが、彼等は大變之れを好愛する。

死者は屈葬するか、又は立木の大枝の上に寢た姿勢で風葬する。小兒は兩親の小舍の地下に埋葬する。風葬した場合には肉が腐つた後に骨を洗つて細骨は穴を開けて頸飾として遺族が使用するか、又は他人に贈與する。頭蓋骨と下顎骨とは貝殼を貫いた飾り紐を附し、且つ往々骨に彩色を施して親族又は友人が交る〳〵頸から下げる。彼等は是等の骨は疾病の豫防と治療とに效果あるものと信じて居る。

アンダマン人は惡靈を恐れてをる。それに逆らへば疾病に罹り或は頓死すると思つてをる。そして焚火により て惡靈を追ひ拂ふ。但し如何なる場合にも犧牲は供しない。天氣の神ブルガスとビリクスとを信奉する事は前掲の通りであるが、此の他太陽と月とを信仰する。種々の場合にタブー樣の食物禁忌がある。超自然力を有せりと信じらるゝ妖術師がある。此者は靈界と交通し未來を豫言すると思はれて居る。

從つて全體としてアンダマン人の文化は甚だ原始的であるが（犬を飼育せぬ事、樂器の缺如、發火術を知らず、妖術及び靈界に就ての知識の低級なる事等）、同時に又風俗が著しく古式なる事を忘れてはならない。此古式習俗は曾ては西南太平洋諸島に廣く分布して居たものをアンダマン人は今日尙保持せりと信ずべきであらう。割合

に圓形家屋の製作の巧みなること、舟の形式の進んだ點、そしてまた土器製作と祖先頭蓋の尊重とは、或はニコバル島住民の文化の影響を受けたためかも知れない。

二　フィリッピンのネグリト族

フィリッピン島のネグリト族に就てクレーベル Kroeber 氏は「彼等の固有文化は今日全然失はれ、彼等の使用する器具は近接民族に見らるゝもののみだ」と云つたのは多少云ひ過ぎだが、大體に於て眞に近き言である。ネグリト住居としては竹で粗末な骨組みをして、之れに草の葉で編んだ筵を張つた板狀物を造り、四十五度の角度で地面に立てかけただけのものだ。彼等の使用する竹櫛は西南太平洋諸島に廣く分布せるものなることは前述の如くである。その他の身體裝飾品としては、竹或は樹皮を卷いて造つた耳飾があるし、木の實或は骨片に穴の開けた首飾と同質の腕輪がある。又男性には此他膝部の下方に施された野猪の剛毛から製せられた帶狀足飾がある、此種の野獸を獵するに足りる剛勇な證である。

木綿の輸入せられざる地方では、衣服として男では褌があり、女には恥部に短かく垂れ下つた布片がある。いづれも木皮製の布で作られる。アエタ族は竹製の櫛の外に、齒を磨り減らして尖らす風習、各種樂器の使用（太鼓、角笛、竹笛、琴の類）、遺骸を木棺に入れて埋葬する風習、奴隷使用、結婚に關係ある諸種風習（賣買婚、結婚儀式）があるが、所によりては此ネグリト族は既に農業を始め、又杭上家屋に住して、小刀及び矢鏃に鐵を使用して居る。然し之れはいづれも隣接民族からの輸入品又は輸入習俗である。弓は木或は竹を以て作られ、端部に鐵又は竹の鏃を附し、之れに毒が塗つてある。矢には羽が附してある。銛の頭部には鉤が附いて居ることアングマンに等しい。

パラワン列島のバタック人は弓矢の外に吹矢を使用する。狩獵には犬を使ふ。醉を發する飲料を釀す事を知らない。檳榔子を嚙む風習は僅かに擴がつて居るに過ぎない。煙草はシガーの形で喫するが、火の附いた方の端を口中に入れる。（尙フィリッピンのネグリト族に關しての詳細は第一一頁に記せる如く清野の別論文を參照せられ度し。）

三　マライ半島のネグリト族

アエタ族よりもセマング族はネグリト固有の習俗を多量に保有し、固有の言語を多く保存する。マライ半島ではネグリト系のセマング族とウェッダ族系のスノイとが隣接して居住し、共習俗をお互ひに影響し合つて居るから、此兩者を併せて記載する方が便宜が多い。

住宅としてはマライの影響を受けた杭上家屋もあるが、草葺きの日覆ひ程度の住宅、小形の木舍の外にセマング族では蜂の巣樣の椰子の葉で葺いた、高さと直徑共に一米突位の圓形小屋もある。奥地のセマング族は三日以上同一場所に居る事稀なりと傳へられる。

セマング族とスノイ族共に樹皮で織つた布で男は褌をしめ、女は短布を下げて居るか、又は男同樣の褌を用ふ

る。其他腰帶に色美はしい羊齒と植物纖維を取り附けたものを用ふる。此羊齒の飾はスノイ及びセマング共に使用するのであるが、古式裝飾として甚だ特色あるものである。其他の身體裝飾として羊齒、或は籐又は椰子の纖維の編み物から出來た頸飾、腕飾があるが、又此頸飾、腕飾は羊齒、貝殼、植物の種子から作られたのもある。そして芳香ある花葉を婦女は帶、頭髮、耳朶の穿孔部等に插入する。樹皮布を以てせる鉢卷きはスノイ族に多く用ゐらるゝものであるが、鼻中隔に穿孔して横に山あらしの針を通した裝飾は一般的には廣まつて居らない。兩族共に婦女は頭髮中に竹製櫛を插すが、此木櫛には彫刻がある、これはセマング族には疾病或は各種の危險を除去するものと信ぜられて居る。竹製簪も亦使用せられる。瘢痕裝飾は稀である。顏面及び體部の皮膚を彩どる習俗は頗る廣く行はれる。

セマング族固有の武器は二米突に及ぶ長弓であるが、近年吹矢の使用が多くなつて弓の使用が減つた。矢には羽根が附してあるが、ほんの申譯けだけのもので、羽を附する效用を爲さない程度の退化現象である。

吹矢はスノイ族の武器でセマング族の大部分も之れを使用するが、筒は二重ある。上覆ひの筒と內部の吹筒とであるが、吹筒の口部には木片或は乾燥した樹脂が取り附けられて太くなつて居る。吹矢としてはベルタム椰子の葉柄が使用せられる。そして矢尖には毒が塗られて居る。槍先にも竹或は鐵が用ゐられるが、鐵はマライ人から輸入する。然しセマング人の一部は原始的の鍛冶を解し、矢の根、槍先位は自分で造る。土器製造を知らない。樂器（口及鼻笛、太鼓等）は大部分異種族からの移入である。此中でスノイ及セマングの固有樂器は一端閉鎖せる管狀竹製樂器で、地上或は樹幹に打ち當てて調子を合せる音を發せしめる樂器（發音筒）である。

竹製器物には裝飾文樣の彫刻がある。例へば櫛、簪、耳飾、吹矢筒、發音筒、宗教用器具の類であるが、文樣は動植物に由來せる意匠多く、人間の形は少ない。此文樣も狩獵の呪、疾病及び危險の防禦の意を寓する事が多い。

死體はセマング族に於ては仰臥蹲葬として地に埋める。妖術者の死體のみは樹上に風葬する。それは高處に居つて其魂が死の國から人々を守るためである。スノイ族は近年まで死者を死んだ所に横はらしめて自分達は逃げた。然し近年は遺骸を埋葬する。

スノイ及びセマング族の宗教的及び神話的の觀念に就ては多く知られて居らない。妖術とシャーマン教とが此兩種族を支配して居る。セマングに於ては妖術師が酋長である。然しセマングに於ては怪物と死者靈に對する恐怖はスノイに於けるよりは遙かに輕い。セマングは最上の神はカリ（Kari 雷神）であつて、世界創造者且つ精神指導者であり、氣象を司り、疾病と死とを送る。第二の神ブル（Pie）は地と人を造り、カリ神と人間との仲介者である。其他の神は此二神の從者、或は配偶者である（Vaughan-Stevens 氏報告）。然し又所によりては次の如き傳說もある。即ち地の母の息子たる世界創造者タペン Ta Pöun は白色であつて東に住し、其對抗者としての眞黑の神カクー Kakuh は死の國の支配者として西に住む。

他のマライ系原始民族に於けるが如く、セマングには部落トーテミスムスは無いが、個人的のトーテム、そして又或る意味に於て兩性間のトーテムはある。そしてスノイでもセマングでも親子兄弟は勿論として義理の親子

間の結婚は禁ぜられて居る。

此兩種族の宗教的觀念に就てどれが古く、どれが新らしく、又どれが外來で、どれが固有であるのか、よくは分つて居らぬ。此地方古くからヒンヅー教、佛教、イスラム教が相次いで輸入せられた。それだから自然に印度、タイ、アラビア、マライの信仰、傳說が混入して居る。世界創成の觀念、天界と地獄、生と死、魂の問題、天賞と天罰等は近接せる高級文化諸民族からの輸入思想が多い。

斯くの如き次第であるから、セマング、スノイ、アエタ、クブ等は其固有言語を失つたのと考へ合せて、其固有習俗も甚だ多く失はれたものなりと觀ぜざるを得ないが、同時に又彼等習俗中にはマライ系の原始民族としての近接民相互の風習が織り込まれたことも見逃がせない。

第三章　セレベス・スマトラに於けるウェッドイド族

上記の如くスノイ族は他種文化を大いに混入しては居るが、固有文化をも相當に保持せる種族である。此外に高級文化との觸接によりて其固有文化の大部分を失つた民族が少なくない。たゞ時々其住宅、聚落、社會構成等の何處かに彼等の原始生活を遺殘してをるが、此遺殘から原始生活を復原するのはウェッドイド族はネグリト族よりも困難である。

サラシン氏によりて南西セレベスに於て發見せられたるトアラ Toala（森の人の意）は古式の體制として洞穴に住居して居る。尤も近年は洞窟の地上に住居せずして洞穴中に極めて原始的な杭上小屋を造つて居る。トアラ族は今日では農耕に移つた。家畜としては犬、鷄を有する。武器としては槍として尖つた竹を所持せる外、人の頭髪の束を附した棍棒を持つて居る。此棍棒には昔は多分石器を取り附けたのであらうが、今日では其側端に金屬片を附してある。彼等の考へ方、また外人に對する嫌惡感等は原始的民族のそれである。

南スマトラのクブ Kubu も甚だ原始的な人種である。彼等は小家族で森林中を狩獵して廻る人種であるが、近年海岸マライ及び和蘭人の感化で大部分は定住的となり、且つ原始農業を營むに至つた。彼等は今日回教徒である。

クブ族の未開化のものは極めて粗末な杭上小屋に住む。それは屋根を葉で葺いただけの低くて小さい小屋で、壁はない。衣服としては樹皮製の褌を男女共に卷くのみだ。マライ人から輸入した蠻刀の外に、唯一の武器は投槍である。以前には之れは全部竹又は木製であつたが、近年マライ輸入の金屬片を尖端に附す。掘る道具としては竹片があるだけだ。携帶品は背に負ふ籠がある。家畜は犬と鷄だが、鷄は輸入したものだ。踊に樂器は無い。宗教的觀念の發達は低い。死者は死んだ場所に殘して置く。其他地中に埋める事もあるし、木の幹に開いた穴の中に入れる事もある。凡ての場合に彼等は死者の場所から逃げる。半開化のクブ族でも死者があると一二箇月は居住地を去つて森の中に隱れる。然しクブ族も近年マライの感化によつて開化し、舊俗を失ひつゝある。

第四章　ボルネオ及びフィリッピン等の原始的マライ族

マライ半島の原始的マライ族として知らるゝものに、ジャクン Dschakun、マントラ Mantra、ブシシ Besisi 等の諸族が居るが、今日では主として原始農民になつてしまつた。然しスノイとセマング族に近接して居るので、顏を色彩る風習、舞踊時に葉蓑を以て飾る風習、竹具の文様等には共通せる所が少なくない。男性に於ける古式の樹皮の褌、女性の短衣等は彼等が森に行く時に着けるだけで、日常にはマライ服裝になつてしまつた。尤もまだ農業を營まざる連中は森林中を徘徊して、二三米突の長さの椰子葉を束にして、根本を縛つて、此束を中心部で集めた小屋を住家として居るが、多くの者にありては壁の無い、屋根と床のみの杭上家屋に住む。樹上家屋もある。武器としては槍と竹製吹矢がある。

ボルネオ島内部にはブナン Punan、ブキタン Bukitan、ブキト Bukit、オロ・オト Olo-Oto の諸族が居る。此者も西部ボルネオでは既に一部は農業化して居るのであるが、原始的の部分ではブナンは二三十人の男女が一團となり、それに屬する小兒を連れて、野生のサゴと木の實を食ひつゝ森林中を狩して居る。住家としては椰子の葉で造つた小屋があるが、往々洞窟を利用する。武器は木製吹筒であるが、吹矢の先には鐵片（近接のカヤン、ケニア族からの輸入品）を使用する。背負ひ籠を編むのと、編み筵を作るのとは上手である。樂器としては簡單なものが二三ある。狩獵に際しては竹製の笛で獸の鳴き聲に似せておびき寄せる。一夫多妻は無いが、一妻多夫はある。夫は妻の家族に入る。妖術は近接の高度文化の民族から輸入せられて醫治をも行ふ。一種の鰐崇拜があつて、一家族は木製鰐を相傳する。遺骸は埋葬せず、唯木の葉を以て之れを覆ふ。

ブキト、ブキタン、オロ・オト等の習俗も大體に於てブナンに似た程度である。たゞオロ・オトに於て注意すべき埋葬法として、立木の幹に穴を穿つて此中に遺骸を入れたる後に穴を封じ、分らない樣にして去る。

ブナン族及びボルネオ島に於ける其類似種屬はマライ半島、スマトラ、セレベスの原始民族に反し高級文化種屬に對し、其主張を枉げない。そして屈せざる氣質をもつて居る。彼等は卓越せる吹矢の術を解して居るので、其復讐を森林中に行ふ場合には甚だ恐れられて居る。かくの如くして彼等は戰に對しては豪膽なる種族となり、所に依りては未だ尙首狩りを行つて居る。但しブナン族の一部分は、既に彼等の近接種族の感化に依つて農作に移行して居るのであるが、カヤン族の村は時としてブナン族によつて全く荒されて了ふ事もある。

フィリッピンに於ける原始的マライ族は、ミンドロ島の內部に住せるマンギャン族及びパラワン島のタグバヌア族によりて代表せられるが、此兩民族共にネグリト及び恐らく又ウェッドイドとの可なり强い混血がある。

マンギャン族の一小部分のみが今日狩獵と食物蒐集に依りて生活して居る。乾燥期には簡單な組木を作つて其上に椰子の葉を竝べた小屋を作つて住んで居るが、雨期には杭上家屋を建てて屋根に椰子の葉を葺いて住居する。但し壁は無い。しかし大多數のマンギャン族は既に多少燒畑耕作を行ひ、之れにタロ芋、陸稻を植ゑて居るが、

重なる食物は野生のサゴ椰子である。衣服としては未開化の處では男女共に樹皮製布で作つた褌をつけて居る。但し女に於ては腰に籐製の帶を纏つて居る。少女は其他乳の部を編物で作つた帶で被つて居るが、結婚した後に之れを除く。マンギャン族は木製の弓を持つて居るが、矢には木製或は竹製の鏃を附し、之れに毒が塗つてある。注意すべきは太鼓の合圖を以つて行ふ處の言葉である。之れは太い樹木の根に細い木の根を張つて作つた太鼓を打つのであるが、同樣なる事はクブ族も之れを行ふ。一夫一婦が通常であるが、時として一夫にして二妻を有する事がある。家族群及び聚落は甚だ小さく、且つ家屋相互は離れて居る。酋長權の相續は無いらしい。マンギャン族の氣質は平和であり且つ正直であるが、外人に對しては甚だ臆病である。宗教的觀念に就いては餘り知られて居らないが、靈崇拜と犧牲を供へる觀念は無いらしい。然し惡靈に對する防禦工作は行ふ事がある。埋葬法は部落に依つて異るが、クブ及びセロン族等に見る如く、死せんとするものを遺棄して逃げて行く事があるらしい。そしてしばらくの後に歸つて來て既に死んでゐるかどうかを見るのである。他の村では死んだ處の小舍の中に死體を殘して逃げ去る。簡單なる土中埋葬と、死骸を單に地上に寢かして之れを葉で覆ふ事もあるらしい。又洞窟中に埋葬する事もあるらしい。通常死者があると其場を去つて約一年間は歸らない。時とすればクブ族に見る如く親族は暫時森林中を徘徊し、其名を變へる事もある。注意すべきはマンギャン族と、タグバヌア族は一種の文字を有して居る事である。それで竹製器具には其文字を記すが、マンギャン族は左から右へと書し、タグバヌア族は上から下へと書す。之れ等の文字ある事は古代文化の影響を受けた結果であると思はれる（マンギャン族の一部は土器製造及び木綿織物の製造を解す）。そして一部分は農作を行つては居るが、全體としてはマンギャン族及びタグバヌア族は原始的なものである。

＊　＊　＊

以下私は上記の原始的な山の住民たる諸種族とマライシアに於ける中等度の文化階級の住民との間に於ける文化の移行に就て少しく記す事とする。交通の最初は狩獵者であり、且つ食糧蒐集者たる彼等が農耕者たる高度文化階級にある隣接民族との間に開かれた沈默物々交換に始まると云はなければなるまい。今日でもマライ半島とボルネオの一部及びトアラ、クブの一部に之れが行はれて居るが、其内に信賴し合つた家族が出來て自由交易が始まる。そして鐵器の外に土器、木綿類が高等文化民族から提供せられ、狩獵及び森の產物が低級民族から提供せられる。其内に隣接民族の生活を眞似て果樹を植ゑたり、燒畑或は段丘農耕が始る。クブ、ヂャクン族等は森林產物として敎へられるまゝに樟腦、グマール樹脂、グッタペルカ、籐、蜂蠟を採集して居る。そして農耕となるに從つて住家は定着的となり、漸次强固なる杭上家屋が出現したのであるが、其前身は椰子の葉葺の粗末な天氣小屋である。所により又種族によりて其種類と程度は異にするが、上記の原始民族は原始土俗を多分に保有する。

さりながら高等なる民族との觸接は高等文化器具の使用を敎へた代りに武器、裝身具その他に於て固有文化の消滅を來たした。然し又同時に異種文化の吸收によりて文化の豐富を來たした。それは異種文化へ固有文化の融化することによる當然の歸結である。ヒンヅー及びイスラムに發達せる文化がマライ半島からスマトラ、ジャワ

に及び更にフィリッピンに渡來せし結果として、印度系統に由來せる文字をタグバヌア及びマンギャン人に殘した如きは其例である。

今日ではセマング、スノイ及びマライ半島の原始民族の大部分（ブシシ Besisi、マントラ Mantra、ジャクン Dschakun 等の諸種族）、スマトラのクブ Kubu 及びサカイ族 Sakei、フィリッピンのプナン Punan 及びアエタ族 Aëta の大部分は燒畑乃至棚畑耕作の時代に在る。そして是等の植物栽培者として知らるゝ諸民族の生活には到る所に原始生活の俤がにじみ出て居る。すなはち其精神狀態としての異人種に對する嫌惡、住家が矮陋で原始的なるのみならず、其聚落が小にして各家が遠く離隔せる事等に於て著明である。從つて此系統の種族中に此他尙トアラ Toala の外にバンカのオラング・ロム Orang Lom、オラング・マポール Orang Mapor、スマトラのルブ Lubu、オラング・ウル Orang Ulu、オラング・タラング Olang Talang、オラング・ママク Orang Mamak の外にバラ・ウン島のタグバヌアと大ニコバール島內部のショム・ペン Schom Pen をも入れなければならぬ。

第二篇　中等度文化の民族

まへがき

上述せし低文化階級の民族の生活狀態は人類最古の生活を想見せしむるので、研究者に興味があるが、現代人類の生活としては重きを爲すものではない。之れに反して以下說かんとする中等度文化階級の民族は、東亞地中海の諸地方、諸島の住民、換言すればスマトラ、ジャワ、フィリッピン、ボルネオ、セレベス、ハルマヘラ、小スンダ列島及び其間の小島の住民の大部分を占むるもので、人口も多いし、頭腦も銳く、仕事をさせても役立つので、將來も此地方の人的資源として大切な役目を果すであらうし、日本人との交涉も自然に多くなる事と思ふ。

人類全體の文化狀態から考へて中等度文化階級とは初期農耕以上の狀態に在るのである。そして彼等の中で地方によつて印度、イスラム、支那の高等文化の影響を受けたるものは、後章述ぶるが如く高級文化の狀態に達したものもある。

以下述ぶる所は廣大なる東亞地中海と云はるゝ地域內に棲存せる多數人種の生活相ではあるが、此文化の發達は決して一元的基礎の上に立つて居ると云ふのではない。異なりたる時代に異なりたる方向から累積した諸種分

化層が今日諸種族に各特色ある文化諸相を與へたのではあるが、地域的に各人種が近接して居住し、自然環境も熱帶性で似て居るために共通點と類似が多く、從つて又總括的に記述し易いのである。

尤も中等度文化階級であつても種族の異なるによりて可なり高度のものから割合に原始的なものまで、種々の階級がある。之れは種族によりて異なるが、同一種族でも交通便利な土地に居住せるものは自づから文化の度が進んで居るのを忘れてはならない。

第一章　食料・農耕・家畜・狩獵・漁撈

一　二種の農作物

東南亞細亞の農耕には二種の異なりたる植物培養がある。第一種は多分此地方では最も古くから行はれたらしいもので、一定の樹木（サゴ椰子、ココ椰子の類が多い）、又は根莖の食するに足る植物（タロ芋、タピオカの類）を植ゑるのである。第二種は比較的後代から行はれたと思はるゝ穀類移植を主とする農業である。此二種は勿論今日では判然と分れて居らずして混作せられる場合が多いが、第一種の農作は主として東部インドネシア（モルッケン島、アル島、ケイ島等）と西部諸島（ニコバール、メンタワイ、エンガノ島等）に行はれて居る。其他の部分、殊に中部諸島の山嶽地方或は特殊事情無き地域では、第二種法が多い。

東印度西南諸島の食料としては根莖類にはヤムとタロ芋と甘藷とが多い。其他若干の豆類があるが、豆とヤムとの或種類は有毒なので、毒を抜いた後でないと食用に供せられないものもある。

南瓜、甘蔗、胡椒も培養せられる。

バナナは到る所で食料に供せられるし、數多き果實の中でドリアンと東インドネシアに數多きパン果は重要な食品である。

椰子の中で低地に發育し易いココ椰子は食料としてのみならず、利用の途廣きを以て有名である。

ヒマラヤ以南の東南亞細亞の全インドネシア地域の住民はサゴ椰子を好んで食べる。尤も地方によりては此木は餘り生えて居らないから常食と迄は行かないが、モルッケン、ケイ島、セレベス、ボルネオでは多生して居るので住民の主要食である。

サゴ椰子は切り倒して其巨大なる樹幹を割いて其髓をかき出す。之れには特別の器具を製して居る地方がある。木製であるが、セラム島西部では竹製であるし、セラム島東部では打ち缺いた燧石片を一端に着けてある（第二圖參照）。かき出された澱粉塊は木製或は椰子の葉で編んだ槽（おけ）の中で洗ふ。そして漉して、水を和してねつて粥狀物とする（モルッケンで

第二圖　男く掘をサゴとして用使を具器し出き掘

は之れをパプダと呼ぶ)。地方によりては土製竈でパン様に焼く事もあるし、又餅狀にして焼く事もある。野生サゴ椰子の缺乏した所では、必要に迫られて之れを移植して居る所もあるが(ボルネオ、ミンドロの一部)、發育が遲いので餘り行はれて居らない。

第三圖　マカッサールの米搗き女

穀類中第一位を占むるものは米である。黍と玉蜀黍とはワキ役である。地味、氣候が米に適せざる所では此黍類が植ゑられる。尤も文化階級の低い種族は黍類を植ゑるが、之れは米を作るよりは骨が折れないからである。多分東南亞細亞では黍培養は米培養よりも古く行はれたものらしい。玉蜀黍は上記兩植物よりも新らしい時代に大陸から太平洋西南諸島に輸入されたらしいのであるが、廣く培養せられて居る。

尤も黍は漸次陸稻に壓せられつゝある。稻の方が價値が高いためでもあるし、酒の醱酵に使用せらるゝためでもある。インドネシアの傳說から云つても米は農作物中の最貴植物である。食料に供する前に大きな米搗き臼で米をついて糠を去る。此仕事は女の作業であるが毎朝之れを行ふ。木臼の形狀は種々あつて地方的に異なつて居る。或る地方では長形の槽であり、他の地方では丸形(盃形)の臼である。長い木の幹に凹みが一列に竝んで此穴の各々で搗くこともある(バタク人、アッサムのナガ族、セレベスの所々)。印度支那半島の東部では水車による水力を利用しての米搗きもあるが、之れは支那人から敎はつたものらしい。

(註一)　米搗きと同時に歌を歌ふ。最近宇野氏は此米搗き歌を集成せられた。宇野圓空氏著「マライシアに於ける稻米儀禮」(東洋文庫論叢第二十八)

(註二)　米は土製或は金屬製の器に入れて炊ぐ外に、靑竹筒に入れ、水を加へて煮るのが賞美される。

二　燒畑耕作

原始農業、卽ち燒畑耕作を行ふ場合には、陸稻、根莖、黍、時として野菜を植ゑる。

燒畑を作るには先づ斧或はパラングで木を伐り倒す(これ等の器具に就ては後に圖說する)。數週間後に倒れた木が枯れた後に火を附けて燒く。燒けた木や草は肥料となる。山の傾斜面が急峻に過ぎる所では、燒け殘りの木を橫に伏せて土の流れるのを防ぐ。土地の耕作及び除草には一種の掘り棒或は撥を使用する。之れには木製の外に骨製のものがあり、一端に鐵片を附けたものもあるが、スマトラのバタク族、セレベス及びルスン、小スンダ島では掘り棒で地を刺して播種及び除草する。

種子は單に地上にバラ播く事もあるが、其れよりも掘り棒で開けた小穴に種子を播く方が多い。此掘り棒の形式は地方的に色々の變種があるが、ミンダナオ島のバゴボ族では竹製の鈴が附いて居るし、ボルネオのイバン族では一端に穴を開けて棒の用材に加工して、土に穴を穿つ度にカラ〳〵と鳴る裝置がしてある。

畑は村からずつと離れて居る場合には猪、鹿の害を防ぐ爲めに畑に小さな番小屋を建てるし、又畑の周圍に垣を結ぶ。形式が多數あり、且つ意味の深いものは案山子及び鳴子の類であつて、鳥及び猿の害を防ぐ。之れは人力で動かすのみならず、水力で動かす裝置もある。

稻は穗先だけを刈つて收穫し、藁は燒いて肥料に返すのであるが、稻穗收穫用の指鎌にも色々の形式がある。マライ半島、タイの一部及びインドネシアでは一種の曲つた刃のものを使用するが、モスコウスキー Moszkowski 氏報告の如く、之れは古く貝殼を使用した形式から發達したために此形式となつたものである。之れは今日でも尙ルスン島の一部に貝殼製の刃の品が使用せられ居るので分る。尤も指先で單に穗を摘む所もある。

第四圖　稻收穫用の指鎌

粃を去るには籠に入れたり、又脚のある案の上に粃を載せて、すき間から穀粒を落すか又は穗を地上で叩く。そして集めた穀粒は小さな高床倉に入れる場合が多いが、時には大形の籠に入れて家中に貯へる（第四圖參照）。

燒畑を造つて畑を使用するのは二年、高々三年である。其以上は土地に肥料が無くなるから土地を變へる。四五年たつと再び元の畑を燒いて使ふが、地味の關係によりてはもつと長時間を要する。

同じインドネシアでも地味地勢の好い所に居るものは輪番燒畑耕作によりて充分食料を保持し得るのであるが、地味地勢の不良な所に居る者は食料缺乏の間には狩獵やら山野自然生品の蒐集によりて生を保持せねばならない。

三　段丘耕作

鋤耕作に就ては後述するが、中等度文化階級の民族でも既に半ば之れに入りかけて居るし（スマトラのバタク族、カチン族の一部等）、又處によりては興味ある農耕、すなはち階段水田農耕で人工灌漑を行つて居る。施肥

第五圖　北ルスン島イフガオの階段水田

として牛豚の糞を以てするが、尙未だ萬能除草 Hacke 或は掘り棒使用なのである。

此階段耕作の中心地はアッサムに於てはアンガミ及び其近傍のナガ族住居地である。ルスン北部ではイフガオ及びイゴロトが有名である。全山は種々の幅の段階から圍まれて居る（アンガミではその幅は二歩から二百歩に及ぶ）。各段階は土或は石の段で築かれる。そして上段の畑から下段の畑へと送水溝或は竹筒で水が送られる（第五圖參照）。水の配分には土地の規約がある。此階段耕作は多分割合に後世他地方から學んだものと思はれるが、アッサム及びルスンで特殊な發達を遂げた事は確かだ。

四　家　畜

家畜としては豚（但し回教影響のある所は除外す）、犬及び鶏が廣く行はれる。牛、水牛は處によりて飼はれて居るに過ぎないのは文化史上注意すべきである。

此點に就てまとまつた研究は遺憾ながら從來少ない。然しインドネシアの東部、モルッケン、フィリッピン、ボルネオの山地住民には牛と水牛とが全然缺けて居るし、西部諸島ニコバール、メンタワイ、ニンガノ諸島にも之れを缺く。それにも拘らずアッサム及びビルマのナガ族及びクキ・チン族 Kuki-Tschin、セレベスのトラヂア Toradscha 族の如き民族には牛及び水牛が祖先崇拜像、裝飾等に使用せらるゝ事は後述の通りである。

東南亞細亞に存在せる牛、特に脊に瘤のある牛 Zebus は印度種であるらしく思はれるが、半野生牛には二種を區別する。第一種はバリー及びマヅラ島產でバンツング Banteng と呼ばるゝもの、第二種はアッサム、東ベンガール、西及び北ビルマのガヤール Gayal である。後者はクキチン族、チブラ、ナガ、ミシュミ、カチン族も亦飼つて居る。然し之れは野生のビボス Bibos の一種から發生したか、或はガウール Gaur の飼ひならされたものであるかは判然しない。

高級文化の影響を受けた民族では牛及び水牛は農耕用であり、又フィリッピンの或場所では乘用及び荷物運搬を爲すが、其他の中等文化階級の民族では屠殺用の外はない。卽ち祭禮用であり、又神に對する犧牲用であるが、或る地方に牛が少なくなるほど、一時に犧牲用として牛を殺す場合もある。宗教的意義無くして牛肉を食す場合は少ない。又牛乳は少數例外の場合の外は飲まれない。但しガヨ族、バタク族、ミナンガバウ族等のスマトラの種族は古く印度文化の影響を受けて牛乳を飲む。又牛と水牛は財產として高價なもので嫁買ひに用ひられるし、賣買價格の單位にもなる。

山羊は回教と共に輸入せられたものであるが、ナガ族は此毛で裝飾品を造る。然し山羊の飼はれる區域は今日では廣い。

馬は大陸の高級文化種族及び歐人により輸入せられた。餘り廣くは無いが處々（北ルスン、ミンダナオ、スマトラのガヨ族、バタク族及び小スンダ列島）で飼はれて居る。

斯くの如き次第であるから家畜の肉を食ふのは犧牲に供へる場合、又は祭禮である。多くの種族で犬肉は御馳走として賞美される。農業が原始的である場所では狩獵は生活食料補充として重要であるが、農業のやゝ進んだ中等文化階級の種族では農業はスポーツとして熱愛せられる。

五　狩　獵

一人で行ふ狩獵の外に多人數で追ひ出す狩獵がある。野獸は兩側から列んだ二列の勢子から追ひ立られて、此列は次第に一方の先端部に於て、ある角度を以て連絡するのに追ひ込まれ、遂に網をもつて捕まるか或は槍を以

て殺される。罠の種類は非常に多くある。一番多いのは木を強く折り曲げて矢を飛び出す仕掛けのものである。此外紐で縛る仕掛けのものもあるし、檻或は落し穴の中に入れる方法もある。そして穴の底には尖つた木或は竹を立てて置くのである。狩に犬を使ふ事は多い。トーテム或は宗教的理由からの食物禁忌が無い場合には殆んど總べての動物は食べられる。卽ち鳥獸の外蛇、甲蟲及び虫蛹である。蜂蜜は好んで食される。通常之れは野生蜂の巣から得るのであるが、所によつて（例へばナガ族では）原始的の養蜂を行つて居る。

六　漁　撈

狩獵よりも生活に必要なものは多くの地方に於ては漁撈である。

殆んど全地域を通じて擴がつて居るのは簀（すのこ）である。之れには種々の形式のものがある。

川の一部を堰止めて流れの魚を中毒させたり、珊瑚礁の水溜をせいて魚を中毒せしむるのも、屢〻行はれる。此魚毒をインドネシア人はツバと呼ぶが、種々の食物の根、葉、實を用ふる。中毒させられた魚は水面に浮上つて容易く捕へられる。

弓矢のある處では魚を射る（例へばビルマのチン族、メンタワイ島、セラム、ケイ、チモール等）。槍或は銛で魚を突く方法は多く海で行はれ、同時に篝（かがり）を燃やす。魚を釣上る方法は至る處で行はれる。約針絲の外に針を用ふる事がある。モルッケン群島が多分中心であり、北方では昭南島及びジャワの北岸にまで及んで居る所の釣法に紙鳶の下に釣糸をつけて釣る方法がある。之れはブギー人が航海と共に擴めた方法らしいが、漁人はカヌーに乘つて紙鳶を上げるのである。そして紙鳶の尻尾から釣絲が垂れ下つて居るが、此釣絲の端に釣針が付けられて居る。又釣針の代りに絲針である事もある。モルッケン島では此處に蜘蛛の巣の塊をつけて紛ひ餌をつける。此釣法はわが内南洋のトコベイ島までも及んで居る。

殆んど至る處に知られ居るのは漁網であるが、其形式には種々ある。手網、投網、建網等種々の大きさ及び形式のものがあるが、人類全體の漁網としては決して發達したとは云へない。

食人風習に就いては後に述べる。

第二章　嗜　好　品

一　檳榔實嗜食

東南亞細亞の嗜好品として檳榔實嗜食がある。檳榔食を作るには先づ一定の植物（Chavica Betle）の葉に石灰を塗り之れで檳榔實の一片を包む。云ふ迄も無く檳榔椰子（Areca catechu）の實である。之れには通常ガンビール（Gambir）の一片と小量の嚙み煙草を加へる。若し上記の葉及び實が無い時は之れに似た葉を以て代用す

る。檳榔實を嚙むとわづかに麻醉的に作用し、芳香性の呼氣が出て食慾がよくなると云はれて居る。併し齒は黑く染まるのを免れない。ニコバル島の住民では口の周りが引つれた樣になつてしまりの惡いものが見受けられるが、之れは餘り多くの檳榔實嗜好に原因したためだと云ふ人もあるが、事實であるや否やは疑問である。

東南亞細亞に於てインドネシア人の生活に檳榔實嗜好は大きな役割を務めてゐる。檳榔實嗜食材料を知己或は客人に呈上すると云ふ事は親交を現はすものであつて、總べての祭禮は檳榔食無しには過されぬ。それで男女の婚約の時にも檳榔實を交換するし、結婚の時にも新郎新婦が檳榔の實を互に分け合ふ。檳榔の實及び檳榔食は先祖の靈に對して犧牲を捧げる時に必要なものである。そして檳榔實を嚙んで赤く染つた唾液を吐き出す事は惡靈に對して身を護る事となり、又疾病を除く事ともなると考へられて居る。

檳榔食を作つたり、又之れに要する上記の品物を貯へるには種々の器具を使用するが、此器具には非常に美術的な品物が少くない。石灰は貝殼を燒いて作るのであるが、竹筒の容れ物に貯へる。此竹筒の表面には屢〻非常に美麗なる彫刻が施されて居るが、セレベス、セラム、チモール及び其近隣諸島に於ては甚だ美しい模樣が彫られて居る（第六圖參照）。又地方に依つては金屬性の容器を用ふる事もある。其他石灰を掬ひ上げるのに匙又は箆を使ひ檳榔實を小さく割るのに鋏（スマトラのバタク族及びジャワ）小刀（タイ、ジャワ）を用ひる事もある。此全體を籠或は手提げに入れて持つて居るが、文化階級の高い民族では來客に檳榔食サービスを行ふ。又位階の高い人が出歩く場合には從者が此器具を持つて隨行し其器具は黃金を以て作られて居る。そして器具中に唾液を吐き出す壺も存在する。

第六圖　檳榔食の容器　竹製筒　チモール所用

檳榔食の分布範圍は甚だ廣い。東南亞細亞の東に於てはメラネシアの大部分に及び、北に於ては南支、西に於ては印度西部、セイロン、マレヂベン、ラッカヂベンに及ぶ。此廣大なる分布から觀察すると、此風習は可なり古くから存在して居つたものである。そして東南亞細亞に於ては文化の低き民族から文化の高い民族までの殆ど全部に及ぶ。尤も檳榔食は煙草嗜好のために幾分壓迫せられて減少して居るのは事實である。

アルコール性飲料中一番に擧ぐべきは椰子酒である。

此酒は砂糖椰子（Arenga saccharifera）から作り、ココ椰子からは餘り作らない。卽ち木になつてゐる椰子の實を若い中に切つて、切口から流れ出る汁を下に結び付けた竹筒に受ける。此液に他のものを加へて發酵せしめて酒を製す。時として之れを蒸溜して燒酎を作る。

二　酒　類

多くの地方に於ては椰子酒が唯一の酒である（スマトラのバタク族、モルッケン群島、メンタワイ島、ニコ

バル島)。フィリッピンとボルネオに於ては椰子酒の外に蔗糖の搾り汁を發酵して用ふる。其他蜂蜜を發酵せしめたり、種々の果物例へばアナナスを發酵せしむる事がある。其他米、黍、稀に玉食黍から酒を作る事もある。之れはボルネオ、フィリッピンの一部及び小スンダ列島に於て行はれる。

三　煙　草

東南亞細亞に於ける喫煙に就ては不明な所が多い。研究者の若干は歐人渡來前に既に此地方では喫煙が行はれて居つたと信じて居る。然し多分十六世紀頃に歐洲の船乘から傳へられたのだ。

喫煙は多くシガーの形で行はれ、シガレットの形は稀である。然し中等度文化階級民族では金屬、土製、竹製のパイプが屢〻使用せられる。クキチン及びナガ族では通常のパイプの外に水煙が行はれる。水煙は婦女の嗜む所であるが、水煙に使用せられた水は竹筒容器に入れて男子が時々口に含み、暫くして吐き出すと云ふ。

四　阿　片

阿片は最近輸入せられたものであるが、餘り廣く行はれて居らない。唯支那に近接せる種族(カチン等)、佛領印度支那では處々に行はれる。

第三章　住家と聚落

一　杭上(高床)家屋

東南亞細亞では分布地域の大なる點に於て杭上家屋、換言すれば地上に杭を立てて床を高くした高床家屋が最も多い。同樣な構造で水上に建つたものは其れ程多くはない。

此杭上(高床)家屋は東南亞細亞獨自の發生であるのか、其れともシベリア、西亞細亞、歐羅巴に於ける杭上家屋と或る關係があるか、今日未だ決し難い。然し此杭上家屋は東南亞細亞に適合せる形式である事は疑ひない。雨期に於ける高度の濕氣を防護する事、强烈なる日光殊に地上よりする反射を防ぐ事、地上より來襲する毒虫、野獸を防禦する事、清潔なる事、地面に高低があつても建て易き事、家内涼しくして風通しよき事等である。

杭上家屋はビルマ南部に於ては印度式家屋に變りつゝあるが、セラム、モルッケン、ミナハサに於ては和蘭文化の影響によりて折衷式の歐式建築と化しつゝある。

二　平床家屋

上記の高床家屋の外に地面を床とせる低い家屋の形式がある（地床家屋）。此型での古式なるものはチモール島の圓形家屋で中央に柱を建てて傘を擴げた樣に屋根を葺く。然し此地床圓形家屋が總ての地床家屋の根原を爲すや否やは甚だしく疑問である。それと云ふのもアッサムのナガ族、ロタ Lhota、レングマ Rengma、カブイ及び印度支那半島のモイ Moi 族中の或るものは地床家屋であり乍ら、種々の形式の進歩した家を造る。

臺灣のパイワン族等の家は山の傾斜面を掘り凹めて床が斜めになつて居る。プヌム族及びタイヤール族では床が反つて地面より掘り凹めてあつて、戸を排して段を下りて床に達する。一方同時に高床家屋もあることは文化が種々交錯したためでもあらうが、竪穴式低床は北邊のどの民族から傳はつたか、或は日本石器時代と交渉ありや否や、將來の研究を必要とする。

第七圖　チモール島の圓家屋形

三　建築材料

建築材料として主要なるものは木と竹とである。但し中等文化民族中、高等なものほど木材を多く使用し、低級なものは竹材を多量に使用する傾向にある。

木材は柱、棟の外に床、壁の張板に使用せられる。竹材も大なるものは柱梁に使用されるが、竪に割き、或は壓し平めて壁及び床張りとする。又割竹を編んで編板として壁に用ふることも少なくない。又場所によりては樹皮を壁、床、屋根に用ふる所もある。

從つて屋根は板、樹皮、竹等で張るが、草或は椰子の葉で葺く場合が多い。之れは椰子の葉を竹に竝べて取り附けたものを一定の間隔を以て横木に縛るのであるが、マライ半島及び其近邊では之れをアタブ Atap と呼ぶ。そして屋根のみならず壁をも此アタブで造る。モルッケン群島では之れに椰子の種々の種類のものを使用するがガッバガッバ Gabba-Gabba と呼ぶ。

建築材料を縛るには籐、又は割竹を用ふる。石及び粘土を乾した煉瓦は餘り使用されない。高床家屋では杭柱の下敷に石が使用せらるゝ事がある（スンダ人、トラヂャ、ニアス、フロレス等）。又地床家屋を造る所では屢塀の存在が必要條件となるが（例へばアンガミ族では家の後半部に高さ三四尺の塀を廻らす）、石を塀にぬり込める。又地床に石を下敷きとする所もある（カシ族 Khasi、ササク族 Sasak）。たゞ臺灣のツァリセン及びパイワン族では屋根壁地床等に平石を敷くのみならず、村道にも之れを敷く。又壁の所だけを粘土で造つた小舍はルスンのイゴロットの貧困者に見る。

四　圓形家屋

インドネシア最古の家屋形式の一として圓形家屋のあることは前に述べたが、平地床で圓形家屋である。例へ

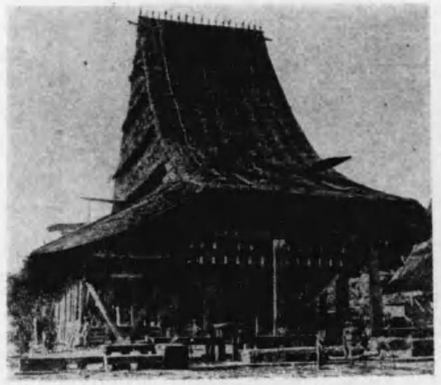
第八圖　ニコバール島ナンカウリの圓形家屋

第九圖　イフガオ族の四角形の家　壁は上方は外に傾いてゐる　ルスン島北部

時として楕圓形の家がある。ニアス島北部に見る所であるが、やはり圓形家屋から發生したものであらう。其他ハルマヘラ北部には平地床、或は高床八角家屋ありと云ふが、其發生は圓形家屋からでないかも知れぬ。

五　角形家屋

ばアンダマン島とチモール島の住民に之れを見る。ところが高床であり、且つ圓形家屋を呈せる住宅はチモール島に於て上記平床圓形家屋と竝び行はれるし、又エンガノ、ニコバール島、東ボルネオ島のダヤーク人の一部にも之れと同樣なる狀態が現はれて居る。



第一〇圖　南部ニアスの酋長の家

四角形の屋根の家、敷坪の四角な家も丸屋根の家に對して異なつた系統の原始的家屋の一であらう。東南亞細亞に於て、大陸の家屋の形式は割合に單一であるが、インドネシア諸島には非常に多種類の家屋形があつて、之れを分類綜合するには可なり困難を感じる。

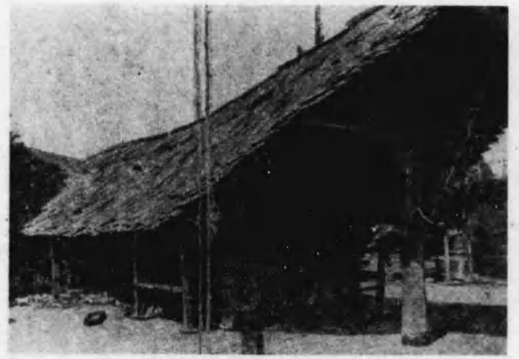
六　屋根の特性

各所に見る所は屋根の勾配が急峻で隆起　著しい家である。スマトラのバタク及びニアスに之れを見る。後述ダヤーク族の長い家も自然民としては稀に見るものである。

インドネシアの家屋に於て割合に多く見る所の特性は壁が上になるほど外に傾き出て居ることである（第一〇圖參照）。此式の家屋はセラム島の住民の外にバタク、ニアス人の住家に見るし、又ボルネオ、ルスンにも所によりて存在する。

上述の如く一般に屋根は强く發達して居る。小家屋に於ても此傾向は屢〻顯著で、三角プリズムを置いた樣に屋根計りが見えて屋根は地まで殆ど垂れ下つて壁を隱せるものが少なくない（スム

バワ島東部のドンゴ族Dongoo、中央セレベス等)。普通の鞍形屋根の外に屋根の頂線が短かくして殆どピラミット狀に尖れるものがある。又之れに反して屋根の頂線が中央部は凹んで兩端に近づくに從つて張り出し且つ強く隆起せるもの(スマトラの住民、ミナンガバウ人、トバ・バタク族)がある。中央セレベスに於けるトラジャ族の家は此種家屋として有名で、強く張り出されたる軒には特別の柱があつて水牛の頭の木彫があるが、之れは往昔狩し來つた水牛の頭部を此所に吊り下げた名殘である。そして柱其他の建築用材は彩色文樣と彫刻とで飾られて居る。



第一一圖　トラジャ族酋長の家　中央セレベス

第一二圖　シャン族の家　ビルマ

此種の家はミンダナオにも若干見受けられるが、奈良朝以前の日本にも在つたことは埴輪家屋に之れが存在する事によりて證せられる。日本人の祖先が千年より以前に南島と文化交流した證である。

印度支那半島の中部及び西部に多く見る所の家屋形式として、家の一端に半圓形の張り出し屋根の附されたものがある。例へばシャン族 Schan の家屋が之れである。此張り出し屋根が主要屋根と一緒になつてしまつた場合には楕圓形家屋に似た形狀のものとなる。此形式の家も南島の所々に散在するのみならず一部臺灣にも及ぶ。

第一三圖　中央セレベスのリンヅ湖附近トクラウィの家

山腹の傾斜面に高床家屋が建てられた場合には家屋の前半は高床だが、後半は地床である。また高床家屋の床の高さは床下に人の立ち得る位の高さが多いが、此床下は女の仕事場に使はれたり、物置、又は家畜の飼ひ場とせられる。またバタク人及び中央セレベスの一部では杭を立てる代りに丸太を横たへて下敷きとせる高床家屋もある。

家に上る階段は丸太又は太い竹に切り目を附けたものだ。然し文化の進んだ地方の住民は組み木の階段を造つて昇降する。

七　樹上家屋

高床家屋の一種とも見るべきは樹上家屋である。之れは村を離れた淋しい地の畑に建てられて、立木の中途を切り棄てて其上方に建造せられて居る事が多い。野獸の害を防ぎ、敵人を防禦するためでもある(ルス

ン島のカリンガ族、ミンダナオ島のマンダヤ族等)。

八　家屋の大きさ

家屋の大きさと其内部構造とは社會構成に關係する。多くの種族では一家屋一家族であり、且つ又一家屋一室である場合が多い。然し大家族主義又は居室獨占、奴隷使用の場合には大きな家屋を必要とする。兩親と其息子及び娘の全家族が一家屋に住居する位ならば未だやさしい方で、全親類或は村全體

第一四圖　フィリッピンのバゴボ族の木上家屋

第一五圖　カヤン人村落家屋の内部

が一家屋に住居することがある。之れは東南亞細亞に特色ある事實だ。すなはち大陸に於てはアッサムのデオリ・チュチヤ族 Deori-Tschutiya、イラワディ河源泉地方のクンノング族 Khumnong、ビルマのブエ・カレン族 Bué-Karen 及び印度支那南部に之れを見るのみならず、東南諸島では中央スマトラ、北部セレベス、セラム島西部、小スンダ列島の所々、メンタワイ島、特にボルネオのダヤーク族である。

ダヤーク族の村落家屋は大きさに於ても、亦技術の點に於ても此種家屋としての頂點に達せるもので、家屋の長さが二百乃至三百米突に達せるものがある。大抵の場合に此家屋は長さの方向に二分せられる。すなはち一側は横仕切りした居室の一列で、一仕切り毎に一家族が住居して居る。他の側は一面の廊下で、此所は來客との應接仕事場として共同に使用せらるゝのみならず、若者の寢所であり、首狩で獲た首の置場でもある。大陸の此種村落的大家屋は少しく異なつて中央に長い廊下があり、兩側が仕切られた家族の居室列となつて居る。

酋長の權力の廣大な所では、從者と奴隷との數が多いために、酋長の家屋は特に廣大となる。例へばカチン族では六十乃至百米突の

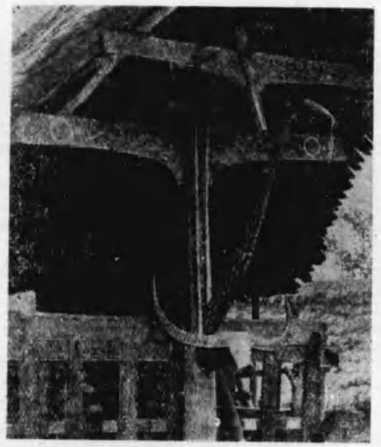
第一六圖　北ボルネオのカヤン族の村落家屋　一村一家制

大きさの家屋であるが、其内部構造と各室の間取りは種々である。

九　家屋の裝飾

家屋には各種の彫刻と彩色とが施されて美麗なものが少なくない。殊にアンガミ族、ナガ族の一部、モイ及びグャーク族の一部、殊にバタク及びトラジャ族は此種技巧に秀でたものとして有名である。

これ等の彫刻と彩色畫は、單に裝飾としての意味計りでは無く、宗教的、神話的、魔術的意味をも持つ。すなはち拜神、祖先崇拜、首狩關係の事項のみならず、不祥を除き、恐怖魔除けの意味もある。其他獸形彫刻の類が多いが、之れの意味に就ては未だ考究せられざる所が多い。



第一七圖　トラジャ酋長家屋の彫刻
中央セレベス

十　家屋の種類

以上は住宅に就ての大略を述べたのであるが、此外に場所によりては特殊家屋があつて、住宅とは大きさに於て、建築法、彫刻等に於て異なれることが少なくない。

例へば高床家屋の一たる穀庫、米搗き小舍（バタク族）、仕事家屋、庖廚家屋、それから又廣く行はれる社交の中心たる「男の家」集會所の類、靈屋、死者の家、又所によりては產屋及び死せんとする者のための家及び月經家屋の類があるが、後章社會構成に於て之れを補遺する。

近來此方面のまとまつた著書としては Tischner H. Die Verbreitung der Hausformen in Ozeanien. Leipzig 1935. が出版せられた。

十一　聚落

聚落の大きさ、位置、その他の狀態に就ては、まとまつた事は中々云ひ難い。それと云ふのも此方面の精査材料が乏しいからである。定まつた小地域の類似種族の間にも聚落には可なりの差がある。例へば、北ルスン島のイフガオ族は散在的に家屋を建てるが、チンギアン族は正しく村と云ふ可き聚落を作る。そしてボントク族に至ては數千人の集團の小都會を造る。

常に戰爭の危險に曝露せられて居つた間は數百軒の聚落があつて、防禦裝備を具へて居つたが、歐人の植民以後小集落に變化した地がある（ナガ、ルチャイ、チン族）。酋長權の强大な所では酋長所在地に大部落が出來ると云ふ調子で、聚落は氣候、政治、社會狀態等の變化に大いに支配せられる。然し住宅集簇狀態には不規則集積の外に街道に沿へる場合、住宅列の形成の外に「若者家屋」を中心として之れを取り卷いた村落の形式がある。

東南亞細亞の大陸では、文化民族を厭つて高地に遁避する民族が少なくない。諸島でもスマトラのバタク族、フィリッピンの山地民族、セレベスの内陸、小スンダ列島等に此例がある。

又好んで川沿ひに住居を占むる事がある。アッサムのガロ族及びミリ族、ダヤーク族の大部分は之れである。

定住性は山岳種族に乏しい。然し之れに二種類がある。眞の放浪は新らしき土地を求めて常に住居を新らしく作りつゝ轉々放浪して廻るのである。之れは文化的最下級でネグリト等に見る所である。其れよりも稍高級の狀態では一定時期に村を去つて近接地域を彷徨する。之れは眞の放浪ではないが、僅かに農耕を營める民族に見る所である。例へば村の周圍の地力が弱つて來ると餘り遠く無い地に移つて村を建てて農業を營み一定地域内を輪作する。種族によりては二―三年毎に一回宛移るが、カレン族は毎年移る。

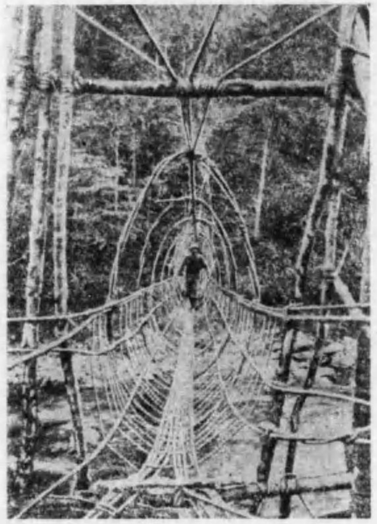
第一八圖　中央セレベス　パラン河に架せられた橋

十二　村落防護

注意すべきは村落防護であるが、之れは大陸種族（アンガミ・ナガ族及びワ族）に主として發達して居るが、東南諸島ではバタク及びニアス人にも若干之れを認める。其れがためには一定の聚落地域に土塀を繞らし、生け垣、陷穽（おとしあな）、木と竹とで造つたバリケード等で守備せられて居る。時として銃眼ある石垣があり、木彫を施せる櫓がある。そしてニアス及びアンガミ族に於ては入口に登る石段があるし、ワ族では陷凹路が掘られて居る。

然し防禦裝置の全然無い種族が多い。カチン及びダヤーク族では戰爭危險の迫つた時だけ防禦裝置として磐を造り濠を掘る。

第一九圖　ラッテバオの竹橋　中央セレベス



第二〇圖　サル・マニオの籐製吊橋　中央セレベス

附記　橋梁

橋梁には技巧的に進歩せるものがある。其中で最も進歩せるものは籐、竹、葛で造つた釣橋である。これは大陸（ナガ族）にもあるし、東南諸島にもある。屋根のある橋で立派

な彫刻と彩色あるものを中央セレベスのトラジャ族が造るが、之れは彫刻の多い立派な美術建築で家と似た棟を有する（第一八圖參照）。又美事な籐の釣り橋と竹の釣橋（第一九・二〇圖參照）とを造るが、其組み方は力學の法則にかなつて居るのは嘆賞に價する。

第四章　衣服と裝飾

一　裸體

完全なる裸體は昔は可なり廣く行はれたが、近來甚だしく減少した。

アッサムの東部ナガ族では男女共に裸體であつたし、エンガノ族の男性、アンダマンの男女性、ビルマのワ族、ルスンのイゴロト、紅頭嶼のヤミ族等全裸體のものは少なくなかつた。

二　腰巻きと褌

古式の衣服と認めらるゝものは東南亞細亞に擴まれる婦人の總附き腰巻きである。之れは古代服裝の名殘りと思はれるものであるが、スマトラに非常に多く殘つて居るのみならず、北ニコバル島では椰子葉の纖維で組んだ紐、メンタワイ島では引きさいたバナナの葉（但し此島では同じ材料で首の廻りをも縛つて、體の上半部をも覆ふ）、エンガノでは椰子葉纖維（喪服用）の外に草にて製せし品を常用とする。フィリッピン及び大陸の諸所でも此種の房袴を使用するが、アル島寡婦の喪服は極めて短小となつて僅かに恥部を覆ふに過ぎ無い。之れと似た服裝がチモール、フローレス島、ハルマヘラのタルナート人にもある。

第二の形式は褌に似た形式のものだが、之れに更に色々の小區分がある。古くは樹皮布を使用して居つたのだが、近來は一般に織布に變化しつゝある。一本の紐を前から後に廻して腰の廻りをもしめる形式のものの外に、腰帶は別に廻して更に一片の布を前後から、其前端と後端とを腰帶に廻して端部を垂れ下げる法、卽ち越中褌に似たものとの二法ある。古式のものほど幅が細くて恥部を辛じて覆ふに過ぎない（マライ人は之れをチャワト Tschawat と呼ぶ）。之れは主として男の衣服であるが女も行ふのが稀でない（クブ、スノイ、マンギャン、セラム島のウマール、印度支那のモイ族等）。

第三の服としては布製の腰巻がある。古式ほど短かくして膝以上であるが次第に長くなつたらしい。之れは主として女の服裝だが、男にも腰巻きを行ふのがある（アンガミ及びナガ族と其附近の種族等）。

男女共に上體は裸體である事が多い。そして寒い時とか何かの機會に一寸着る位の程度である。然し若し上體を覆ふ衣服としての古式のものを求むるならば、肩から胸にかけて覆つた袖なしの襦袢であらう。又氣候の寒い時に肩に掛けた一片の布で身を卷く事もあるが、之れ亦原始的である。雨着を植物の葉、草、樹皮等で造るのも

可なり廣く行はるゝ所である。

稍〻後に流入したと思はれるのはシャツ様の肌着で袖が短かく廣いもので、カント族、ビルマ、タイ人等の多く着用せる形式である。それよりも新らしいと思はれるのは大陸にも島々にも現時廣く行はるゝ袖の細く長い、

第二一圖　彩色せられたる皮製座布　中央セレベス

ジャケツ様の衣服である。ズボンは初めは東南諸島に知られないものであつたが、二方面から渡來したらしい。すなはち北方タイ、支那方面からと西方イスラムの影響からとである。そしてブギ族の航海が之れを諸方に知らしむるに力あつたものらしい。

三　座蒲團

古式の文化器具として男用の坐り筵、又は坐り皮がある（特にボルネオ及びセレベス）。これには種々彩色が施されて美はしい。

四　脚絆

脚絆はアッサム、印度支那、臺灣等の山地住民に見る所のものだ。之れは多くは婦人の着用品で布地で造られて居るが、カシ族では木葉製である。アンガミ及びナガ族では黄及び赤色に染めた籐で編んだ脚絆を男が着用する。

五　鉢巻きと笠・帽

樹皮布製又は編み物製のはち巻きも古式の裝飾であるが、布を頭部に卷くのはイスラム文化の影響である。籐で編んだ緣無し帽、木製の同品（イゴロト族）、南瓜皮製の同品（フィリッピン、セレベス）、毛皮製の同品（セレベスの狐皮、バタク族の虎皮、アッサムのミシュミ族の狐皮）、幼鹿の頭皮から造つた同品（臺灣）等はいづれも古式な帽らしい。大きな平たい圓錐形の印度支那の編み笠もインドネシア――殊にボルネオとセレベスとにある。但し後記の島では編み笠ではなく、椰子葉或は樹皮を集め縫つて之れに强烈なる色彩を施し、又裝飾物を附加する（第二二圖參照）。

第二二圖　トペラ族女性の祭禮用笠　中央セレベス

（註）此笠の中には常盤御前の笠を思はす樣な形狀のものがある。

帽子類は大陸よりも西南諸島の方が多種類である。メンタワイ島の男帽はサゴ椰子の葉で造られて大きくて平たい。エンガノの男の喪帽、フィリッピンのイフガオの帽子等はいづれも特色あるものである。

六　被服材料

被服材料の最古のものは打ち叩いて造られたる樹皮布である。大陸で此樹皮布はマライ半島の原始住民の外にアッサムに於ける各地等で使用せられて居るが、インドネシアでは甚だ廣く行はれる。そしてフヤ Fuja と呼ばれる。

東南諸島では曾てどの島でも樹皮布を製造使用したのであつたが、中央セレベスのバダ族 Bada 及び其隣接諸種族の作品が製作の極致に達せるものである。すなはち此地では布地の種類に富んで居るのみならず、これに華美な文様が描かれて各種の形式の衣服と鉢巻きがある。

第二三圖　タラップと稱する木の皮を叩いて布を作る女　北ボルネオダヤーク族

第二四圖　樹皮製服を着用せるトルボンの女子　中央セレベス

樹皮を打ち叩いて薄くし、且つ引き延ばすにはボルネオでは木の臺と木の棒を使用する。セレベスでは溝を附けて籐の柄のある石槌及び木槌を使用する。

毛皮は衣服材料として東南亞細亞に使用さるゝ場合はすくない。トラジャ族の使用する皮製の緣無し帽と座布(蒲團)に就ては既に述べたが、ダヤーク族の或る者は山羊、熊、虎猫の毛皮を以て戰鬪用衣服を造る。又臺灣種族中にも鹿皮製衣類がある。

七　機織

文化の低級な古式民族は東南亞細亞に於て機織を知らない(ニコバール、メンタワイ島及びエンガノ)。いづれにしても機織はやゝ後期に輸入せられたものであるが、迷信に基づける禁斷によりて未だ普及せざる地方が少なくない。例へばボルネオ島のウル・アイウル Ulu-Ayer 及びケニア族 Kenyah では家の中で機織を禁ぜられて、機織のためには特別の小舍が建ててある。マニプールのタングール・ナガ族 Tangkhul-Naga では六ケ村の婦女だけが其村内で機織されるのを許されて居る。セマ・ナガ族 Sema-Naga でも之れと能く似た半禁止狀態であるが、ラオスのニアオン族 Niahoun では全然禁止せられて居る。其他ビルマのカレン族の或るもの及び西南諸島の諸種族(ルスン島のイゴロト、スマトラ島のタブング・マライ族、ダヤーク族中の或るもの、中央セレベスのトラジャ族、ハルマヘラ及びセラム島のアルフール人の大部分等)は機織を行はない。

然し或る場合には始めから機織を行はないのか、或は一時機織を行つて居つたのに外來の布片輸入によつて機織を止め

たのか分らない事もある。少なくともダヤーク族中のカヤン及びケニヤ族は後者に屬する。綿糸機織の前段階はアル島に行はれて居る如き、細かい椰子葉纖維を以てする編み物かも知れない。

各種の植物纖維を使用しての機織は木綿織よりも此東南亞細亞では古くから行はれたものなりとしなければならない。材料としては色々の木の實の纖維、殊に椰子の實の纖維（アッサムのナガ族、印度支那のピ族 Pih 及びモング・ラム族 Mong Rlam ルスンのボントク・イゴロト族、ダヤーク族、ニアス人等）、大麻蕁麻の纖維（アッサムの諸種族、北部印度支那、臺灣等）、各種バナナの葉の纖維（フィリッピンのマニラ麻、サンギ島、タラウト島）、各種ムサの葉の纖維（ブル、ウェタル）、アナナスの纖維（ダヤーク、フィリッピン、ニアス）、椰子樹纖維（北セレベス、ニアス、チモール）等が主である。是等の纖維は紡がない。少數宛縒り合せて用絲とする。

第二五圖　木綿の種を去る器械　ルスン島民所用

（註）今日大農業大工業化しつゝあるマニラ麻も元來は此地方の島民の自家用であつた。民族學を研究して利用厚生の途に資する必要は玆にもある。

東南亞細亞の木綿織は古く印度から輸入せられた方法であると思はれるのだが、確かにさうだと云ひ切る材料は無い。中等度文化階級の種族では一時新舊三種の材料、すなはち樹皮布、植纖織物、木綿布が同時に行はれて居たのであつたが、木綿織は器械工業の文明國製の木綿物に壓せられて島民の手織は無くなりつゝある。そして最古の樹皮布は製造が手輕だと云ふために何時迄も殘存する。

島民手織の木綿を造る場合に、第一に必要なのは綿の種子を取り去る器械である。此器械も大體印度で考案されたものらしく、北はトルキスタンから南は東南亞細亞に到る迄、大體に於て似た器械を使用する。江戸時代に日本に行はれたのも此類である。

其れは木製で一側の回轉柄を廻すと、二本の軸木が動き、軸木の間に挾まれて種子と綿纖維とが分離する。綿を和げるに紡ぎ弓を使用するのも日本舊來法同樣である。

第二六圖　ダヤーク族の機織　島ボルネオ

機織は女の役目である。織り器械は地方的に差があるが、簡單なものの一として玆に女の機織を示す（第二六圖參照）。

八　衣類の文様

織物に文様を附するに色絲で織る方法がある。大陸の諸種族は此方法を行ふより外には他に文様を附ける法を知らない。東南亞細亞諸島でも此方法は廣く擴がつて、東の方ニューヘブリート島に及ぶ所から考へると、此法は東南亞細亞では極めて古くから行はれたる鄕土藝術なのである。

第二七圖　イカット術にて織られた布　スンバ

此法はイカッド Ikatt と呼ばるゝもので、織る前に絲を染めるのである。豫め染色を行ふまいと思ふ箇所は色絲の束の或部分を椰子樹纖維或は蠟絲で縛つて色素の浸み込まぬ樣にした上で、絲束を色素液中に投じて染色する。彩色を多種類にするには、縛る部分を變へ又色素液を變化する（第二七圖參照）。

此方法はインドネシアに於ては、頗る廣地域に亙つて行はれる。特にスマトラ、ボルネオ、ミンダナオの諸種族に多い。西方諸島であるがジャワには少ない。大陸ではマライ半島からタイ、カムボジヤにかけて行はれる。

更に他の方法は既に織られた布を染色するのであるが、之れに就ては高文化階級の民族に於て後述する。但し此場合に染色せられざる部分を殘す方法としては竹片、樹皮片等で布の一部分をはさみ置く事もある。

九　裝飾品

裝飾品は極めて多種多樣であるが、文化史の研究にも必要なるものである。北はヒマラヤの墻垣から南は南太平洋に至る迄の地域に於て、鄉土材料としての裝飾品は種々あるが、其中で最新の裝飾品たるものは貴金屬を以てせるそれである。

金及び銀を以てせる裝飾品は初め印度に始まり、それから後に北方民族（タイ其他）によりて南亞細亞諸島に流入したものらしい。金製裝飾品は大陸に於ては高文化階級の民族に見る所であるが、中等度文化階級たるカシ族の如きは之れを少々使用する。銀製品はタイ族及び支那族から漸次に擴がつたらしいが、古式民族例へばワ族、モイ族の如きは極く僅かよりしか使用しては居らない。東南諸島でも之れは同樣で黃金製裝飾品は極く少數の高文化階級だけの使用であり、一般の民族には此使用はない。のみならずエンガノ、メンタワイ島、ニコバル島の如きは貴金屬の使用を知らない。

鄉土裝飾品として東南亞細亞に特色のあるのは腰、腕、脚に籐を卷く風習である。此風習中で一番原始的なりと思はれるのは籐を螺旋狀に卷く風習であるが、之れはメラネシアにある外、東南亞細亞にも稀で無い（アッサムのナガ族、ボルネオ、ルスン、小スンダ列島等）。然しそれよりも廣く行はれて居るのは籐を閉鎖した輪の形に造つて幾つも腰に卷くのである。黑、赤、黃等に染めた輪をカチン族の女子は百個位腰に卷く。これはカチン族のみならず、東部ナガ族、ビルマのシャン州の山地住民及びフィリッピン、ボルネオの各地にも著しく存在する。

嘗に腰計りでは無い。大陸に於ては膝關節以下の部にも籐の輪を幾重にも重ねて嵌めるし、又腕にも之れを嵌める。時としては籐の代りに細かく編んだ編み布製輪を用ふる事もある。

また籐でなくして眞鍮針金で造つた螺旋輪をはめる風習も廣く見らるゝ所であるが、其形狀によりて明らかなる如く、之れは籐製品を眞似て造り始められたものだ。此風習は特にボルネオの一部とビルマのシャン及びカレ

第二八圖　眞鍮輪の裝飾の女子　ボルネオ　ダヤーク族

ン州で著しく發達して居る。それであるから、例へばパダウング Padaung（カレン族の北方の一種族）の女性では太い眞鍮の針金を腕と脚とに卷いてゐるのみならず、上膊にも上腿にも卷いて居る。それのみならず首に二十五卷も卷いて居るので首を廻すのに骨が折れる。ルスン、ボルネオ、セレベス等にも往々此狀態が見えるが、針金の重さは數キロに達して女子の運動は之れがために不活潑となる事すらある。北ボルネオのヅスン族では女子は腰の周りに眞鍮螺旋を卷く、又イバン族では眞鍮の針金でつないだ籐の輪の幅廣い帶を腰に卷く。そして此帶の外面には小形の眞鍮の輪が數多く吊されてをる（第二八圖參照）。

此他形狀及び質に於て種々なる古式裝飾が色々あるが、餘りに數が多過ぎるので、玆には極く簡單に述べることとする。海產の二枚貝と卷き貝とは島々のみならず、大陸の海岸及び內陸にも（ナガ及びカチャリ族）使用せられる。そして內陸と島々との裝飾品は此點に於て近似である。例へば卷貝或は平貝を切つて造つた腕輪の如きが其例である。此他羽毛、色美はしき蝶、美くしい甲虫、鳥の嘴、猛獸の齒牙、猪牙、骨、象牙、果實の種子、香氣よき草花等は色々の場合に使用せられるが、特に古式の服裝を爲す時に多く使用せられる。其他細かく編んだ念入りの腕輪、胸輪、頸輪がある。大陸及びルスン島の山地住民では琥珀及び玉髓製の飾玉が著しく賞美せられるし、又所によりては古渡のガラス玉（トンボ玉）を甚だしく賞美する。

十　鼻　飾

アッサムのナガ族の女子は鼻翼に穴を開けて金屬製のボタン飾を附けるが、鼻飾は東南亞細亞では餘り行はれない。

十一　耳　飾

之れに反して耳飾は著しく發達して居る。殆んど全部の住民が其耳朶に穴を開けて之れを擴げてをる。そして其中に木、象牙、半寶石、金屬で造つた栓を差し込む。其れに眞珠が下つて居るのが珍らしくない。又竹、眞鍮、銀製の管を通して之れに花、染めた山羊の毛、羽毛等をはさみ込む事がある。それよりも多いのは眞鍮製の耳輪を多數下げることだ。其數が多いと耳朶が引きさけるので、頭に鉢卷して其れで耳輪の重量を支へることすらある（第二九圖參照）。猪の牙、鳥の嘴を男の耳飾として用ふる事がある。甚だしい場合には耳朶のみならず、耳殼

第二九圖　耳飾を附けを重量を支へる鉢卷をなせるガロ族の女子　アッサム

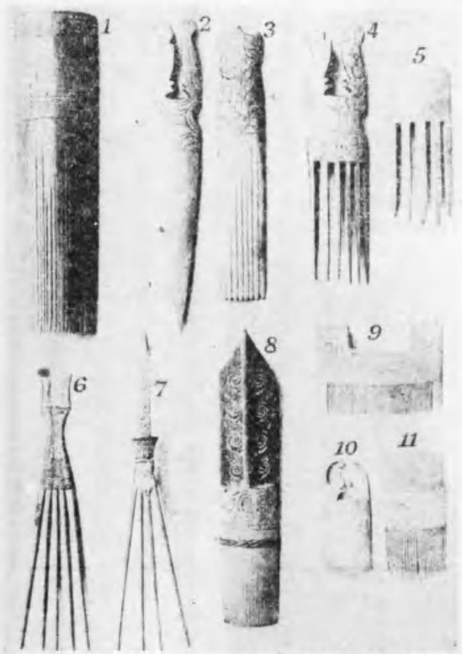
にも孔を通し、又耳の附け根にも穴を通す。

簪は鹿角、角、骨、猪牙、金屬等で造る。

十二　櫛

廣く使用せらるゝものは櫛である。木製の品が多いが、インドネシアでは竹製又は龜甲（鼈甲）製のものが少なくない。地方的に色々の形狀があり、又文樣も種々であるが全オセアニアとしては一種のまとまつた形式の文化產物である。

メラネシア及びミクロネシアの島々では彫刻を施した棒に美麗な羽毛を附したものを善とする（ナガ族、クキチン族、ムロ族、フィリッピン、ボルネオ、フロレス、チモール諸島）。ミンダナオ島の民族中には木櫛に彫刻を施して其凹みの一部に石灰をつめる事もある（メラネシアにも之れを見ることがある）。



第三〇圖　櫛　1 アエタ族の櫛 ルスン島　2〜6 セノイ族及びセマング族の櫛　7 セラム島　8 西ボルネオ　9〜11 カセング族　ラオス地方　6 のみ木製他は竹製

十三　戰鬪服裝・舞踊服裝

裝飾、服飾等が强く現はれるのは男子の戰鬪裝束及び舞踏裝束である。注意す可き事は此裝束には可なり顯著に地方的特色が現はれては居るが、文化關係が近似せるために全インドネシアに互つての類似が存在することである。それからまた此場合に於ける裝飾及び行動は種々の點に於て島民の社會的狀態を現はして居る事だ。例へば戰鬪時に於ける行動（特に首狩）又戀愛に關する冒險、宗教的儀式、犧牲供奉等百般に關係する。勿論此場合に純然たる裝飾品と武器、武具とを使用するが、裝飾品と武器、武具とは往々にして判然として區別し難い。すなはち實用的の武器もあるし、半ば舞踏用の武器もある。そして裝飾にも身體に施せる裝飾と武器に施せる裝飾とがある。

第三一圖　ダヤーク族男子の戰時服裝　サラワク

戰時服裝としての古い風習は上體に布片を卷く風俗である。之れは種々の大きさ及び形狀の布を或は肩部に、或は胸腹、腰等に覆ふのであるが、元來此布片は交戰時に上體を保護するために使用せられたもので、所によりては今日尙實用に使はれて居る所の最簡單なる鎧である（ミンダナオ島、バーナール島）。之れが更に進めばダヤーク人の局所的皮鎧に發達して、山羊、熊、虎猫、蛇等の皮製服ともなるし、又、チモール・ラウトの胸當ともなる。

第三二圖　チモールラウトの男子の戰時服裝

羽毛は戰時服飾として屢〻使用せられる。すなはち戰時服に羽毛を附けたり、籐で編んだ戰鬪帽に之れを着けたり（ダヤーク人、臺灣等）するが、アンガミ・ナガ族は之れの美はしいので有名である。又山羊、犬、人毛も衣服及び武器の裝飾として使用せられる。但し山羊と犬の毛とは色染——殊に赤く染めて使用する事が多いが、人毛は其儘の毛色にて使用する。

此毛髮裝飾はアッサムのナガ族が多く使ふ。それから少し飛んでセレベスに多い。尙東インドネシア諸島に著しく發達して居るのは、羽毛を着けた棒或は籐の類を鎧又は腰帶に取り附けて差し物の如く後に立てるのである（アロール、ソロール、チモール諸島及びニューギニアのツゲリ族等）。又斯くの如き裝飾物を楯に取り附ける事もある（アル、ソロール島、スマトラのバタク族）。これと同種のものはアッサムに於けるアンガミ、アオ、マラム等のナガ族の裝飾楯で、之れには羽毛に非ずして染色せられたる山羊の毛で飾つた棒が取り附けてある。

其他古式の戰時服飾として長い毛の生えた山羊の毛皮で造つたすね當をセレベスの一部、フローレス、ウェタール島で使用する。猪牙製首飾は單なる裝飾である場合が多いが、アオ、その他のナガ族では首狩の勇者の表章である。僞せ髭はフローレス、ニアス島の戰時飾である。尙ニアス島では眞鍮或は黃金で造つた髯の模型を頭から兩端に突き出すが、戰爭或は踊をする時には戰鬪帽に結び付けて上唇と鼻との間に下げる。これは惡魔に象つたものらしい。

第三三圖　中央セレベスのトベ族の戰鬪帽

また戰鬪用のヘルメットに取り附けた角飾りも古式のものである（アッサムのナガ族、ルスンのイフガオ族、セレベスのトラヂャ族、フローレス、チモール、ソロール、アロールの諸族）。但し之れは帽子に取り附けずに鉢卷に取り附けたものもある。尤も之れは實際の獸角を取り附けたもの計りではなくして、水牛の角の形狀を薄つぺらな角で造り、或は木（ナガ族）、眞鍮板（中央セレベス）、銀板（チモール）等で製したものもある。それのみならず野豚（猪）の牙を取り附けたヘルメットは甚だ廣く使用せられ（アボール、ナガ、カチン、ダヤ

ーク族等)、鳥の嘴を取り附けたものもある(アッサムのアボール族、ダヤーク、セレベスのミナハサ及びトラジャ族、レスンのイゴロト族等)。大形且つ華美な鍍金製又は黄金製の飾ある戰鬪帽はニアス島に見られる。

我國の戰國時代に非常に發達した甲の前立て物及びアイヌの寶物たる鍬先きは起原的に上記の戰鬪帽の飾りと關係がある。之れに就ては文化交流に關する特別の檢討を必要とする。

尙戰時服裝として必要なるものは首に下げる携げ袋又は小形の負ひ袋である。此中には煙草又は檳榔實嗜食用の各種器具が容れられる。

第五章　身體毀傷又は身體變形

一　鼻及び耳の穿孔

鼻飾使用の目的で鼻翼に穴を穿つのはインドネシアには餘り流行しないが、耳飾插入の目的で耳朶又は耳殼に穴を穿つのは、甚だ廣く見らるゝことは既に述べた。

二　頭蓋變形

其他インドネシア、マライ半島の諸所に可なり廣範圍に亙つて頭蓋變形の風習があるが、南米ペルーのインカ民族に於けるほど高度ではない。

三　拔齒と齒變形

また拔齒と齒の變形は甚だ廣く行はれる。これは主として門齒に見らるゝ所であるが、齒の先きを尖らすことがあるし、齒冠部を切り凹めることもあり、門齒前面丈けを掘り凹める等樣式は種々である。拔齒する時に齒根部以外を傷けないために特別に其用に造つたのみと木槌とを使ふ所があるが、多くは石で齒をすり切る。今日では歐洲製齒科用の齒拔き器械を使用するに至つた。此拔齒風習はマライ半島にはあるが、大陸では南西部海岸地方のバーナル Balnar、セダング Sedang、トラウ Trau、モイ Moi 等の民族にあるだけで、大陸內部には深く及んで居らない。

四　涅　齒

多くの所では眞白な齒が賞美せられて、檳榔實を嚙むに拘らず努めて齒が淸掃せられるのであるが、他の所では涅齒、すなはちお齒黑染めが行はれる。之れは東南亞細亞諸島の各所に見られるのみならず、大陸でもクメルタイ人の一部、シャン、モン及びカレン族の一部等に見られる。そして涅齒、拔齒及び齒牙變形は屢〻成年期表

徴、或は結婚の直前直後に行はれる。臺灣の或場所では少年少女の成年に上顎犬牙二本を抜除する。中央セレベスでは少女の犬齒、又は犬齒と門齒とを併せて拔除する。エンガノ族に於ては結婚後上顎犬齒を拔除するが如きは其例である。

上記の拔齒其他の齒牙加工は甚だ古くから由來した風習と思はれるのであるが、齒牙を金で飾る風俗は、恐らく割合に近年に印度から輸入せられたものであらう。之れには種々の程度の技工がある。一番輕度であるのは齒の一部分に凹みを造り、或は兩門齒の間に人工的に空隙を擴げて黃金或は其代用たる眞鍮製の有柄ボタンの類を差し込むのである。其度が甚だしくなると數枚の齒を覆ふのみならず、齒ぐきをも覆ふに至る。此風習はバタク族、中央スマトラのマライ族、ダヤーク族、ルスンのイゴロト族、中央セレベスのトラジャ族等に見られる。古い時代には此風習はもつと廣がつて居つたもので、十六—十七世紀にはジャワ人、マカッサール人、タガログ族及びビサヤ族（フィリッピン）にも見られた。また大陸では之れは全然見ない風習であるが、古くマルコポーロの紀行では支那とビルマとの國境では見られたのであつた。

五　割禮

童男の割禮は、インドネシアに於てはモハメッド教徒のみならず異教徒に迄存在する。此風習はイスラム文化渡來以前から既に存在し、イムラム文化と共に更に擴がつたもののやうである。方法としては包皮の切開と切除との兩法共に行はれるが、非回教自然民族には、包皮の一部を結紮して徐々に同一結果に到達せしめる法もある（バタク族、ダヤーク族の一部、アル島等）。

童女の割禮は唯モハメッド教徒のみが之れを行ふ。大陸でも童男の割禮は回教徒のみに行はれて他教徒は行はない。龜頭に横向きに孔を開けて、此部に兩側にボタンのある小棒を通ずる風習はダヤーク族、トラジャ族に特に多いが、其他のインドネシア人にも擴がつて居る。又包皮を引き延ばして此部を結ぶか、或は此部に骨製又は竹製の輪を入れる風習はマニプールのタングール・ナガ族に行はれる。

拔齒風習が性生活と關係あることは臺北大學の金關丈夫教授が記述した。

六　腰　變　形

ニューギニアで廣く行はれて他地方にも及んで居る古式風習に、男子の腰帶を強くしめて腰の格好を變へる風習がある。之れの目的で特別製の帶を作つて居る地方（南西部ナガ族）もあるが、褌のしめ方を強くし同樣の效果に達せしめた所が多い（ルスン北部、セラム島）。

七　入　れ　墨

入れ墨は大陸でも西南諸島でも甚だ多く見る所である。

アッサムに於ける多くの山地住民（ダフラ、アボール、ミキール、アオ、タングール、ナガ等の諸族）、ビル

マの諸族の一部（チン、カレンニ、カチン、シャン族等）、西南諸島では臺灣、フィリッピンの諸族（北ルスンの山岳住民、但しミンダナオ住民は少ない。西班牙時代迄はビサヤ、イロカノ、タガログにも入れ墨があつた）、ボルネオのダヤーク族、ニアス島南部住民、バツ島、メンタワイ島、セラム、アムボン、ケイ、アルー、チモール・ラウト、ババール島からウェーターール、フローレス、スムバ島等に至る住民である。

スマトラ、ジャワ、セレベスには入れ墨が殆ど無い。又ハルマヘラ、ブル島にも極めて僅かに見るのみだ。

或る種族では入れ墨は唯男性のみに之れを見るし、他の種族では唯女性のみが入れ墨を行ひ、又或る種族では男女兩性が之れを行ふ。入れ墨を行ふ身體部位と文様とには顯著な種族差がある。例へば或種族での入れ墨はごく一局部だけに小さな文様を施すに反し、他の種族では全身に亙つて入れ墨を行ふ。ビルマのチン族、臺灣のタイヤール族の如きは其女性の顔、殊に口部、頰部に限りて入れ墨するの類である。

入れ墨の色素としては炭粉と藍とを使用する事が多いが、朱を使ふこともある。點、線、螺旋、その他の幾何學的文様の外に獸形人形の文様化したものを描く。魔術、幻術の表徴は割合に文化の高度なるシャン、ビルマ人等に存在する。但し種族によりて文様を異にするのみならず、同一種族なりとも段階を異にするによりて文様を異にする事もある。又男性の一定の文様は首狩の成功者たる事もある。兩性の入れ墨を施すのは屢ミ成年を意味する。

九　瘢痕裝飾

入れ墨の外に皮膚を火傷せしめて瘢痕文様を附けるのはニューギニアで知られて居るが、インドネシアにも存在する。之れはマヌア、ババール、チモール・ラウト諸島すなはち東南インドネシアの住民に見られる。

九　彩色

身體及び顏面を彩色する風習はナガ、バタク、メンタワイ島住民、トラジャ等の文化の低い種族に見られるのみならず、ジャワ、バリー、ビルマ等の比較的文化の進んだ種族にも見られる。

第六章　發火法

東南亞細亞では少なくとも五種の發火法が知られて居る。その内の二種は割合に新式で發火ポンプ、發火草（もぐさの類）を使ふ方法であるが、殘り三種は古くから行はれたと思はれる所の發火鋸、發火棒、打擊發火法である。是等の諸法は必ずしも種族によりて異なるのでは無く、むしろ或る種族或は其一部の開化狀態に關係するものらしい。そして一種族にして二三種の發火法を並び行つて居るのもある。

發火鋸の場合には鋸として籐、竹等を使用して、之れを木、竹の棒にて擦る。發火棒の場合には簡單な手廻しの棒廻しの外に、紐を掛けて棒を廻したり、廻轉錐もある。打擊發火法としては竹と石と打ち合せたり、石と石

とを打ち合せたりする。石の代りに土器を燒成する事もある。そして石と鐵とを打ち合せて乾燥した草に點火するのが、此類での一番新式である。

此他ビルマ、アンナン、タイ、フィリッピン、ボルネオ、ジャワには發火ポンプなるものがある。之れは閉鎖せられた角製容器中で金屬及び木棒を烈しく動かすと容器の一端に附された點火裝置に火が附くのである。

第七章　竹器加工・編み物・土器製作・家具製作

一　竹　加　工

インドネシアの物質文化には竹が極めて必要なる材料である。住家建築資材としての竹は支柱梁材となるのみならず、壁及び床の構成にも使はれる。そして此際丸竹としてのみならず、用に應じて割竹としたり、平めたりして使ふ。又屋根にも特にスマトラでは竹を使ふ。之れは竹を縱に割り、先づ丸い側を上に向けて並べて張る。その後に上列には逆に丸味を下に向けて張つて間隙を塞ぐ。垣の類も亦竹で造る。

文化の稍〻進んだ種族では引水用の導管、橋、水車の類を造るのみならず、短かく切つて一節を殘した竹筒は容器となる。箭入れから種々の家具、小にしては煙草入れから檳榔嗜食用品入れに至る迄も竹で造り、且つ之れに美事な彫刻を施す。又竹製器が煮物用として使用せらるゝこと前述の通りである。

薄く切り割つた竹條は筵、籠、漁撈用の簀等を編むに使用せられ、又縒り合せて繩の如くして橋梁材料とする。狩獵と戰爭にも竹材は大いに役立つ。すなはち吹筒と弓とは竹で造られて居ることが少なくない。のみならず、矢の先、銛の先も竹で造る。樂器も竹製の品が少なくない。笛、太鼓の一部は勿論の事、竹を使用した複雜な樂器が少なくない。

東南亞細亞には編み物材料の優秀なものが少なからずある。竹、籐、椰子及びパンダヌスの葉、各種の草の類が之れである。使用目的としては家屋、材料(筵壁、床敷)、衣服及び裝飾物(アル島の編み物製上衣、ボルネオ、セレベスの座蒲團、アンガミ・ナガ族の脚絆、各種帽子、編み物製の腕飾、胸飾、首飾)漁撈用簀等で、其れの一部に就ては上述した。其他容れ物籠の類であるが、之れには數米突の大きさのものから、極く小さいものまである。

第三四圖、竹製犧牲置き
1 ラオス　2 南セレベス

アッサムから東部インドネシア迄廣く使用せらるゝものに犧牲を載せる器具がある。之れは太い丸竹の一端を割いて横竹を編んで擴げたもので、此部に犧牲の遺骸を載せて地に立てる。一種の祭壇である。首狩で獲た首を一時的に、或は永く此上に

置いて保存することもある。ビルマのワ族、北ルスンのカリンガ、チンギアン族、スマトラのバタク族等に見る所である。

二　籠及び編み袋

古式住民には此外編んで造つた肩負ひ籠がある。底部の尖つた形のものが多い。此籠に二條の編み紐を附けて肩に負ふのもあるし、籠の上部に附けた紐を前頭部に廻して肩に負ふ地方もある。中央セレベスでは編み籠の代りに毛皮製のリュクザックを使用する。是等の編み物の材料には椰子の葉、パンダヌスの葉及び其繊維等各種の品を使用する。

三　土　器

土器は可なり廣い範圍で製作使用せられるが、鐵製鍋の輸入によりてボルネオ島の大部分に於けるが如く土器の自家製造は減少しつゝある。之れは勿論土器を製造する原料の粘土産出にも關係するが、往々にして土器製造の主産地があつて其所から賣り出される。例へばニコバール島のチャウラから全群島の土器を生産する。そして地方によりては織物に於けるが如く、土器製造禁制の地方もある。

土器製造には大形の粘土塊から手づくねで造ることもあるし、粘土紐の卷き上げ法によりて土器を造ることもある。又ナガ族に見る如く竹筒或は椰子實を型として其周圍に土を附けるのもある。

第三五圖　臺灣アミ族の土器造り

焼成釜及び釉は印度支那半島の文化住民に見るのみで、西南諸島には見られない。釉の代りにインドネシアでは土器の面に樹脂を塗る事がある。火力によりて溶けて土器の面を滑らかにする。多數の種族に於ては土器製造術は進んで居らない。これは竹、椰子實、角（例へばナガ族の水飲み器）等の製品が進んで居るためである。

四　水　器

インドネシアの家具中可なり特色のあるのは錨形の鈎で木、角、骨等で造り、衣服、武器等を吊すに使用する。

子實の殼で一端に木の柄を附けた形式（深い手柄杓）のものは、北は印度支那から南はニューギニア、ミクロネシアまでの範圍に亙つて行はれるが、細部に色々の地方差がある。淺めの匙で一端に籐製の柄を附したものがある。又小形の匙は特色が極めて多く、ニューギニア其他のメラネシアでは強く曲つた形式であるが、チモール近

傍では角製のものが多い。東部諸島では貝の匙が多く、ルスン、臺灣では木製であるが、柄に人の形其他を彫刻した美品が多い。

第八章　金屬加工

東南亞細亞諸島では原始的な樹皮が使用せられて居ると同時に、進歩した木綿織物も使はれて居る。之れと同様に金屬使用以前の形式の器具に交へて、金屬器が使用せられる。

槍又は投槍の尖端を火で燒いて硬くした竹、又は木で造つた槍であるが、之れはインドネシアの未開種族に廣く分布せるのみならず、文化の進んだブギ族も之を使用する。大陸に於ても所によりてガロ、クノング、ワ、セダング族が使用する。

矢鏃として木或は骨を使用せるものはフィリッピン、モルッケン、チモール等に之れを見る。水牛の肩胛骨を以て造れる鈎又は鋤はビルマのカチン族、中央セレベスのトクラヴィ族等にあるし、竹刀は諸種族に於て屢〻臍帶切斷に使用せられ、貝殼は稻穗收穫の刀として使用せられる(ルスン島)。燧石は鐵片と共にビルマのチン族に於て發火用に使用せられる。

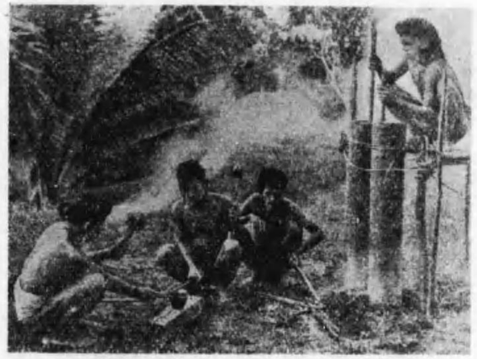
然し如何なる程度で各種族が鐵技術を行つて居るかは一様でない。メンタワイ島の住民は二百年前までは石器時代であつたらうと思はれるのであるが、形の略〻出來上つた鐵片を研いだり、冷たい儘で鐵片を打つ以外には鍛錬法を知らない。又或種族では輸入せられたる鐵材を以て武器其他を製し得る程度の技術を知つて居る者があるかと思へば、案外山地種族にして鑛石から鐵を作り得る者もある。

尤も所によりては製鐵を初めから知らないのか、又は之れを忘れたのか分らない場合もある。ボルネオのダヤークの如きは歐洲鐵の輸入後に面倒な自己製鐵を止めてしまつた。之れに反して東部インドネシアでは鐵技術は新らしい時代に知られたものらしく、昔は知らなかつたものらしい。

メンタワイ島、エンガノ島、東インドネシア諸島、ニコバール島及び大陸と大島の内陸を除いて、東南亞細亞の住民が鐵を知つたのは印度人の植民以前らしい。然し鐵時代は印度支那半島から東南諸島に傳はつたものだ。然しアッサムからニューギニアに到る廣い地域に擴がれる鞴(ふいご)は、印度から傳はつたもので多分竹筒から來たと思はるゝ形式である。一番廣く用ゐらるゝ簡單なる裝置は上部の開いた二聯の竹筒或は木筒が二個立ててあるものである。そして此筒の一端から各一本の細管が出て火口に送られる。筒の中にはピストンが動き、此ピストンには羽毛製の辨が附してある。ピストンを壓すと細管から空氣が吹き出されるから、二聯筒のピストンを交番に動かして間斷なく空氣を吹き出す。ビルマでは一本の槓に此二本のピストンの軸を取り附けて交番に動く様にしたものがある。一本だけの吹筒は稀だ。四本以上の吹筒もある。ボルネオには十二本聯立の吹筒すらある。

此竪筒式以外の東南亞細亞の鞴の諸形式は比較的新時代のものらしい。

例へば囊狀鞴 Schlauchblasebalg はアチェー族、ジャワ及びロムボック島住民に使用せらるゝが、之れは印度、若くはアラビアから輸入した形式らしい。



第三六圖　竪筒式鞴と石槌とを使用して鍛冶を行ふ

支那傳來の形式は兩端閉鎖の横臥式圓筒である。圓筒形のもあるし、矩形の箱形のもある。進歩した形式のものは兩端に辨があり、我國でも古く用ゐられた。此形式の鞴は印度支那南部（トンキン、アナム、カムボジャ、ラオス並にジャワ）にある。此他にも幾らかの鞴の形式はあるが、之れが系統に就ては尚今後の研究を必要とする。

土製の融溶爐を用ふる事もあるし、又爐無しに金屬を溶解する事もある。すなはち斜に立てかけられた石の下で之れを行ふ。カシ族は此兩法共に之れを行ふ。ビルマの或る地方では鞴無しに自然通風の爐を使用する。火力はすべての場合に木炭である。

鍛冶道具としては石敷きに石槌を使用する事が多い。石鎚には柄が附いて居る。但し細かい細工には鐵槌と鐵鉗子を使ふ事もある。

鋼鐵製造には鐵片を交番に加熱冷却する法を知つて居る。

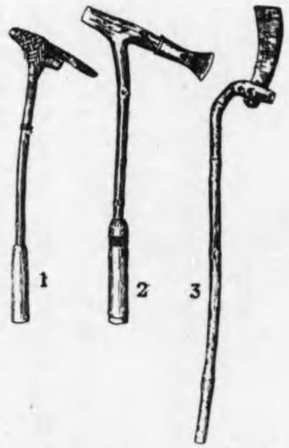
諸島よりも比較的に大陸に廣く行はれて居るのが黄銅鑄造である。之れは眞鍮製の裝飾品、小鈴、小函を造る。

此技術の最も優れて居るのがバタク族である。そして小形品のみならず一米突以上の大形の美術品をも作る。

稀には今日開化民族から殆んど忘れられた青銅をも製作する。所によりて貴金屬細工を行ふが、之れは近接文化民族からの感化なのである（バタク族、イゴロト族等）。

第九章　器具と武器

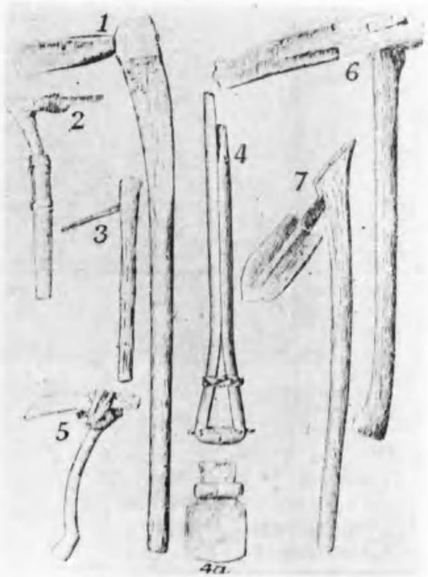
一　斧



第三七圖　斧類各種

1 ボルネオ島ダヤーク人の斧．柄との間を籐にて結ぶ　2 佛領ラオスの斧　袋柄　3 モイ族（ラオス）の鎌竹柄。刃は内部に曲つた方に附す古式

道具と名附く可きものの中で斧だけを述べることとする。之れに二種ある。第一種は柄が膝狀に曲つたもので、之れはインドネシアの大部分のみならず、マライ半島にも存在し、印度支那半島の一部にも及んで居る（ビルマで船の製作に使用する）。刃の方向は柄の長軸に平行の事もあり、又直角の事もある。刃



第三八圖　斧各種

1東ベンガール。2ルチェイ族の鋤，東ベンガール。3ムロ族の鋤，柄は竹製，東ベンガール。4ナガ族の鋤，アッサム，柄は割つた籐　5南セレベス　6バリ島　7スマトラ島

は袋柄のものもある。

第二種の斧は柄は強く屈曲して居らない。そして柄の一端が太くなつて此所に刃を入れる穴を通す。此形式は大陸の内部住民に多く、アッサム、西ビルマ等にも多いが、東部諸島（カイ、ニアス島）にも及んで居る。兩型共に石斧の形式の刃部（鐵製）を備へて居るが、多少異なつた形式の此種鐵斧がエンガノにある。此地の住民は一七七〇年迄は確かに石器時代であつた。

二　棍棒

棒の類は武器としては古式のものであるが、此地方では散的性に使用せられる。それであるからまとまつた記述を試みるのは困難である。アロール島では斷面圓形の單純な棍棒が使用せらる。アル島では單純な棒に星形に釘が打ち込まれて居る。同島では又撲り棒に鮫の齒が打ち込まれたものがある。エンガノでは二米突程の長さの平たい棒が女の使用する棒であるが、戰爭の時には置き楯を打ち壞すのに使用せらるゝと云ふ。セレベスには棒は割合に多い。そして此島のトアラ族は棒に金屬片を取り附ける。北セレベスのミナハサ人も昔は戰爭に棍棒を使つたと云ふ。又セレベスではくの字形の棒をブメラン樣に鳥狩に使用する事がある。兩側が尖つた棒をボルネオ及びマライ半島では投げ棒として戰に使用する。其他スマトラ、キッサール、ジャワ、モルッケン等に棒の報告はあるが、此地方に棒は少ないものらしい。スマトラ及びジャワには金屬の打ち込まれた棒があるが、印度文化の影響によるとせられて居る。

三　槍

東南亞細亞で殆んど全區域に亙つて使用せらるゝ武器は槍である。最も多く存在する槍は木製、竹製及び木柄竹穗の三種である。尖端部が多數に分れて其れに多數の鈎の附いた投槍は、大ニコバール島のショーム・ペン族、モルッケン、殊にハルマヘラのアルフール人が使用する。セラム島のアルフール人は骨製の尖端を具へた槍を使用する。又エンガノでも古くは魚齒を槍の尖端に附けて槍とした。

然し槍先には近來次第に鐵が使はれ出して居るが、鈎ある槍先がインドネシアでは盛んである。そして使用せざる時には槍先を木製の鞘で包む（カレン族、ダヤーク族）。投げた後槍に結び附けた紐で引きもどす類は古く

臺灣、ハルマヘラで使用せられ、ブギ人及びマカッサール人も遠征に之れを使用した。

槍の柄を毛で飾る風習も多い。之れはアッサムのナガ族に於て著しい。山羊或は犬の毛を刷毛様に短かく切つて白或は黒く染めて槍の柄を飾る。又人毛を附することもあるが、之れは染めないし、又自然の長さである。此毛で飾る風習は東南亞細亞諸島にも及んでスマトラのバタク、ルスンのカリンガも之れを行ふのみならず、更に南方セレベス、チモールに到れば盛んとなる。

四　刀　劍

刀劍、小刀、短刀の形狀は、東南亞細亞では南北二地方に區分せられる。北部は臺灣と大陸（マライ半島を除く）とであり、南部はマライ半島と北部ルスン以南のインドネシア全島である。ルスン島北部は南北兩部の中間帶で兩型式あるが、北方型式が多分である。

北方型式は大多數は片刃で、大抵相當に彎曲して端部は廣がれるもの多く、且つ鋩（きっさき）は尖らない事が多い。櫃（つか）は長くて丸く彫刻の無いものが多い。南方型はサーベル型で鋩は失れるもの多く、尖端に近づいても刃はさほど廣がらない。櫃の端部は太くなつて彫刻がある。

極端なものを考へ合すれば北方型の特色ある形が最も強く現はれて居るのはアッサムのナガ族及び北ルスンの山地民族が使用する所の劍斧（ハレバルト（Axt）と云へる。此劍斧と普通の劍との中間に立つものはビルマ人等が

第三九圖　斧

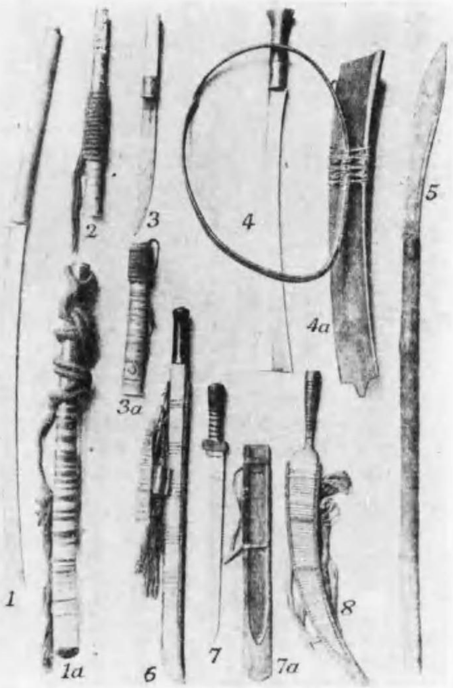
1 チンギアン族所用（北ルスン）　2 ナガ族所用（北ビルマのシンドウィン川上流）　2a 2の鞘　3 アンガミ・ナガ族所用鞘に人毛と赤染の山羊毛を附す（アッサム）

使用する家庭用小刀、又は北ビルマのカムチ族 Kumti 及びカチン族 Katschin が使用する刀で端部が廣くなつて直角に終つたものである（第三九圖參照）。

文化民族（ビルマ人、タイ人、シャン人）の劍は其形が幾分異なつては居るが、形式に於て日本刀を想起せしむるものがある。但し印度支那半島東部の此種の劍には鐔（つば）が無い。又柄は比較的長大でラオ及びモイ族では刀身よりも柄が長いのは家庭用刀から發生せる事を示すらしい。曲つた杖の一端に刃を附したモイ族の草刈刀或は家庭鎌も古式なものである（第三七圖3參照）。東に來ると共にそりの強い刀が現はれて臺灣の蠻刀には此傾向が著しく現はれたものがある。

鞘に於ても東ヒマラヤ乃至東ビルマ地方と臺灣乃至北ルスンと近い關係がある。すなはち木鞘の一側の木がない形の品で、此木の無い部分は籐、竹、或は金屬針金で覆はれた形式の品であるが、同種の鞘は北部アッサム族カムチ族、カチン族、ナガ族等にもある。ルスンではボロ、イゴロト、イフガオ族は此一側鞘を使用する。ボルネオには此種の鞘は極めて稀にしか見られない。

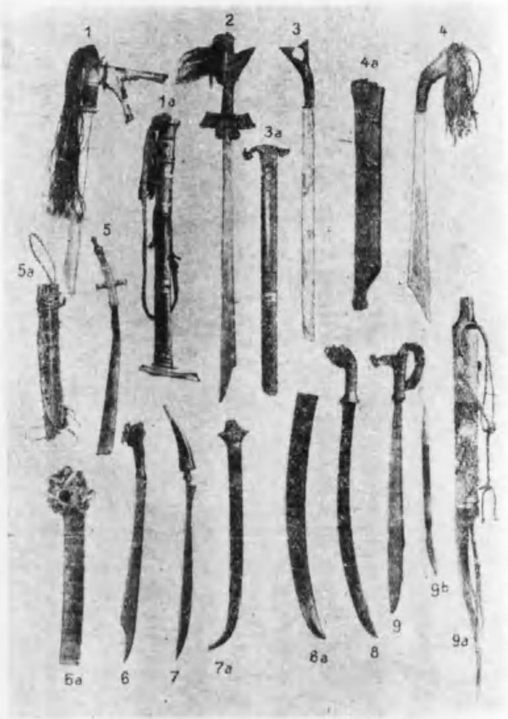
インドネシアの劍、短刀類は事實上、其種類が極めて多數で之れを一々記述しては巨冊となる。或種族に基本型式があつても之れが千變萬化して他種族のそれと交錯して新型式を生む。此多年に亙つて發達し來つた劍形式を分解するのは蓋し容易な仕事では無い。



第四〇圖　印度支那半島及び臺灣の劍類

圖解　北方型の刀

1 シャン族の劍（ビルマのシャン州）柄は竹製にして上に紐を卷けり　1a は其木鞘なり　此刀形日本刀に似たり　2 シャン族の短刀　劍は鹿角製にして頭部に猿と猛獸を彫刻す　3 シャン族の短刀，柄は鹿角製なり　3a 劍は銀板を張る　4 及び 7 カチン族の劍（北ビルマ）　5 佛領ラオス　6 及び 7 臺灣。



第四一圖　西南諸島の劍

1 中央セレベス　角製柄人毛を以て飾る　2 カムビラン劍（西ミンダナオ）柄は木製，二個の青銅製鐔を有す　3 アチェー族の劍（北スマトラ）　4 北セレベスのトウチ湖畔　柄は木製にして毛飾あり　5 ダヤーク族の劍（西ボルネオ）　6 南ニアス島　鞘は籐卷きにして籐籠の護符を附く　7 バタク族（スマトラ）司祭者の劍　柄は鹿角製　8 マライ族（ボルネオ）の刀，柄は鹿角製にして彫刻あり　9 カヤン族（中央ボルネオ）

曾に文化民族のみならず、ダヤークの如きも、其刀身を銅銀等で象嵌して色々の文樣を現はす。刀身よりも遙かに複雜なるは欄である。多く見られる意匠は欄頭が口を開いた獸の頭形を成せるものであるが、或は非常に複雜化せられ、或は反對に非常に簡單化せられて一見しただけでは頭形の變化したものとは思考し得ざるものが少

なくない。此形式のものはフォイ Foy 氏の研究によれば、印度劍欄の獅子頭の形式から出發したものらしい。そして南ニアス、カヤン、ケニア、ボルネオ島のダヤーク族の使用せる劍欄の「口を開きたる獸頭」及び人像は印度の神話に其源を發する。全體として多少の例外はあるが、インドネシアの劍欄は直接或は間接に印度藝術の影響を受けて居る。

槍を飾つた毛（赤色の山羊毛、人毛等）は劍柄をも飾る。此劍をクルワン Kiewang、又はマンダウ Mandau（ボルネオ）とも呼ぶ。

刀身の先端が多少幅廣くなつて峰から急に細くなつて尖端を以て終る形式は、インドネシヤでは古式のものだが廣く分布して居る（第四一圖14569參照）。

欄に開口獸頭の彫刻があり、且つ十字鐔ある劍はカムピラン Kampilan 型として知らるゝものであるが、セレベス海の周邊地方、すなはちミンダナオ、北ボルネオ、北セレベス、タラウト島、サンギ島で使用せられる。バンダ海及びアラフラ海の住民は電氣エヒの皮で欄覆ひを造る。

此他細身のサーベル型の劍がある。時として十文字欄となつて居るが、之れは最近歐洲文化の影響によつて成つたものだ。之れと西ボルネオのダヤーク人所用の十字鐔劍（これは鐔と刀身とが離れない樣に一塊となつて居る）と混同すべきではない（第四一圖5參照）。

五　クリス劍

以上の外に印度支那半島の文化と多大の關係ありと思はるゝ兩刃の短刀がミンダナオ島、スル海諸島、北ボルネオ島で使用せられる。然し兩刃劍として高度及び中等度文化民族中に最も廣く行はるゝものはクリス劍 Kris である。此形式の劍は古くジャワに於てヒンヅー時代に現はれ、今日迄に非常に多種類の形式を示した。兩刃で

第四二圖　クリス劍　柄は象牙にして金とルビーにて飾る　ジャワ所用

劍身が直なるものもあるが、多くの場合劍身は蛇行して居る。そして一本の劍身が單一鋼から鍛造せられたものもあるが、往々にしてニッケル鋼其他を使用して複合鍛造を行へることダマスカス鋼に等しい。欄は木、象牙又は金屬製でビストルの臺座形、又は人の形、時としては鳥頭の形である。優良品は欄及び鞘に細密なる彫刻が施され、且つ寶石の嵌入のある美術品である。

注意す可きはカムピラン型と非常に近似せる型式の劍が大陸たる印度支那半島の内陸住民によりて使用せらることである。即ちチタゴング及び北アラカンのクキ・シン族の劍の如きはカムピラン型の一變種と思考せらるるものである。前掲の如くカムピラン型劍はセレベス海を中心とせる海賊民族の武器であるが、イスラム文化

の影響を受けたものである。ベンガール海沿岸はアラカンからガンヂスの河口まで十六―十七世紀は此海賊船の跋扈せる場所であつたから、此形式の劍の印度方面への逆渡來は考へ得らるゝ所である。

また上述ダヤーク族の使用せる刀と鐔とが一塊を成せる十字劍の類品が、ガロ及びカシに行はれるのは少し了解し難い事である。然しアッサムからボルネオにかけて昔時此種印度系の刀劍が擴つて居たのだが、新らしい時代に中間の地方では廢止されたと思考し得る。少なくとも未開化種族の武器の一部は、昔時の開化民族の武器の傳承である。

また上述モイ族の使用せる草刈り刀として曲れる杖の頭部に刄を附せるものと同一形式の武器がアンコール・ワットの浮彫石圖（西紀十一―十二世紀）に於てカムボヂャの歩兵及び騎兵が所持して居る。また此浮彫刻にはカムボヂャ武人が羽毛を附けた槍を持つて居るが、之れと似た形式の品は今日ボルネオのダヤーク及びセラム島住民が使用する。

六　弓　と　矢

木製及び竹製の弓は狩獵及び戰鬪用として臺灣、フィリッピン（ネグリト、半ネグリト、ルスンのチンギアン、イロンゴト、ミンダナオの種族）メンタワイ島、ハルマヘラ、セラム、小スンダ列島殊にスムバワより東方の諸島、ケイ及びアル島に使用せられる。

ジャワでは今日弓は的遊戯に使用せらるゝのみであるが、西紀一八二五―一八三〇年のジャワ戰では弓矢は武器であつた。バリ島では其れよりも遲く迄使用せられた。此地方の古記錄、支那、歐洲の文獻、口碑傳說、玩具の分布等から判斷すると、二三百年前まではジャワのみならず、スマトラ、セレベス、ブル、マライ半島、フィリッピンの全住民、ボルネオ島の海岸マライ、ダヤーク人等インドネシアの全住民は弓を使つて居たのであつたが、火器と吹筒の普及によりて弓は減少した。

今日大陸の種族も弓を使ふものがある。多くは竹製であるが、西部ではクキ・チン族、ナガ族の一部が之れを使ふ。然し銃器と弩の侵入によりて次第に減少しつゝある。それから北部アッサムの諸種族、カシ族は旺んに弓を使用する。ガロ族では弓は兒童の玩具として殘つて居るのみである。印度支那の中央部及び西部の種族にも處々に弓を使用する者がある。

弓の形式を詳述すると長文に失するから、玆には簡單に記載する。カシ族は竹製の弓と弦とを使用するが、弓の兩端は太まり此所に結合せられたる締係に弦が結合せられる。此特色ある弦の結合方法は西アフリカに知らるるものであるが、西方中央印度のヂャング族、ビール族から後述印度支那に於ける圓彈弓使用の民族分布區域を越えて海南島からフィリッピンに及ぶが、後者ではただ處々少數行はれるに過ぎない。

其他籐、或は植物纖維を縒つて造つた弦を弓の兩端に附されたる溝から垂れ下げたり、又兩端を平たく切つて弦を下げたりする。そしてチモール・ラウト及び小スンダ列島の木製臺弓では弓端部は擴がつて柱頭狀をなし、

弦を掛ける役をなして居る。

バリ島の弦の掛け方は稀なるものだ、それは弦の兩端に鐵製の鈎が附してあつて、之れを弓の兩端に附した鐵製の耳に掛けるのである。

弓の周圍を籐で卷いたり、籐で編んだりして補强するのはインドネシアでは稀でない（フィリッピン、チモール・ラウト島等）。又木板等を弓體の外部に當てて、體を丈夫にする法はアル島に之れを見る。

以上は單弓に就て之れを述べたが、複合反射弓は印度及び支那文化の影響の下にインドネシアでは高級文化住民が使用する。然し此形式にはインドネシヤとしての鄕土趣味は少い樣だ。今日ジャワでは木製、竹製の單弓の外に一部分角を加へて製した亞細亞型の弓がある。

矢鏃としては鐵、銅、眞鍮（メンタワイ島）の外に竹、木、骨がある。鈎ある鏃は稀でない。紐で柄と連結して頭部だけ容易に離れる樣になつた銛、先端が幾つにも分れた魚獵用の銛等もインドネシアに存在する。矢には羽毛が剝いでない場合が多い。

七　圓彈弓

圓彈弓がある。此弓の弦は二條の竹條、若くは籐條を竝べ合せたものだが、弦の中央部には平たく編まれた部分があつて此處に土製彈丸を乘せて射る。印度支那半島では可なり廣く使用せられて居るが、インドネシアではスマトラに之れを見るのみである。此弓は弱力なので鳥と小獸の獵に使はれる外、水田の害鳥を追ふ位のものである。

八　弩

弩（いしゆみ）は北地から輸入せられた。卽ち南支及び印度支那から流入して弓を壓迫、廢用に歸せしめつゝある。

弩は印度支那半島でも廣く使用せられる。十九世紀に火器が輸入せられたのではあつたが、又弩器は印度支那山地住民の主要武器となつてしまつた。すなはちカレン、カチン、ラフ、ワ、モイ、ミアオ、ヤオ等の諸族、特に上部サルウィン及びメコンのリシャン人、タイ人から輸入せられたのではあつたが、今日では弩器は印度支那山地住民の主要武器となつてしまつた。すなはちカレン、カチン、ラフ、ワ、モイ、ミアオ、ヤオ等の諸族、特に上部サルウィン及びメコンのリス族では大いに使用せられる。短い竹製の矢は前方が尖らされ、鏃身との間に多少細くなつた頸部があるものもあるし、又鐵、銅、眞鍮製の鏃を附したのもある。羽翼としては矢尾を縱に三つに割つて竹葉を挾む。

之れと可なり形式の異なつた長形の弩を用ひてニコバール島の住民は鳩狩を行ふ。然し之れは歐洲輸入の形式らしい。

其他インドネシアの東部では弩を小兒の玩具とせる所もあるが、古く此地方で弩を武器としたとは思へない。

九　吹筒吹矢

其他特色ある飛道具として吹筒がある。マライ半島では内陸の極く少數の原始種族が今日では使用して居るだけで、セレベス、スマトラの海岸地方と共に全部今日は使用して居らない。然しさほど遠からざる昔時に於てマライ、ジャワ、マカッサール、ブギ人は武器として吹筒を使用して居つた。スマトラの内陸種族、ニアス、バンカ及び其周圍の小島、小スンダ島としてはチモール及びキッサールの住民、セレベス内部種族、フィリッピンの各所、特にボルネオのダヤーク族は今日吹筒を使用して居る。ニコバール、メンタワイ、エンガノ諸島、又チモールから東方の諸島では吹筒を使用しない。モルッケン島では割合に近世にマカッサール人によりて吹筒が輸入せられたらしいが、盛行せずして止んだ。

マライ半島以外の大陸では吹筒の流行は餘り良くは知られて居らない。然しメイセイ、マニプリ、ブレ、カレン、又モイ族の一部では吹筒が行はれて居る。

竹製の吹筒（マライ半島及びジャワ）の外に木製のそれ（特にボルネオ）がある。吹矢としては木製及び鐵製のものが多い。竹製又は椰子葉の柄製のもの、又は其先だけに鐵、眞鍮又は魚齒を附した吹矢を筒の中に嵌め込む栓は、植物の髓又は木綿である。

十　毒　矢

弓の矢鏃と吹矢とには常に毒が塗つてある。インドネシア及び印度支那半島の南部では所謂イポ Ipoh なる毒を使用するが、之れはウパス樹（Upas 又は Antiaris toxicaria）から採つた液汁、又は其根からの毒で、アルカロイドを含有する。印度支那北部ではアコニト屬の有毒質を使用する。

環太平洋民族の毒矢に就ては近く私は別書（インドネシアの民族醫學）として詳記する。

十一　投　石

手で石を投げるのは原始的戰法ではあるが、要塞防禦の際に之れを行ふ。インドネシアには此外尙投石器がある。

十二　楯

然し防禦武器として重要なるものは楯である。インドネシアの楯は多種類なる點に於て特色があるが、フロベニウス Frobenous 氏も云ふ如く此點に於てインドネシアは世界一である。それで以下古式の楯に就て略述する。

（一）　アロール島に於て前衛戰士の使用する細長なる手持ち楯は、最簡單なる形式で棒形のものに側面から開けられた穴が把手となる。之れはオーストラリアに於ける原始的の楯と關係あるものである。

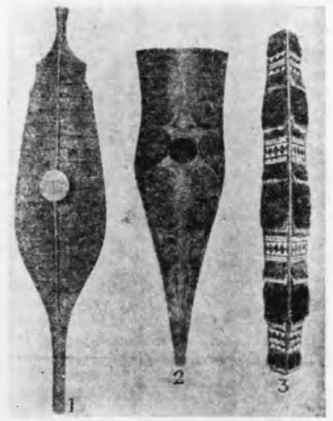
（二）　此細楯と廣楯との混合型とも見られるものはウェターール島のそれである（第四三圖參照）。上部は細くなつて木或は角で造られる。下部は廣くして水牛皮で張られた部分があるが、上下兩部は柄で取り附けられて居る。

廣い部分の中央に穴が開けられて居つて、此處から腕を通して戰士は細部を握る。

（三）やゝ進歩せる木製手持楯では中央部高くして兩側が低くなつて居る。そして內面には飛び出した把手があつて、之れに彫刻がある。南方の島々では此種の楯は細くて長いが、セラム島民使用のものには上下とも反りがある。モルッケンとセレベス島の一部で使用せるものは中央部が細くなつて居る（第四四圖參照）。尙セレベスとセラムとには強く屋根狀をなしたるものがあり（圖3參照）、又木製のみならず編み物製のものがある。

第四三圖　ウェタール島內陸に於けるトプチフ族の酋長

（四）是等の楯は卷き貝、平貝、或は色彩りしたる籐、或は色染めした毛で飾られる。ボルネオの廣い木製楯には兩端が尖つて三段の繪文樣あるものが少なくないが、繪は文樣化せるデモンと唐草とが多い。そして屢〻又



第四四圖　楯　三　種

1 ニアス島の木楯　2 メンタワイ島の木楯，圓形突出部は椰子樹の實を切つたもの　3 北セレベスの木楯，銀板を張り毛を植ゑてゐる

山羊毛、又は人毛で飾られる（第四四圖參照）。

（五）楯の內面の把手が飛び出して居らずに握り用の凹みが掘り込まれたる形式の品が古いらしい。メンタワイ、ニアス及び北ルソンに此式の楯を見る事がある（第四四圖12參照）。

（六）エンガノ島に於ける重さ二十五キロの置き楯は特色がある。戰士は此楯の後から投げ槍を投ずる。

（七）別種の發生系統をたどると思はるゝ形式のものに、ニューギニアに於て知らるゝ彎曲楯なるものがインドネシヤにも存在する。之れは細長い楯で紐を附して左肩に荷ふ。

第四五圖　楯色彩の彩ダヤーク族

（八）アル島に行はるゝ彎曲楯は特色あるもので、籐及び椰子纖維の紐で編んだものである（第四六圖參照）。上半部は四角形で辨を具へて居る。此辨下の穴から戰士は左腕を差し込む。

（九）ソロール島及びアロール島の彎曲楯には穴を開ける代りに一側から切り込みがあつて、此切り込みに戰士の左腕を入れる。使楯は木及び獸革から造られる。

（十）新文化の波は亞細亞大陸から長形、四角形の楯で橫に把手の向いた形式の楯をもたらした。此橫把手は大抵二段に附いて居つて、上段の把手には左腕を差し込み下段の把手は左手で握る。此部類に北部ニアスの大形

の木楯（獸皮張り）が屬する。またバタク及びトラヂヤ族の小形の皮楯及び小スンダ列島（アロール、ソロール島）の木楯等も此部類に屬する。

斯くの如く東南亞細亞の大陸は近世式の長形楯の源泉地であり、此源泉地から各種の楯型が東南諸島に傳來した。それだから印度支那半島には新式楯の諸種型式がある。

すなはち木楯に毛皮を張つたモイ族所用のもの、カチン、チン、ルシャイ族の革楯、ナガ族の革と編み物で造つた楯の類である。

然し古式の楯も此地方に無い譯ではない。ガロ族には長軸の方向に把手のある木楯がある（此種族には別に革楯と竹楯とがある）（四五圖參照）。又ラオスのカセング族の皮張りの木楯は横向きの把手を持つて居るが、其形狀に於て古式楯の影響を受けたものなることが明らかだ（四七圖參照）。特にアンガミ及びナガ族のそれは彎曲楯の影響があるし、又此楯には紐を附して肩に背負ふ。

第四六圖　アル島の編み楯

此地方に於ける最新の楯の形式は圓楯である。此形式は文化の高等な種族（例へばカシ、カムチ、シャン、マライ、ジャワ人、モロ族等）からもたらされたものだが、山地の未開種族（マニブールのナガ族、モイ族、ミンダナオのバゴボ族又ダヤーク族の一部）に使用せられる。元來は革製であつたが、今日多くは木製である（ラデ、モロ、バゴボ、ダヤーク族）。小スンダ列島ではベルガメント製のものがある。

十三　鎧

上記アル島の編み楯と同樣製作の鎧がある。アル島には此種の鎧で特に古式形狀の品があつて、籐で編んだ廣幅の帶がある。其他籐編み鎧の存在が各所から報告せられた。

第四七圖　新式楯三種

1 カセング族の山羊皮を張れる楯（佛領ラオス）2 牛皮製楯（アッサムのコニヤク・ナガ族所用）山羊毛及び草にて飾れり　3 モルッケン島の木楯　貝殼にて裝飾す

（一）最も多く見る形式は袖無しの前方の開いた此地方の古式衣服と同一形式の鎧であるが、唯鎧では木纖維製の紐で、前方が閉ぢる樣になつて居る。籐編み又は籐と木纖維絲との交ぜ編みである（ニアス、ボルネオ、セレベス、ケイ島等）。

（二）木綿入れのジャケット風の鎧がある。スマトラのガヨ族とダヤーク族に見る所だ。フィリッピンでも古く之れを用ゐた。

（三）革製のジャケット式鎧も可なり廣く大陸から東南亞細亞諸島へかけて使用せられた（ニアス島、フィリッピンのモロ族、セレベス、小スンダ島等）。

（四）　アロール島及びチモール・ラウト島では胴があり、且つ背部の強く保護せられた形式の鎧が使用せられる。

（五）　特色のあるのはイバン族（海岸に住せるダヤーク族）及びトラジャ族の魚鱗鎧（第四八圖參照）である。樹皮布にイバン族は大形魚鱗を縫ひ附けるし、トラジャ族は小形に切つて縫ひ付ける。フィリッピン島では古く之れと似た形に木版の小片或は角片を附けた。

（六）　ミングナオの或る種族は曾てマニラ麻で厚く編んだ鎧で戰士の上體を覆つた。

（七）　裝飾物と鎧の區別も場合によりては明確に立ち兼ねる。例へば前章裝飾中に述べたる戰舞衣裝中のダヤーク人の毛皮製胸飾の如きは其一例である。

第四八圖　ダヤーク族の一種に布皮樹皮の鎧イバン族を附す鱗ボルネオ

十四　兜、帽子

籐、若しくは毛皮で作つた帽子類に就いては上述したが、是等の品と兜との區別は判然たらざる場合が少なくない。往々にして平時と戰時とにかぶる帽子は同一である。

特に諸民族に屢〻使用せらるゝヘルメット形の帽子は通常頗る丈夫に作られて居つて頭部を保護するに足りる。此種ヘルメットは籐を編んで造つたものが少なくない。其外の材料で造られて居ることは稀だが、ニアス島にはブリキ製のものがあるし、革製のもの、鐵製（古鐵を使つたもの）の品がある。ボルネオには鎧同樣に魚鱗を使用した兜、或は樹皮布に穿山甲の鱗を附けたもの、ニコバール島ではココ椰子實の殼の纖維を材料としたもの、或は樹皮布を木綿で覆つたものがある。

此帽子の飾として羽毛、猪牙、角の類を附する事は裝飾中に既述したが、猶これに就ては後述する。

第十章　船

一　獨木船

インドネシアに於て航海に熟達せし種族は、造舟と航海とが生活の大部分であるが、內陸の民族にも之れは重要な部分である。其れと云ふのも內陸であつても住民の大部分は川筋に沿うて住居して居るからである。印度支那の川面は勿論の事、ボルネオ及び東スマトラの內陸に到るまで、一日の生活の多くの時間は水上で過し、交通の大部分は舟に賴る。

斯くの如き次第であるから船の形式が種々雜多であるのも、幾つかの基礎型が混合した結果であつて、之れが地方型となつて現はれたのである。從つて家屋、劒、楯等よりも更に多種多樣なるは船である。

インドネシアの廣大なる海域には其固有の文化から發生せる船の外に、色々の時代に印度、イスラム、支那、歐洲文化の影響を受けて各種形式を生じては居るが、其基礎的分子として船底は一本の丸木である。但しそれは海岸にある小形のカヌーに於ける如く、一本の樹幹を單に掘り深めただけのものもあるし、何回も濕したり加熱したりしつゝ横木を入れて壓し擴げたものを船底にしたのもある。

此人工的に壓し擴げた船は平つたいから、舷側として之れに板をつぎ足す。稀には編み板をも加へる。舟板を底舟に取り附け、又舟板相互に附け合せるには、籐で縫ふか又は木釘を用ふる。かくの如き方法で隨分大形の舟が造られる。例へばイラワディ川下流では長さ百歩に達する船すらある。

二　板張り船

其他のインドネシアの固有な原始的造船法と見らるゝものがケイ島にある。此島には普通の獨木舟の外に、板張り船がある。之れはフリデリチ Friederici 氏の注目せしが如くニューアイルランド島及びソロモン島に行はるる造舟法と關係あるもので古式造舟法の一である。此造舟法はインドネシアの他の地方のそれと異なり、造舟板は水に濕らせて火力で反らすのではない、初めから必要な形として木材から切り出すのである。其上にメラネシアに於けると同じく、先づ外板を組み立てて肋骨材を後に加へる。

是等の舟は初めは側面に張り出した浮木がない舟（オレムバイ Orembai と呼ぶ）であつたと思はれるが、今日では兩側に張り出し浮木のある舟（コラコラ Korakora と呼ぶ）が多いが、後者は新來マライ人の齎らせる文化交流の結果らしい。

第四九圖　セラム島のパタシワ族の舟

臺灣の南紅頭嶼にも上記ケイ島に見るが如きメラネシア式小舟があるが、更に一層原始的のものである。

張り出し浮木のある小舟は今日スマトラとジャワとでは殆ど無くなつた。ボルネオ島では全く見られない。然し其他のインドネシア諸島では此張り出し浮木ある舟が盛行して居る。

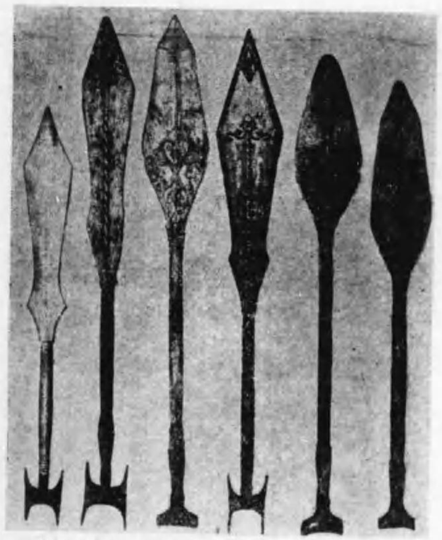
アンダマン島とニコバール島には片側にのみ張り出しある舟があるが、其他の島々では少數の例外ある外は兩側張り出し浮木ある舟が使用せられる。

グレーブネル Graebner 氏の注意したる如く、アンダマン及びニコバール島では此張り出し柱の横木に浮木の取り附けられる方法には他のインドネシアに見られない所があり。メラネシアに行はるゝ所と等しい。同氏は之れによりてメラネシア法は古式であると結論した。

二隻舟、すなはち横に二隻の舟を結び合はしたものはインドネシアに見られない。然し上部ラオス地方、殊にルアング・プラバング Luang Prabang 邊でメコン川を下る時に使用する。山越えの時には二隻舟の結合を解き放し、一隻づつ運搬する。

其他インドネシアの小舟で可なり特色あるのは船首の強く突出せる事である。之れは珊瑚礁に乘り上げる時に船を保護する裝置でもあるが、多くの場合には既に當初の目的を失つて、單なる裝飾と化して居る。

木皮製の船はマライ半島のチャクン族及びボルネオのダヤーク族中の少數が使用するのみである。



第五〇圖　中央セレベスのマタンナ湖にて使用せらるゝ橈

四　帆・橈・錨

帆は文化の進んだ種族では複雑な形式のものを使用するが、通常四角形で下方二箇所に帆綱止めのあるもの、若しくは三角帆を使用する。帆布としては今日尚木の葉を集めて板狀に竝べたものを使用したり、椰子纎維で編んだ布程度のものが多い。セレベス、モルッケン及び東部インドネシアでは竹柱の三檣船が少なくない。

古式の橈は短くして握りの端が絲卷き形となつたものである。長くして細い橈は後期に出來た。そして橈に彫刻を施されるに至つた。

錨は木に石を結び附けたものである。セレベスでは鹿角を錨に利用したものがある。

第十一章　音　樂　器　械

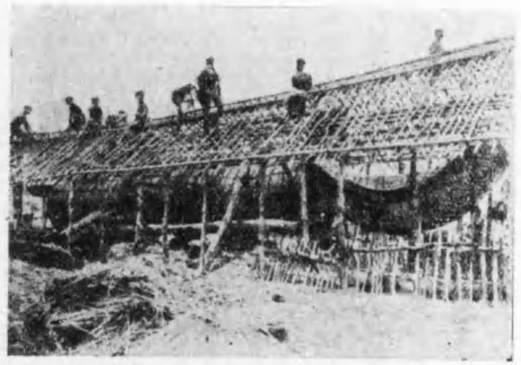
一　木板太鼓（木鼓）

大きな定型性の合圖太鼓（木板太鼓）をアオ族と其東部に隣接せるアッサムのナガ族及びビルマのワ族とが製作使用する。木太鼓は家屋の中に在る。

此太鼓は亘木の幹で造られ、木の臺に載せられて地上に横臥する。之れを覆ふに特別の屋根が造られて、大抵は青年會所の近傍に置かれて居る。此太鼓は戰爭の警報を傳へる外に祭禮にも使用せられる。アオ・ナガ族の太鼓の長さは二十歩或はそれ以上である。太鼓の一端は獸頭に象つた彫刻がある。そして之れは神聖なる器具で神靈の在ます所と信ぜられ、小兒及び婦女は之れに觸るゝを禁じてある（第五一圖參照）。西アフリカ及びメラネシ

アに於けると同様に此合圖太鼓は首狩と特別な關係がある。ワ族では新らしく獲た首は、其最後の置場に行く前に暫時の間、此太鼓の家に吊り下げられる。又アオ・ナガ族ではソロモン島に於けるが如く、太鼓の上に首が置かれる。

小形の木胴太鼓は大陸にも、又東南亞細亞諸島にも廣く使用される。之れはビルマ、ニアス（畑から野豚を追ひ出すために）、ボルネオ、セレベス、ジャワ、ロムボック（仕事のために、村人を呼び集めるために）、スムバワ島等で使用せられる。但し胴竹製の小太鼓も少なからず存在する。



第五一圖　巨大なる木製の合圖太鼓（中理修根屋）

竹或は木で造つて打ち叩いて音を發せしめる樂器は印度支那半島からインドネシアへかけて可なり特色あるものである。之れは多分高等文化民族から學んだもので、合奏樂器の一部から思ひ付いたものらしい。簡單なもので竹筒を地面に打ち當てて音響を發せしめ、或は木槌で打ち叩いて音響を發せしめる鳴り筒である。複雜なるものに至ては竹鐘にまで發達して、ジャワ人、ビルマ人、クメル人の立派なキシロフォンとなり、又ダヤーク、ブナン、トアラ、ニアス人の木製鳴盤となる。多くの場合三個の音色の異なつた樂器を組み合せて、音樂者は地上にあぐらをかいて樂器を鳴らす。

鳴噪木は諸所で玩具として使はれる。然しマライ半島では曾て農園に侵入する象を追ふ道具であつた。ボルネオのカヤン族では此者に多少宗教的意義があるらしい。即ち之れを畑の木に吊して靈の住所とする。

三　革張り太鼓

革張り太鼓は非常に廣く行はるゝが、未開化な原始的種族では之れは少ないか、又は全然之れを見ない（ニコバール、エンガノ及びナガ族の一部）。革の張り方は西部印度支那半島及び西部インドネシアでは主として革紐又は籐を用ふ。東部印度支那半島では木釘を使用するが、東部インドネシア（セレベス、モルッケン等）では楔を使用する。

革太鼓の形狀は雜多であるが、主要な形式は二種ある。第一種は木の幹を掘り拔いて圓筒形と成したるもので兩端に皮を張つたもので、多くは集會所或は若者の家に置かれて、宗教的祭禮の時に打ち鳴されるものである（カチン族、ルチェイ族、ダヤーク族の外、中央スマトラ、ルスン、セレベス、ウェタール等）。第二種はコップ狀のもので、その太い一端に革が張られて居る。之れはビルマ、シャン及びインドネシアの大部分（ニアス、ボルネオ、セレベス及び更に東部）。但しインドネシア東部では圓筒の中央部がくびれて砂時計狀を成せる太鼓が多い。

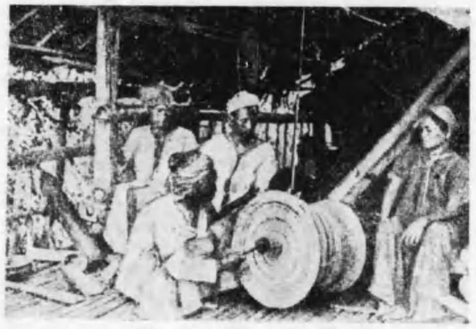
太鼓の胴は木製が多いが、時によれば土製である。すなはちアッサムのガロ族、マライ半島、又インドネシアの諸所に土製胴がある。

四　銅羅・銅鼓

文化史上、特に重要なのは銅羅と銅鼓とである。銅羅は眞鍮或は青銅から造られて居るが、自家製ではなく、高級文化の隣接種族（ビルマ人、マライ人、ジャワ人）から輸入せられ、又支那から輸入せられたものである。舞踊、祭式、靈祭、葬儀、戰鬪の警報等種々の場合に銅羅が鳴らされる。ベンガール、チベットの境から東部インドネシアに至るまで銅羅は通貨として使用せられ、又價格の單位ともなる。すなはち銅羅は嫁買にも使はれるし、贖罪にも使用せられる。富者は好んで資産の高を銅羅で云ひ表はし、酋長は多數の銅羅を所持しなければならない。此習慣は多分高文化民族の王族又は宮中の風習を看做つた結果らしい。例へば、曾てビルマ、タイ、シャンでは銅羅及び銅鼓は位階の貴さを表はしたもので、毎日の時刻と主人の出入は銅羅を打ち鳴らす事によつて報ぜられた。

銅鼓は支那、印度支那のみならず、インドネシアの東の端（ケイ島）にまで分布して、稀なる且つ神聖な器具として尊重せられた。

此銅鼓の由來及び意義に就ては諸學者によりて非常に多數の研究が發表せられたが、未だ遺憾なく問題が解決せられたりと云ふ所には到つて居らない。古く製作せられた銅鼓は其兩側平面の中心部には常に星の文様（十二支文様）があり、之れを廻つて人の乘れる舟、高床家屋、獸形、舞踊、或は戰鬪中の人形が描かれて居る。新らしい時代に造られた銅鼓ほど是等の像は一見了解し難い文様化して居る。銅鼓文様中には獸形が少なくないが、蛙が多い。象、蝸牛、時として騎獸人もあるが、打面と側面とに一定の配置の下に表はされて居る。



第二五圖　カレン族の銅鼓

此銅鼓の起原は支那古銅器、殊に秦銅にあつて、南支及び印度支那半島の東北部を經てインドネシアに渡來したものである。印度支那では少し以前までカレン州グウェダウング Ngwendaung のシャン族によりて製作せられた。そして此銅鼓製作技術は二百年前カムボヂャ人から教へられたと云ひ傳へる。銅鼓は北カレン族及び印度支那半島の中部種族では銅羅と同じ用を勤める。即ち宗教的の儀式及び戰時に鳴らされ、又單なる趣味としても叩かれるし、又時報にも打たれる事がある（第五二圖參照）。又ジャワでも近世銅鼓が製造せられてアロール島に輸出されたが、之れは胴部がやゝ强くくびれた砂時計様の品であつた。

五　吹奏器

吹奏器としては大陸にも西南諸島にも口及び鼻で吹く笛の類、竹ラッパの類がある。又時折パン・パイプ（ビルマのカレン族、北ルスンのチンギヤン族）、又吹き貝、貝笛（ブルネイのマライ人、セラムのアルフール人）がある。ガロ、ナガ、カレン、モイ諸族は水牛角の笛を有する。

興味のあるのはクキ・チン族、シャン及びラオスの諸種族、ダヤーク族の使用する口で吹くオルゴールである。之れは色々の長さの笛が一束に集められたものである。又之れと似た種類にラオ及び印度支那半島東北部諸種族の使用するオルゴールがあるが、之れはトンキン發見の古式銅鼓にも其形の描かれて居る樂器である。これ等オルゴールの形狀中には我國の笙と似た形式のものがあるのは注意を要する。

チモール島には木製の合圖笛があり、且つ一定の進んだ方法で笛を以てする合圖法が定まつておる。

木或は竹（稀に金屬製）で造つた口琴がある。廣く使はれるが、大陸、インドネシア及び臺灣では愛情の表現に愛人から往々使用される。

六　弦　器

弦器としては廣くインドネシア、マライ半島、ニコバールからカムボヂャに亙つて使用せらるゝ竹筒製の琴がある。此器とボルネオ、臺灣で處によりて使用せらるゝ彈弓とは此地域で芽生えた古式彈器らしい。其他琴の類には種々の形式のものがあるが、多くは之れ印度、アラビア、支那、歐羅巴の文化影響によりて成つたものらしい。尤も原樂器は屢〻改作せられて地方藝術が加味せられては居る。

第十二章　社會構成

一　氏族同族

印度支那半島の高文化でない民族の大多數とニアスの住民、スマトラ住民の大部分（バタク、ガヨ族等）、東部インドネシア人は血族外婚同族 exogame Clans und Sippen が社會構成の主幹であるが、ボルネオ、セレベス、フィリッピンでは之れを見ない。

ルスンのボントク・イゴロト族ではアト ato がある。之れは政治的及び宗教的單位として村内一定地域に住居する民家の一定群であるが、祖先とか結婚制限に何の關係もない。誰人も自由に轉宅して別のアトに入れる。之れは同族（クラン）組織の最終のものかも知れない。

處によりては著明に血族外結婚の同族が離れず、又混合せずに雜居せる地方がある。フェンナ及びブル島が之れである。それよりも多いのは數箇の同族に分れて居る村を見る事である。然し移轉だとか、文化の混入だとか、同族分裂によりて小族が成立するとか、養子等のために社會構成は屢〻可なり著しい混亂を來し、同族と所によ

りて崩壞しつゝある結婚階級の殘存との間の區別が出來難い事が少なくない。これ等の社會構成の單位は決して固定的でない。そして一型式の出現の外に移行型、混合型がある。尙同族、階級等の分割に平行する他の分類が行はれるのみならず、土俗上、言語上、或は政治上に之れと交錯する分類すら行はれる。

母權的結婚階級の存在は二階級制中での古式であり、且つ最も廣く行はれるものであるが、アッサムのガロ族に著明である。父權的結婚階級は二階級制の崩壞しつゝあるアンガミ族及びナガ族の一部に見る（但し古くは之れも母權制であつた）。その他アッサムには父權制の民族で結婚階級の遺殘せるものがある（例へばミキル族 Mikir）、又始めは四階級であつたが、今日では更に多數の階段（ズクス Zukus）に分れて居ること、スマトラのミナンガバウ人の如きものもあるが、四階級中の二組づつが聯結せる點に二階級制から生育せしことを思はしめるものがある。又バタク族にも此種の痕跡があるが、大體に於てガロ及びアンガミ族に於けるが如く、階級内に於て、或は階級と多少交錯しつゝ同族或は氏族が多數存在する。

例へばアンガミ・ナガ族では、近來迄は二種の血族外結婚階級（ケル Kellu と呼ぶ）があつた。然し實際的に必要なのは階級中の同族チノ Thino である。此チノは社會的及び宗教的、そして又單政治的單位でもある。村中で同族は防禦せられたる地域に住する。一村内の異なりたるチノ間の敵視は稀でない。チノが大きくなり過ぎると、小さな同族に分れる。

二　トーテミスムス

多くの種族は個々の氏族に於て多少ともトーテム性を帶びて居る。少なくともトーテミスムスの遺殘せることは昔時の氏族トーテミスムスの存在を物語るものであるが、之れは高文化階級の民族にも殘存する。

特に東インドネシア（アンボン、セラム、ブル島）にトーテミスムスの强いのは人の知る所である。ハルマヘラ、ブル島にも之れは殘存する。西に於てはバタク族の一部、スマトラのガヨ族、ニアス島の住民にも其例がある。それよりも高度なのは大陸の諸族でカシ族及びアッサムの諸族（ラロ、ラルング、カチャリ族）とナガ族での或る種（ロタ、アオ、セマ族等）又タイではクメル族、マライ半島の海岸住民である。

三　母權制

注意すべきことは東南亞細亞に於ては母權性社會型が甚だしく廣がり、然も之れが純然たる形態なる事に於て世界に類例が乏しい。

純粹なる母權はブラマプートラとスルマとの間の地方のガロ、カシ、シンテング等の諸族に存在する。尙印度支那半島の東部に於けるチャム、ラデ、ジャライ、トラウ及びモイ族の或るもの、臺灣の或る種族、中部スマトラの西部高地（パダング高地）に於けるミナングカバウ・マライ人にも存在する。但し此等地方の緣部では父權、

母權、同權制度の混入によりて混合型を形成する。

斯くの如き狀態はアッサムに於てはガロ、カシ族に近接せるボド族の或る者（ラバ、ヂマサ、ラルング）に見られる。スマトラに於ては母權はミナングカバウ・マライ人の土俗的及び政治的勢力によつて西部山地住民の間に擴がれるのみならず、東部にも波及して居る。のみならず此風習をミナングバウ・マライ人はマラッカ海峽を越えてマライ半島西岸のヌグリ・スムビラン州にも傳へて居る。

純母權地域周圍の女權痕跡は其形として更に上記の地域から遠地に及んで居る。例へば東ベンガールのチプラ Tipura だとか、ビルマのシェ Ngché（チン族の最南の族）及びブェ・カレン族 Bué-Karen だとか、ボルネオのダヤーク族の一部（例へばサラワクのカラビト族 Kalabit、西部のマニウケ族 Manyuké、南部のオロ・ナジュ族 Olo-Ngadschu）中央セレベス、チモールの東部等である。

東南亞細亞に於ける母權社會形式に就て少しく述べる事とするが、ガロ族には二階級の結婚階級がある（地方によりては近世三階級となつた）。各階級には幾多の氏族がある。そして氏族には多少トーテミスムスが殘つて居る。子供は母の階級、母の氏族に屬す。最重なる母權は嚴重な相續を生ずる。妻と娘とに相續權があり、父が死んだ場合には第一は最幼年の娘と其夫である。夫は其妻及び妻の兩親と一所に住まなければならない。夫が何も有せざる時には妻の財產で養はれる。酋長權も女系による。卽ち娘の夫に相續せられる。妻が若し娘なくして死するならば、其夫は妻と同族の少女を娶る。そして第一の妻の財產を繼承する。結婚の申込は男から行はず、女から行ふ。つまり父權民族の行ふ所と大抵の習慣は逆である。之れはガロ族に於て最も甚だしいが、他種族では其れほど甚だしくない。

四　父　權　制

極端なる父權が大陸に於て上記以外の山地住民、北スマトラのバタク及びガヨ族、南スマトラの一部、ニアス島、東部インドネシアの大部分に存在する。子は父の家族同族に屬し（下記の例外はあるが）、男系の相續をする。大抵息子或は男系の親類に相續權があつて娘の相續權は極度に縮少する。

（イ）買婚が多く行はれる。嫁の價を拂つて妻は夫の所有に歸するのである。同時に妻は家族のもの、同族のものである。そして夫の死後妻は若干の權利を得る。

（ロ）奉仕婚も可なり廣く行はれる。すなはち男が妻を買ふだけの金が無い場合には、嫁の兩親の許に住して働くのである。此狀態は時として習慣上定められた何年かである。此奉仕婚は大陸の山地住民に特に多い。然し大陸よりもインドネシアに多い。奉仕婚の形式は、奉仕は時間的には定まつて居らず、借金を返す樣に正確な性質のものでない。此場合には夫が大抵價を拂つたと看做される時、又は代價として妻の代りに一兒を殘す時である。

（ハ）奉仕婚と似て居るのは養子婚である。此場合に夫は自分の家族を棄てて妻の家族に入る。そして妻の家

族と一緒に住み、生れた子供は妻の兩親の家族、氏族に屬する。之れは一見母權結婚に似ては居るが、其れと同一視出來ない。何となれば之れは母權組織の遺殘と見る事が出來ないからである。

東南亜細亜に於て養子婚の擴がつて居る形式は、息子の無い時に長女に養子する事である。それは娘の兩親の家事取扱に必要なる手傳ひを得るためと後嗣者を得て家族を續けるためと、祖先靈を祭るためである。勿論一代の間は父權制は無くなるが、然し此養子制は父權組織中に行はるゝのである。

又息子のあるのに娘に養子する事があるし、數人の娘に養子する事もある（スマトラ、モルッケン等）。其場合には婿が嫁を買ふ金を出す見込の無い時か、又は家族員數の增加によつて、家族又は同族の經濟的又は政治的勢力を減少せざるためである。

（二）　掠奪婚は女子の兩親が聽許せざる時に生ずる。或は規則として承認し得ざる場合であるが、多くは物品或は證跡を殘して後日贖罪する。處によりては（例へばバリ及びロムボック島では）、之れは非常に擴がつて居つて、此形式が結婚の通常となつて居る所もある。

相續權は年長者に多いが、年少者にある事もある。後者は大陸に盛んでアンガミ・ナガ族、セマ・ナガ族、殊にカチン族では父の家のみならず、酋長の位までも最年少の子息に相續せられる。時として最年長の息と最年少の息とが遺產相續に際して特別の權利がある。アッサムとビルマの山間住民、スマトラのバタク族では酋長の位は最年長の息子か、又は最年少の息子が嗣ぐ事となつて居る。

五　父母同權制

父權と母權との外に同權社會構成が廣く行はれて居る。それには父と母との親戚が同等に取扱はれて、息子も娘も後嗣者たり得可く、夫と妻との財產權も結婚權も同一である。

此社會形式はフィリッピンの山地住民、殊にルスンの北部民族に多く行はれる。之れはボルネオ、セレベスの各處、カレン及びモイ族の一部、開化民族の一部（ビルマ人、タイ人、マライ人、ジャワ人、ブギ人）に見る。然し幾分父權的、又は母權的色彩を帶びるのが普通である。

六　夫　妻

一夫一妻制は經濟的理由から一夫多妻制よりも廣く行はれるのが普通である。但し酋長或は富者は之れが許される外に兄の寡婦を弟が娶る風習（逆緣婚 Levirätsehe）の結果としても、之れが現はれることがある。

一夫多妻の强く行はれる地方はニアス、バタク、ミシミ族等である。それだからと云つて母權が行はれないと云ふ譯では無い。例へばガロ、カシ、チャン族は一夫多妻にして且つ母權制である。又一夫一妻の嚴重に行はる る所もある。アンガミ族、ナガ族、臺灣の一部、ルスン島のイゴロト、イフガオ族等、ダヤーク族の一部等がそれであるが、マライ・モハメッド教の感化の及んだ地方では一夫多妻となりつゝある（附錄オランダ・ラウト參照）。

一妻多夫制は北部アッサムのダフラに於て行はれる。又少し前迄はセラム島西部のマカハラでも行はれて居つた。

七　婚約と結婚

婚約と結婚には大抵定まつた型式があるが、時によれば非常に面倒な法式が行はれて、之れが數日、或は數週に亙つて繼續する。

婚約に際して儀式的に贈物したり、之れを形式的に辭退したり、又之れを受納める場合の儀禮等は土地の異なるによりて種々である。

結婚儀式として一番多いのは花嫁花婿が一緒に食事するのだ（ビルマ人、シャン、メイテイ、アンガミ、タウングツ Taungdu、バタク、ミナンガバウ・マライ、ダヤーク、トラヂヤの諸族の外にニアス、ジャワ、バリ、ミンダナオ、ケイ等の諸島の各處）。時としては婿と嫁とが米酒若くは椰子酒を一緒に飲むことがある（レチ諸島、ビルマのカチン族等）。或は檳榔實を一緒に嚙む（ダヤークの一部及びブル島、サウ島）。それと共に兩人が手をつなぎ合ふ事もあるし、兩名の手關節部を一時紐で縛り合すこともあるし、兩名の腰の部分を一枚の布で覆ふこともある。

結婚前の性交は自由な所が多い、又多少の制限のある所もある。姙娠して始めて結婚する所が少なくない（例へばイゴロト族）。或は子が生れて後に始めて結婚する處（例へばメンタワイ島）もある。然し又處女を非常に尊重する民族もある。そして之れを犯す場合には厳罰する。例へばニアス島では古く死刑に處した。

八　長幼序次

長幼の階級及び之れに關聯せる諸法式は著明に行はるゝ場所は多くないが、多少共に之れを考慮せる場所は多い。又處によつては全然此區別なき場所もある。

幼年から青年にかけて五階級に分つ所がある（ナガ族中の北部に在る者、ングオン族 Ngsm、アナン北部のムオング族、Muông 等）。之れは長幼の序に從つた五區分で、序列に應じて服從が要求せられる。此類の長幼序列は印度支那には可なり厳重である。

九　成年表徴

男となつた表徴、すなはち適齢表徴として拔齒、割禮、入れ墨が或る場所では使用せられる。その他の法式が適齢法式として行はれることがある。例へば（一）ビルマのパラウングでは青年は重なる祭禮に一人踊りが出來ない間は女と關係出來ない。（二）マニプールのタングール・ナガ族では陰莖輪の嵌入が出來ない間は男でないし、ダヤーク族では龜頭に穴を開ける迄は男でない。（三）多くの種族では首狩で首一個を獲る迄は男にならな

い。之れはナガ、ルシャイ、ダヤークの一部及びセラム島で著明であつた。（四）ボルネオのカヤン族では或る祭禮に出る迄は男として戰鬪に參加出來ない。此祭禮とは新らしく首を獲た者がある場合に行はれるもので、新らしい首を劍で打つのである。

其他長幼法式の類としてカヤン族は三歳の兒に初めて命名するし、ダヤーク族中のボルネオ西部に在るものは少女の耳朶に孔を穿ち少年に割禮を施して、少年少女の頭髪を初めて切つて成年とする。そして村の成年式は一年一回盛大に行ひ數日間繼續するが、男と少年とは祭に假面をかぶつて現はれる。

其他女子の成年になつた者を暗室中に閉ぢ込める所がある（ボルネオ島）。此風習はアンナムの回教徒チャン族及びセラム島のアルフール人にもあるが、マライ聯邦の王族にも之れを行ふものがある。

十「男の家」

「男の家」は東南亞細亞に於て廣く行はれて居る所である。初めの形式は青年の住家及び寢場所であつたのであらうが、警備所、外來者應接所、集會所、決議所となつた。つまり村の社交的、政治的、宗教的中心となつたのである。數個の「男の家」が一村に存在する場合には同族の住地に分立せる事が多い。「男の家」の中には多くの場合首狩で獲た首、神聖視せらるゝ戰爭用及び祭禮用太鼓、其他の神聖なる物の類が置かれてある。

此「男の家」は普通の住宅とは大さ及び形式に於て異れるを常とする。すなはち裝飾が多く、神話的或は宗教幻術的意味の彫刻が多い。

定型性の「男の家」は東南亞細亞大陸に少なからず存在する。ガロ、ラルング、ミキル、アボール族の外にナガ族、クキ・チン族の大部分の外に、カレン、バナール、ヂャライ及び其他のモイ族の一部である。

ボルネオのダヤークの長い家に於ては、廊下が「男の家」を兼ねて青年の寢所となること上述の如くである。然し山地、殊に西部ボルネオのダヤークでは「男の家」は別の建物となつて居つて、圓形或は八角形の敷坪ある家が建つ。其他「男の家」の定型的なるものは臺灣、ルスン島のイゴロト、スマトラのバタクに見る。

然しインドネシアには青年の住屋寢屋としての古式「男の家」は少なく、集會所、相談所、外客接待所を兼ねた形式のものが多い（スマトラ、ニアス、セレベス、セラム、ケイ島等）。又靈屋を兼ねたものもある（セレベス、セラム、小スンダ島等）。

「男の家」に女の入るのは禁制である（凡ての場合ではない、女の入るのが許されて居る所も少なくない）。又祭禮の時だけは女の入るのが許される所もある。種族によりては「女の家」を建てて居る所がある。適齡期以後の女の寢る所、女の社交所がある。アオ、其他のナガ族で見る。又カチン族及びイゴロト族の一部にも之れを見る。

其他大きくなつた若者及び男だけが參與して婦女を一切禁止する作業がある。戰爭及び首狩を行ふ時の法式が其れである。其他青年全部が宗教的及び祭禮的機會に一致して一時生活することがある。例へばマニプールのナガ族は毎年死者祭に踊を行ひ、且つ角力するのであるが、此場合の如きが其れである。又アッサムのミキール族

が葬儀を行ふ時の如きがそれだ。尤もミキール族には共同作業を行ふために、村に平常から青年結社が出來て居つて各自の選擧した指導者（處罰權を持つ）がある。

鄉土結社はセラム島の西部に住せるパタシワ・イタム族 Pakasiwa hitam のカキハン Kakihan と呼ぶものに著るしい。此種族の男子は全部春機發動期、或はそれより早く結社に入れられる。其場合に童子は一定時期の間說敎者の看視の下に置かれ、森の中のカキハンの家に入れられて先づ毛を剃られて結社の文樣ある入れ墨の手術を受ける。說敎者はカキハンの家で竹筒を口に當てて靈の聲を眞似る。婦女の近づくのは嚴禁である。そして人は童子の家に行つて靈が童子を殺したと告げ、其證據として豚の血の附いた槍先を示す。數日後に又說敎者の請により童子は生を再び復したと報告する。兩親の家に歸つてからの童子は再生した者として、言葉すら忘れたものとして總て新らしく習ひ始めなければならない。

此事實は古い文化の遺殘らしい。すなはち成年法式、鄉土結合等の現はれであるが、メラネシアに之れと似た行事があるのは注意しなければならない。又カキハンの成立は古くテルナート人、チドール人がパタシワ、パタリマに侵入攻擊したのと關聯し（之れに就ては別篇オラング・ラウト中に述べた）、防禦的の意味で、强い結社を成立するに至つたものであらう。殊に其後も和蘭の勢力の侵入に對抗して强固になつたものらしい。

十一　地位・階級

地位階級は可なり廣き範圍に亙つて存在する。酋長の家族及び親族は大抵上層である。インドネシアの一部、東南大陸の極く少部分では此外に貴族がある所がある。其下は自由民又は平民で、其數が最も多い。奴隷にも各種あるが、種々の種類の奴隷がある地方がある（負債のための奴隷、戰爭の捕虜、奴隷の宣告を受けた受刑者）。

第五三圖　アンガミ・ナガ族の家

屋根に角形突き出しあり，入口に刻せる獸頭（ガヤール）の彫刻は富者のしるしなり。

インドネシアでは地位の隔絕は往々結婚の絕對禁止となる。ダヤークの或る族では上中層間の結婚は禁止せられて居るし、セレス及び東インドネシアでも强く禁ぜられ、キッサールの如きは死罰がある。

然し社會的階級は屢〻經濟事情と大關係あるもので、貴族階級の者は富者と云はれる事がある。又ボントク・イゴロトの如きは酋長は無いのであるが、三層すなはち富者、中段階級、貧者に分つてデモクラシー政治を行ふ。

生れながらにして承け繼げる階級がある外に個人が獲得し得て、之れを相續せしめ得ざる位階がある。之れには戰爭に於ける卓越せる勳功、首狩の功名等である。アッサム及び西ビルマの山地民族特にナガ族及びクキ・シン族に於ては費用の要る事を免除（默の犧牲、村の入費等）したり、種々の禁制ある祭式に際して個人の解除を行つたり、特別な徽章を携

へる權利を與へたり、家の軒に突起を造らしたり（第五三圖參照）、巨石を以て記念碑を建てる。

十二　酋長組織

大抵の種族には相續せらるゝ酋長の地位があるが、其法律的及び實行的權限は種族の異なるによりて著明の差がある。

或る種族では酋長は全然無いか又あつたとしても其權限は極めて微少である。ボントク・イゴロト、アンガミ、ロタ、アオ及びナガ族の一二がそれである。此等種族では長老が政治を行ひ、又實行に當る。そして外來特に歐洲の影響もあるが、選擧せられたる指導者を持てる事が多い。

印度文化の影響を受けたりと思はるゝものに司祭者を兼ねる酋長がある。その例としてシンガ・マンガラジャ Singa Mangarudscha がある。これはサンスクリッドで獅子又は大王の意味があつて、スマトラのトバ湖畔に於けるバタク族の酋長であるが、其幻術の力によりて自己の狹い領土内のみならず、領土外の廣大な地域にまで政治的に大勢力があつた。然し最後のシンガ・マンガラジャは、一九〇七年に和蘭人に對する戰爭で戰死した。

更に又印度支那のダライに「火及び水の王」と云はるゝ二人の司祭酋長がある。政治的勢力は大きく無いが、靈界に大きな交渉がある。そして近年迄自然の死は許されなくなつた。と云ふ譯は病氣等で死に近づくと必ず槍で突き殺されたのだ。此地位は必らず同氏族で繼承せられ、然も母權的で、同族中から選擧せられる。此司祭酋長の權勢は昔は廣大であつたので、十九世紀の中頃迄はカムボジャ王は品物を贈つた。シンガ・マンガラジャと云ふ名が示すが如く此司祭酋長の制は異種族文化の影響によりて生じたものだが、ジャライ地方の一般住民が土葬にせらるゝに反して、此酋長の遺骸は火葬にせられる。そして又此司祭酋長の由來には古く榮えたるミナンガバウ或はアチェー族との交渉があり、又古代のチャムパ國と關係があるかも知れない。自然死を遂げしめざらしむる事も古代宗教史と關係あることらしい（Frazer 氏著 The Golden Bough 參照）。

地方によりては強大なる酋長權時代が出現して廣い地域に亙つて、之れが行はれたる事が歴史的に證明せられ今も尙相當の勢力があるが（クキ・チン及びモイ族）。一部では（アンガミ・ナガ族）既に早く之れが凋落した。カチン族の如き十九世紀に革命が起つて酋長を逐ひ出したのであつたが、間も無く一部は右に似た狀態になつた。

酋長權の强い場合には物質的及び精神的に全般を通じて全權を持つ。時として酋長は理論的に全土地の所有者で（チン及びカチン族）、配下は酋長の家を建築する場合、若しくは酋長の野仕事に奉仕しなければならない（カチン、セマ・ナガ、カヤン、ケニヤ、バタク諸族）、或る場合には狩の獲物の一部を獻ずる。酋長は又特別の文樣ある衣服を着たり、特殊の裝身具を着けたり、其住家に特別な記號或は特殊彫刻を施す事もある。戰爭の時の指揮權、政治上の諸權力がある計りではなく、酋長には宗教上の職務がある。それのみでなく酋長にだけに限つたタブー樣の禁制が少なからず存在する。屢〻酋長は廣大なる土地の所有者であり、且つ多數の動產と奴隷とを所有する。同時に酋長には一夫多妻が行はれるが、之れは隣接王侯の所業を見習つたためでもある。

時としては酋長權が法的にも實行的にも縮少せらるゝ事がある。例へばカチン族では何人かの相談役が居つて、不滿な酋長であると一群の臣下は相伴つて新酋長を選んで新聚落に移る事がある。チン族及びダヤーク族でも同樣の事實がある。酋長の外に副酋長、同族長がある。其他時として長老會があり、又名望家の相談家があつて大きな役割をなす。

十三　政治單位

政治單位は大抵小さい。例へばボントク・イゴロトではアトは一定の地域に住居して其支配は長老の集會にある。對外的に一村のアトは共同に作業し、共同結合の結果を生ずる。

アンガミ及びナガ族では同族は村落内で自己の住居地を有し、政治的に不和等の場合には一個の單位として作用する。大きな戰爭の場合には村が一と塊りとなつて共同する。一村以上の大きさとなると政治的結合は屢〻强固でない。之れが起つた原因はカチン族、クキ・チン族及びモイ族が强大なる政治的勢力に壓せられて戰爭によりての占領の憂き目を見たからであつた。然し村と村との結合は暫時の間だけで長續きはしない。之れより强固な數箇村の結合は西部及び中央部スマトラに見る。此村落結合をコタ Kotas と呼ぶが、數箇村宛結合した政治單位である。

コタ或は其類似組織の成立を考へて見ると、戰爭による數箇村の占領によりて、一首長の下に統轄せらるゝ事あるは當然だが、平和にして然も之を生じ得るのだ。すなはち或る村落から分離して新聚落を生じ、時日が經過するに從つて、新村との政治的結合が弛みを見せては居るが、然も尙一定度の親密さを示して居るのである。之れ恰も古代のギリシア植民地と母市との關係に似て居る。一所になつて居つた事と共同由來の感覺とは戰時に政治的結合を强固にする、特に强力なる酋長の一族が新村へ分派せられて居た場合に然りである。斯くの如くにして强大なる場合には東北ナガ族のペアール Peal 集團の如きは四十六村の結合である。口碑の傳ふる所によれば酋長の家系の如きも何代か以前に迄遡ることが出來るし、新村から舊村へと毎年進物があることによりても一定度までは此事實を追跡出來る。同樣な狀態を印度支那半島の他部及びインドネシアにも往々見る事が出來るのであるが、此場合には此一團の村落群にのみ共通な特殊な文化的表徵を伴つて居ることが多いので、研究上興味が深い。

然し一種族が斯くの如き政治的一個の結合として存在するのは非常に稀なる事である。一種族内に或は血緣上の不和或は戰爭があつても、言語上又は文化上の類似が多いので、相互に共存感は自然に存在して居るので、之れは平常色々の形式で表示せられる。例へば社會的關係としては同種族内結婚として、或は別に宗教的一單位を政治以上に生ずることによりて（アオ族及びナガ族の如き）、或は政治的反省（ボルネオのカヤン族の如きは政治的及び地形的に分裂して居るが、一種族内では戰爭しない）等、種々の形式に於て種族内の和親は保たれて居るのである。

十四　兩黨の存立

東部インドネシアに存在する政治的二黨は今日は寧ろエスノグラフィクのものとして存在して居るのだが、注意すべきものだ。それはセラム島に於てパタシワ Patasiwa 及びパタリマ Patalima と呼ばるゝもので、アル島ではウリシワ Ulisiwa 及びウリリマ Ulilima と呼ばれ、又ウルシワ Ursiwa 及びウルリマ Urlima と名附けらるゝものである。實の所が上記の名よりも「九人衆」或は「五人衆」と云ふ方が世間體には能く通ずる名だ。此名は昔彼等仲間がお互ひに附けた神聖な名だ。此兩黨の成立は十五―十六世紀にサルタンを主とせるチドール人とテルナト人とが久しきに亙つて相戰つた時に生じたのであつた。パタシワ(ウリシワ)はチドール側に屬した人人の結合で、パタリマ(ウリリマ)はタルナート側の組合であつた。然し數の記號が此組合の起原と如何なる關係あるものやら能くは分らない。今日では此兩組合は西部及び中部セラム島に存在し、ケイ島及びアル島に及ぶ。昔にはアンボン、ウリサウエル及びバンダ島にも及んで居つた。そして西部セラム島ではパタシワに屬せる人々は上記カキハン組合で固く結合し、一定の酋長、司會者及び位階所有者の會議によりて政治的に固く結合して居る。

第十三章　交易・通貨・了解手段

遠地貿易に於て市場販賣は餘り擴がつては居らないが、諸處、例へばカシ族、バタク族、中央セレベス等に見られる。然し之れは異種族高文化の影響だと思考せられる。

一　通貨・價格單位

諸地方には貨幣の類及び評價單位がある。主として大陸(インドネシアには少ない)では貨幣として銅羅がある。贖罪とか嫁を買ふ代價に使用せられる。印度支那中部及び西部の種族、殊にカレン族では銅鼓を以て之れを行ふ。

印度支那半島で牛を飼つてゐる種族では牛を以て單位とする。又インドネシアでも牛を用ふることがある(ケイ島、ボルネオのダヤーク)。青銅製先とめ砲(ボルネオ島)、釉ある花瓶又は陶製壺(支那製品が多いが、フィリッピンとボルネオ)、支那製陶製皿(ミンダナオ、モルッケン、セラム島)、象牙(フローレス、チモール・ラウト、ケイ島)の價格單位がある。

貝貨はアッサムのナガ族の一部に各種形式のものがある。インドネシアでは通貨としての貝貨は多くない。子安貝の貨幣は印度支那の諸種族(ビルマ、タイ、ラオの外、フィリッピンの一部)に多く見られ、近時迄通用して居つた。

其他通貨として鐵鋤（アンガミ・ナガ族）、小形の鐵棒（モイ族）、鐵針金、鐵條を一本として又束として（ナガ族）、家庭用小刀（曾てメンタワイ島）、眞鍮製腕輪（トクラウィ及びセレベス）、煙草束及び貯藏せられたる豚肉（ニアス島）、金粉（ボルネオ島）、硝子製及び半寶石製首飾（ダヤーク及びモイ族）、稻穗（イゴロト族）等がある。又北アッサムのミシミ族では屠殺牛の頭蓋骨を用ゐ、スマトラのバタク族では一定量の米と鹽、ニコバール島等では一二個のココ椰子實を價格の單位とする。

二　通信方法

通信或は了解手段としては記憶を助成せしむるもの、又は文字である。前者としては記徵たる可き物品を渡す事で、ナガ、カチン、バタク、ダヤーク族等、極めて廣く行はれる。すなはち宣戰布告だとか、援兵の要求、時として愛情表徵の類である。アンガミでは一片の半燒け木片、小銃彈一個、西班牙胡椒一束が宣戰布告であるし、槍一本、布一枚、鷄一羽、卵一二個が救助を乞ひ、懇親を表はす。

三　結繩

結繩、すなはち繩に結び目を附するのは印度支那、ボルネオ等では何日後に會はうと云ふ約束であるし、何日後に軍勢を送る約束である。然し其外に局地的に種々の理由、了解が存在して居る。其他尙凹痕板がある。個人標識、通行、借金證ともなるが、其の最も發達した組織はニコバール島にあつて取引と計算とに使用せられる。

四　了解手段としての文字

印度文化渡來の後期になつて其系統の文字が渡來した。ビルマの文字を除外して、西太平洋諸島の二箇所に印度系文字が根を下ろした。一はスマトラのバタクであり、之れはブギー、マカッサルにも及んだ。他の一はフィリッピンであるが、フィリッピンではマンギアン Mangyan、タグバヌア族 Tagbanua 以外では滅びてしまつた。

第十四章　宗　教

私は從來自然科學を研究し來つた立場から前章の社會機構だとか、本章の宗教だとか云ふ方面は一向得意とする所でないので、之れを紹介するのは別に其人ありとは思ふが、順序としても大略記し置く必要がある。ところが實の所インドネシアの中等度文化段階の民族の宗教の發育程度には種族によりて可なりの差等があるし、同一種族でも地域によりて差等があるので、之れを總括的に述べるのは中々困難である。

一　神

東南亞細亞の宗教でアニミスムスは大切な一要素である。といふ譯は殆ど全部の民族は、アニミスムスと同時に神を信ずる――それは場合によりては高級な神である種族もあるし、惡魔より僅かに上位の天神或は創造者であることもある。多神教の場合の常例として、此神は惡魔と同一列にある場合もあるし、又低級なる自然靈又は祖先靈と同一の種類に加へられるものもある。

兎に角アニスミムス、祖先禮拜、自然靈又は妖術のために犧牲を捧げると云ふ風な仕事は個人の日常生活には中々重大なる役割を務めて居る。それと云ふのも高級神の崇拜は司祭者の手で行はれたからだ。時として最上級の神は直接ではなく、下級神の媒介で喚ばれる（ニアス及びボルネオ）。それのみで無い、最上級の神は犧牲奉仕やら、祭神行事では呼ぶ事が不可能だと思はれて居る事も多いし、最上級の神を圖又は彫刻で示すのは不可能だと考へられる事が多い。

斯くの如き制限はあるが、東南亞細亞の民族には神に對する信仰は甚だ旺盛なもので、祖先拜禮、惡魔禮拜と竝び行はれる。實際最上の天神を禮拜する法を知らざる民族すらも、道德的禁制を破る場合には神から看視せられ、又重大なる危機（出產、大危難、誓約等）には此神を呼ぶ。尤もニコバール島民の如きはアニミスムスと死靈禮拜との二つが非常に强烈であつて、神に關して唯神話的に之れを傳ふるのみで、宗教的意味は無くなつてしまつた者もある。

此多種多樣なる東南亞細亞諸民族の神々と神話に就て解說を下す事は容易で無い。インドネシアの神に就ては從來諸學者（Wilken, Kruyt, Pley, Schmidt, Nieuwenhuis氏等）のまとまつた研究があるが、之れを整理して系統づけるのは大作業である。之れに反して印度支那、アッサム方面の此種研究は多くはない。

東南亞細亞でも俗人は神の觀念に就て餘りはつきりした事は知つて居らない。神の世界に就て詳細なる智識を有せるは司祭者であるが、司祭者が出來て居る所では各神の輪郭、神話が可なりはつきりした形に現はされて居る。そして靈界、神界の樣子が既に多少哲學的形式を帶びてゐるし、又敍事的及び禮拜的の詩もある。

此種の詩での大作はイラワデー川に沿つたビルマ地方に居るカチン種の一派カオリ族 Kaori のそれであるが、世界、人間の創成から初めて種族と酋長との由來、種族の漂浪に及ぶ。そして之れを最高司祭者たるヂャイラス Dschairas が特別の祭典に際して唱誦すること四日四夜に及ぶ（Gilhodes 氏報告）。其場合に司祭者のみならず、俗人も亦合唱する。其他尙天地を飛行する詩は後述の如く、疾病治療と死者祭禮に之れを行ふ。

二　自然靈・死者靈

高級の神の外に到る處に自然靈がある。之れは日々の生活には神よりも大きな役をする。何となれば之れは惡靈なりと信ぜらるゝが故に、靈に贖罪する必要があるし、又靈の作用で疾病、狂氣に罹るから、犧牲によりて免かれやうとするからである。自然靈は山、岩、川、瀑布、森等に住む。最も恐ろしいのは木に住むもので、殊に巨木に住む。

インドネシアで巨木を伐り倒す時に注意しなければならない理由は此處にある。

自然靈よりも遙かに多數であり、且つ恐れられるのは死者靈である。之れには極く害の少ないものから、極めて恐ろしいものに至る迄各種あるが、不幸な死に方、自然死ならざる者、正しく葬られざりし者の死靈は最も恐れられて居る。殊に産後に死んだ女の靈は恐ろしきものとせられて居る。すなはち後妻に對する嫉妬であつて、女を姙娠中に殺したり、男の前途の運命を害したり、墓に引つぱり込むと云ふ風に考へられる。

三　祖先禮拜

死者靈に對する禮拜は行はない所もあるが、或る意味に於て祖先禮拜に化して居る。のみならずアッサムのカシ族、ニアス島、ボルネオの處々、フィリッピン、東インドネシア等では多くの祖先像を造つて（但しカシでは像は作らない）盛んに禮拜する。

例へばニアスに於ては男であらうとも、また女であらうとも、男兒を殘して死んだ人毎に必ず一個の木彫像を造り、司祭者は之れに死者の靈を移す。祖先像は東インドネシアに廣く存在してケイ、アル諸島から南東、南西及び東方諸島、小スンダ列島に盛んである。

特に此地方では村の創設者の靈をも造る。之れは通常蹲居姿勢で、杭の頂上に居る形である。又レチ島では家毎に其家を建てた人の木彫像を祭り、毎日食を供へる。其他東インドネシアに盛行する祖先像は立つた姿のもあるし、蹲居の姿のものもあるし、趺坐したのもある。最後の形式は佛教の輸入による佛像の形態の感化を受けたものであらう。

四　禮式・儀禮

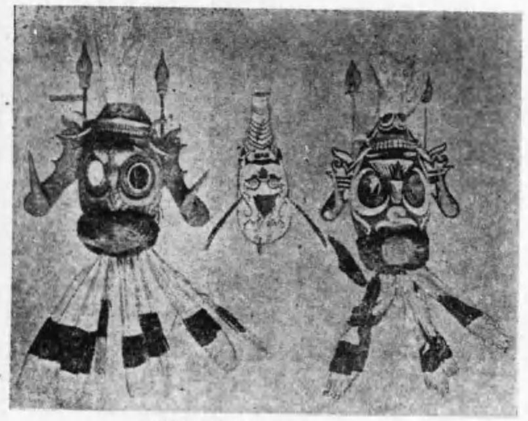
禮拜の型式は非常に多い。然し其中でも公私ともに多いのは犧牲である。――それは植物性の食物、飲料、獸類そして又人間の事もある。其れに伴つた犧牲場、神聖な森、祭壇、犧牲供御臺、堂、靈屋等の詳細は到底茲には述べ切れないから、之れを略述する。

何處にも毎年行ふ可き祭事曆がある。之れは毎年の農作曆と密接な關係のあるものだが、日が正確に決まつて居る譯では無く、どちらかと云へば祭を行ふ可き順位が定まつて居る程度である。

西太平洋諸島は熱帶であるから冬がない。從つて農作物は何時なりとも植ゑて差支へ無ささうに見えるが、實の所多少の植付月に關する序次がある。

毎年擧行せらるゝ宗教的儀式、犧牲供奉が農作と關係する理由は、農作物の生長、結實が神及び靈の作用によるし、又幻術を行ふことによりて好影響ありと信ぜられるからである。森の中の畑、播種、發育の時機、結實、收穫等は無數の宗教的、妖術的處置と關聯し、又犧牲、祭禮、タブー（禁制）と關係する。

此外に處によりて（カチン族、北ルスンの山地民族等）は毎年ではなく特に豐作の年だけ、酋長或は地方主權



第五四圖　假面各種

はメンダラム・カヤンの豚假面（中央ボルネオ）左と右はマハカム・カヤンの羽毛を着けた假面　中央

から全員が神に向つての感謝犠牲祭があつて豐作を更に繼續するために大衆が祭禮に參與せしめられる。其他の公的祭禮として可なり不規則に行はるゝものは死者の祭禮（後述）、惡魔拂ひの祭（ガロ族、シンタング、カチャリ族）、疾病除けの祭（ナガ族）である。

重要なる宗教的祭禮には犠牲供奉の外に踊がある。そして豐年祭に屢〻結合するものは性的所業である。例へばナガ族、クキ・チン族及びハルマヘラ島に行はるゝ如き男女合同の踊、又マニプールに於けるタングール・ナガ族、タイ族の北部に於けるもの、西ボルネオのダヤーク族に於けるが如き、結婚の有無を顧慮せざる性的混合がそれである。

假面踊は印度支那半島には少なく、西太平洋諸島に多い。半島ではガロ族に死骸踊がある。又カチャリ族に惡魔拂ひの祭があるし、ラオに新年祭があるし、カチャリに死者祭があるが、いづれも假面祭である。

ボルネオでは假面祭が特に多い。此島で死者祭の外に種播きと收穫とに行ふ祭の如きがそれである。此外ジャワ、スマトラにも假面祭は少なくないし、マカッサール、ブギー、セレベス、東インドネシア（ハルマヘラ、チドール、フローレス、レチ、ケイ島等）にも多い。

殆ど到る處に男女の司祭者が居るが、其勢力と行動の範圍とは種族によりて一定しない。

いづれにしても司祭者は知識の所有者である。彼等は神と祖先に就て知つて居り、萬物の創成、世界の創造を知つて居る。彼等は正しい法式を知り、神に捧ぐ可き犠牲を知り、又重要な公的祭禮の指導者である。そして死者の葬禮では死の世界に行く道を死者に教へて送り込む人である。

五　シャーマン教

シャーマン教は廣く行はれる。男女のシャーマン教者は司祭者の如く深い教養は必要としない。彼等は音樂、歌、踊、焚香の大歡喜の中で、仲媒者として靈の乘り移つた形となりて口を開けば宜いのである。すなはち疾病或は死の原因、使用すべき治療法、神及び靈に供奉すべき犠牲、行はれつゝある事件の終結等である。病人を侵しつゝある靈を追ひ出して疾病を治療すること、病人の身體に固着せる物を除いて病を治するのもシャーマン教者の爲す所である。

處によりては、例へばバタク族、印度支那半島の山地民族ではシャーマン教者と司祭者とは判然と分離して居

るが、ボルネオ、フィリッピン、セレベスのマカッサール人及びブギー人では一人にして兩職を兼ねるのが普通である。クルイト Kruyt 氏に據れば、シャマニスムスは中央セレベスの海岸地方（内陸に之れを殆ど見ない）及びハルマヘラではイスラムと共に輸入せられたものだと云ふ。ダヤーク族に於てもシャーマン教は高文化と共に輸入せられたものだ。之れと一致する事實は南ボルネオのイバン族及びオロ・ガヂュ族に於て女であるのに附け鬚をして男の衣服を着けたシャーマン業者が私娼を働くことである。之れは雷に此男裝女（バシール Basir）ばかりでは無い、女性のボルネオの司祭者とシャーマン教者を兼ねる者（バリアン Balian）も之れを行ふ。

六　占　卜

うらなひ又は將來を豫言するの類は種族によりて異なるが、多種多樣である。夢占の類も數多くある。例へば神聖な場所に寢て夢を占ふなどの例がある。骨相及び臓器相から占ふ法も各種ある。卵を割つて殼の割れ方によつて占ふ法（カシ族）、大形の果實を小刀で切つて割れた大きさによつて判斷する法、竹筒を加熱して割れ方で判斷する法、小さき木棒を積んで置いて器物で之れの一部をすくひ上げ、奇數偶數によりて判斷する法等甚だ多い。

一般に擴がつて居るのは前兆に對する豫想である。殊に前兆動物に注意する事である。ボルネオのダヤーク族には殊に之れが著明で非常に念入りな精巧彫刻にも吉兆鳥が刻まれて居る。バーナル、フィリッピン、ミナハサ等にも鳥卜はあるが、ボルネオ程には著しくない。多くの種族に於ては占卜を甚だしく重大視し、之れを行ふ事なくしては大事を決行しない程だ。例へばカシ族の卵破り、カレン族の鶏骨の檢査、ダヤーク族の一部で動物の器を調べたり、鳥の行動を見ること等であるが、婚約の如きも此豫言が不幸ならば破棄する。

七　アニミスムスと妖術

甚だ重要であり、且つ全思想を支配して居るのは、アニミスムスと妖術信仰とである。此兩者は異なつて居るものだが、東南亞細亞ではひどくつながり合つて中々に分ち難い。

アニミスムス的の世界觀では東南亞細亞の種族には人類、獸類のみならず、植物にも、無生物にも精神がある、少なくとも靈（精神）があり得ると感ずる事である。尤も種族によりて可なり程度の差はある。高度の場合には人間の外に鳥獸、植物、無生物、特に人間にとつて何等かの理由で重要な物體（家畜、狩獵獸、農作物、楠、鑛山、家の器具、舟等）である。從つて人間は其靈（精神）を優しく取扱はなければならない、少なくとも驚かしたり、侮辱してはならない。

特に重要なるは米の靈である。農耕は大部分此信仰と結合して居るのであるが、要するに島民は一定度迄人間として米の靈を待遇する。それで稻の穗が延びる時期には之れに食事させる。すなはち姙婦に食料を渡して田に播かしめる。同時に多數の禁制を守らなければならない。それは米の靈を不注意な行爲又は言葉によりて恐れしめ、又逃走せしめるためだ。收穫時にも他人の入るを許さない。それは米の靈が逃げる恐れがあるからだ。そし

て色々の法式によりて米の靈が逃げるのを取りもどす。

米の靈の居る場所は初めて切つた穂であると考へることもあるし、特に大形の能く出來た穂だと考へて、注意して之れを取扱つたり、貯藏したりする。

八　動物信仰・動物崇拜

トーテミスムスが廣く行はれて居ることは上述したが、之れと同時に、動物信仰、動物崇拜の幾多の形式がある。之れはトーテミスムスと似た考へ方ではあるが、同一のものではない。

試みに一二の獸信仰に就て述べる。之れは大抵恐ろしい獸、又は著明なる動物に對して行はれる事である。そして其れを祖先靈の具體化したもの、又は占卜動物だと考へるのだ。虎が棲息せる全區域に於て（印度支那半島、スマトラ、ジャワ、バリ島）、虎に關する宗教的及び迷信的想像及び崇拜が行はれる。例へばスマトラに於ては虎に殺された者の靈は虎に乘り移れるものと思はれ、虎の形で其後嗣者は助けられると思ふ。虎によりて殺されるのは罰で且つ贖罪である。カロ・バタクと安南人は虎に殺された者の靈は其背に乘つて居る。そして虎を危難から救ひ、又虎と苦痛及び快樂を共にすると信じて居る。そして此虎は迫力を有して居ると思はれるので、虎を狩るのを好まない。安南人は此虎に犧牲として捕へた獸を生き乍らに供へる程に大切にする。

信仰の重要なる對照として鰐がある。インドネシアとマレー半島では、人間と鰐とは親類だと云ふ迷信が到る

處に行はれ、其中には既にトーテム化したものさへある。そして屢〻犧牲を捧げて鰐供養を行ふ。鰐と蜥蜴とは靈動物として神聖視せられ、インドネシア民族の裝飾藝術に重きを爲すものである。

處によりては鰻が大いに信仰せられる。そして死んだ人の靈が乘り移つたものとして崇拜せられる（北ルスンのイゴロト、セレベスのブギ人、モルッケン及びウェタール島の住民）。

ヒマラヤからメラネシアに至るまで羽色の美くしさ、嘴の特別なる形狀、其特別な生活狀態によりて生ぜらる鳴き聲によりて著明なのは犀角鳥 Nasskornvogel である。此鳥は神話、裝飾に大きな役割を演ずるのみならず、幸福鳥として惡魔、惡影響を防ぐと信ぜられる。それだからイバン族、その他のダヤーク族の精巧な彫刻、或は彩色には、此鳥が現はされて宗教的法式、祭禮等に缺く可からざるものとなつて居る。ブギ人及びマカッサール人は其頭を家の主要なる柱（老柱）の下に埋める。此鳥の木製彫刻は屋根頂上の彫刻、或は棟かざりとして南東ボルネオのビアヂュ、トラヂャ、バタク族等に見られる。又此鳥の形を現はした木棺をアオ・ナガ族、コニヤク・ナガ族、バタク族が造るのみならず、バタク族は葬式に際しては此鳥の假面を使用して踊る。此鳥の羽毛、時として嘴は、戰士の卓功或は首狩の賞として使用せらるゝし、鳥首は屢〻兜の裝飾に使用せられる。

占卜鳥、特に鷹の類はダヤーク族にとつて重要である。サラワクのイバン族では、多くの者は「內々助ける者」（ガロング Ngarong と名附ける）を有する。之れは多くは生物、殊に鳥の類が多く、初めて夢に見た場合其他で決める。此ガロングの所有者のみならず、其子及び孫迄も其生物を殺さない。之れはトーテミスムスと非常に

似たもので、個人的トーテミスムスとも見るべきである。

斯くの如く魔力ある自然物或は人工物に接觸し、神聖なる家族的及び種族的物質、護符の類に圍繞せらるゝ結果としてエマニスムス、又はフェチシズムス（物質は魔力的放射物を出すと云ふ考）、アニミスムス（物質は靈又は精神を具備すと云ふ考）、靈信仰（靈の存在する場所は物體なりと云ふ考）が混合して、移行して相互分離し難くなつて居る。そして之れは印度支那半島にも、また西太平洋諸島にも甚だ多き石崇拜として現はれるに至つたのである。

九　巨石崇拜

神聖なる巨岩或は石塊は、人或は獸の化したもので、靈の宿る所、又は超人的勢力の宿る所だ。印度支那半島では特にナガ、カレン、モイ族に此信仰が行はれ、西太平洋諸島ではニアス人、ミナンガバウ人、ダヤーク人の一部、それから又ハルマヘラ、チモール島等では更に之れが盛んである。ニアス族では村内、又は村近邊のゴム樹の下に石を積み重ねるが、之れは神聖な神の居ます地なりとする。そして首狩の行はれた場合には新らしく獲た首を此上に置く、少なくとも首を最初に此石に見せる。

ナガ、カレン、バーナル族では各戸に石を貯へる。之れは多少禮拜物の意義あるもので鶏やら卵を捧げる（寧ろ是等のものを食物として强くなつてもらはうと思ふ方が良いかも知れない）。そして此石に狩獵、戰爭、取引、

農作に幸運であるのを祈る。ボルネオのケニア族の家の傍には石があるが、家の移轉の際には之れを運び去る。又一般に廣く行はるゝ考としては石に男女の兩性があり、石は自力で增加し、且つ色を變じ得る事である。

十　惡魔除け

惡靈が來るのを防止する法が色々ある（武器、陰部を示す、各種の護符等）中に、特に注意す可きは木彫の防禦像である。之れはインドネシアの各所に於て家の傍又は村に立ててあるもので、武器を持て居るか、又は過大な陰部を露出して居る。ニコバル島では家の中及び家の傍に、病氣の場合に人間及び獸の形（カアルウ Karcau 及びヘウタ・コイ Henta-Koi と云ふ）を刻んで立てるが、其目的は一つには疾病を起した惡靈を驚かすためであり、又一つにはシャーマン人が其法を施行する場合に助ける爲であると云ふ。

其他インドネシアには、魔力ありと思はるゝ嚇かし物を畑作の盜難除けとして造る。特色あるは東部諸島（モルッケン、ケイ、チモール島等）に使用するマタカウ Matakau と名附ける物である。例へば鰐の形のマタカウは死を以て賊を罰し、石は腹痛を生ぜしめ、鳥賊は膿腫を生ぜしむるものだと信ぜられる。

十一　タブー

東南亞細亞には多數のタブーが行はれるが、之れは妖術、神、惡魔、靈崇拜と關係して居る。

インドネシアではブマリ Pemali、ラリ Lali、パンタング Pantang 或は之れと類似せる言がある。メンタワイ島ではプネン Punèn、カシ族はサング Sang、チャム族はタブング Tabung と名附ける。ナガ族及びアッサムの山地住民はゲンナ Gemna と云ふ。

以上の言葉の意味は各種族に於て必らずしも一様で無いが、「禁忌」と「神聖」との意味の間に存する。タブーを輕視する場合には自然に生ずる魔力の作用により、或は神、悪魔、祖先靈の作用により個人或は全體が不神聖になるものとして恐れる。

タブー禁忌の種類と範圍及びタブーの行はるゝ時期は種々雑多である。又廣く行はれては居るが、全地域に亙つて同じ強さで現はるゝものでない。印度支那半島の山地住民ではタブーは種類も多く且つ厳重である。開化種族マライ、ブギ、チャム、クメール族に於てすら中々に數が多い。

タブーの中には物或は場所に關係するものがあるし、動作或は言葉に關係するものがあるし、又平常且つ一般に行はれるものがあるし（例へばカシ族は家作りに黒奴を使用せず、アンガミ・ナガ族は一定の木を焚火に使用せざるの類）、或は男だけ、女だけのタブーもある（例へば女だけに限る禁忌の類）。

其他タブーには一定の年齢に限るもの、一定の家族、同族に限るもの（例へば食物禁忌の類）、又場所を限るもの（一定の場所で一定の職業を禁ずる類）、一定の宗教、或は一定の階級にある個人のタブー（司祭者、酋長の類）、神祭を行つた者又は石造記念物を建てた者のタブー等である。

それよりも重要なのは或る機會にだけ行はれた或る行爲、或る熱情が各種の禁止によりて止められるタブーである。食物の禁止、衣服の禁止、仕事の禁止、外界と交通の禁止がある。――その中に服喪タブーがある。死者ありし場合に寡婦は勿論の事、全家族、全同族、稀ではあるが、アオ・ナガ族に見る如く全村が服喪するのである。尤も酋長の死んだ場合には其勢力地域内の全部の者が喪に服するのは一般的に行はるゝことである。然し不慮の變死を遂げた場合（産褥、落下して死んだり、野獸に殺されたり、溺死したりする場合）、或は大自然變異の場合（地震、日蝕、月蝕、流行病、飢饉等）のタブーは又別である。

のみならず一定の獸類の死が全村をタブーに置く事がある。マニプールのナガ族では或種の蛇を殺した場合、アンガミ・ナガ族では幼い犬の死等で全村が服喪する。

斯くの如き次第であるから毎日の行事は各種のタブーの連續であり得る。家と舟の建築と建造、播種と收穫、戰爭と狩獵、結婚と葬送、酒を釀す場合、森で食料を集める時悉く之れ一定のタブーを伴つて居るから、一定の法式の下に行はなければならぬし、一定の言葉を發するのを禁じてあるし、一定の食物を攝らねばならぬ。そして此タブーは往々にして經濟的、或は宗教的、魔術的意義があるのだ。

タブー語なるものは或る特殊の時期、或は或る特殊の行動を爲す場合の間だけに用ゐらるゝもので、悪魔だとか、獸、植物、無生物の靈に對して行動の目的を祕すために出來たものである。此のタブー語は一定の規定の下に日常語を變化して使用する事もあるし、餘り使用せられざる古代語又は異國語を代用する事もあるが、最も多

いのは日用語を轉化發音するものである。

此部類には蒐集語なるものがある。ボルネオ島、マライ半島の樟腦採集者が使用する言葉、或は安南のチャム族の良木採集者の行ふ言葉がそれである。之れに相當して狩獵言葉、戰爭言葉、鑛山言葉、漁夫言葉、船乘言葉と云ふ風に多數存在するのみならず、稻の靈に知らさぬ樣に使用する收穫言葉がある。

意味は異なつては居るが、半島にもインドネシア諸島にも詩的の祈禱語がある。之れは歌、插語、祈禱等で神、靈、病等に對して行ふものである。一部は古式の語であり、一部は交際語を脱却した了解し難い言葉であり、一部は司祭者の造り出した言葉である。時として此言葉は「靈語」で、靈界と話す言葉でもある。

兩親に對して甚だ多く食物禁忌、或は行爲禁忌のあるのは姙娠と出産直後である。然し其形式は地方によりて種々であつて、或は紐を結ぶと難産すると云つたり、紐を切ると三つ口の子が生れると云ふ類である。時としては父親が産前、或は産後には外出してはならない事になつて居る。歸宅に際して惡靈が跟に着いて來るからである。出産時に男も産の眞似する風習はブル島、ニコバル島、アッサムのミリ等にある。然しボルネオの各地にも此風習の痕跡は殘つて居る。

殆んど到る處に行はれる事は、母親が産褥を了つて日常生活に再び復歸する時に行はるゝ穢の拂ひであるが、其形式は處によりて異なる。然し印度支那半島及びインドネシアに廣く行はれるのは産婦の傍で火を焚いたり、焚火の上に床を造つて産婦を臥かす。そして二日一度宛、何日間か定まつた日數だけ之れを行ふのである。

沐浴は穢に觸れた場合、又惡靈に取りつかれるのを免かれるために行ふ。ボルネオのダヤーク族其他に於て盛んに見る所である。例へば葬式を造り出した後だとか、寫眞に撮影せられた後に行ふ。「みそぎ」に似た風習である。

動物、植物、無生物の靈に對する考へ方が以上示すが如く、インドネシアに於ては複雜な次第であるので、人間の靈に就ての觀念は更に一層複雜なものとなつて居る。

インドネシアに於て廣く行はれて居るのは、人間は多靈だと云ふ觀念で、一人の人には二箇乃至九箇の靈が宿ると思はれる。すなはち身體各部の內部にそれ〴〵の靈があり、各部の外部にもそれ〴〵靈があるとの考へである。但し靈の意義は單なる生活力と云ふ意味から、人間の生きて居る限り密に結合せる守護靈及び危害を及ぼす惡靈と云ふ迄の範圍の靈である（カレン族、バタク族は人間には惡靈が宿りて危害を及ぼすのみならず、死に到らしむと思つて居る）。但し平常の生活では一人に一靈があると信ずる。然し此靈たるや吾々の靈の考とは可なり異なつたものである。例へば生きてる人（場合によりては死人でも）は自覺せる個性と靈とは唯二つの場合にのみ結合する。すなはち第一は睡眠中に昆蟲の形（蝶、蛾又は火取り甲蟲）で、さまよふ靈が夢を生ずる。第二には司祭者の力で靈が現はれて其存在を知らせる。

それだから靈は生きて居る者には必要であるが、個人の意識と同一のものではないとする。之れは次の事實によりて明白である。すなはち人間が起きて居る狀態の時に靈が逃避することがあれば、暫らくすると病氣になる。

若し靈が永く歸らなければ死を生ずる。靈は常に危害を及ぼす――特に自然靈、死靈等の惡靈、それから又妖怪の類は人間の靈を誘ひ出し、そして遠方に引き留めて返さないのと、惡靈そのものが人體を蝕んで病と死とを生ずる。

十二　妖　怪

妖怪の觀念も東南亞細亞に廣く存在するものである。或る場合には人間は自己意識の下で、或は無意識的に人間を喰ひ裂く動物に變形する。之れは具體的に獸形に變化する場合もあるし、又靈的に獸形となる事もある。そして人間及び獸の骸を食つてしまひ、又靈をも喰ひ盡す。特に靈が宿れりと信ぜらるゝ臟器――それは多くの場合に肝臟なりと信ぜられて居るが――を喰ふので病氣が起る。

虎が住んで居る所では此獸は多くの場合には虎である。然し虎の住まざる地、すなはちボルネオ、セレベス、フィリッピン、バリ島以東の小島では鰐、犬、猫に化けると信ぜられる。

此妖怪信念は意識的に、或は無意識的に、取りつかれた狀態になつて他人に感染せしめ、或は遺傳せしめる。特にインドネシア等に於て廣く行はれて居る考は臟腑に嚙み附いて、臟腑をぶら垂げた頭が飛び廻り人の生血を吸ひ、又人の肝臟を喰ふと云ふ妄想である。若し惡魔、或は妖怪に犯されたと云ふ疑念を持つ場合には神を呼び其裁斷を乞はなければならない。若し其れを行はずして徒らに日を送り、日を迎へて居るならば、遂には病に罹つて死に到るか、或は彼は奴隷として賣られなければならない。

第十五章　疾病・死・葬送

一　疾　病

アニミスムス及び魔術觀念は、疾病の原因と疾病の治癒法とを指導する。疾病の原因としては惡靈の作用であり、惡靈によりて靈が奪はれるのであり、又妖怪等の作用に犯されるのである。

從つて疾病を治癒せしむ可き方法としては、占又或はシャーマンの敎ふる所に從つて犧牲を奉進する外に、きくと思はれる治癒法を行ふことである。勿論これには色々の方法がある。司祭者或はシャーマン者を通じての疾病に對する誓約、遁逃した、或は誘拐せられた靈を呼びもどして之れを捕へること。魔術或は超自然的原因によりて身體内に入り來れりと稱せらるゝ物質（石の類が多い）を、按摩その他の方法によりて取り出すこと。疾病を起したと稱せらるゝ惡靈を病人から追ひ出し、之れを或は鷄に、或は人形に、或は籠に、或は特に造つた小船に封じ込んで水に流し去るのである。

以上に記した外に死の原因に就て別の考へ方の系統がある。それは至上の神が人間の生命の絲を手に握つて居

るのであつて、此絲が切れた時に人間は死ぬと云ふのである（カチン族、トラジャ族）。又壽命と云ふものは前以て決まつて居るのであつて、生れる前からの既定であると考へる種族がある（バタク人、ニアス人、ミナハサ人）。それから又最高神は人間に靈を入れたもので、人間は神の所有であり、神は意に向く時に人間を殺す事、恰も人が獸を殺すに等しいと云ふ考へ方もある。それでアッサムのチャン・ナガ族は人間は天神の牛（ガヤール）だと考へて居るし、ニアス人は人間は神の　だと考へる（北ニアスではラツル Lature と云ひ、南ニアスではロワラニ Lowarani と云ふ）。同樣なる信念を東ボルネオ、セレベス、ハルマヘラ等の住民も持つて居る。然し此觀念は同時に疾病の時に司祭者を通じて、連れて行かれた靈を呼びもどせる樣に神に祈願する風習に結合する。

其所で司祭者は自分の靈を天に送り出し、神意を動かして靈を下げ渡してもらふ媒介者となる。其れで此機會に司祭者は永い歌を唱誦するが、其中には神の國に於ける狀景が詠み込まれて居るのだ。

ニコバル島で行はるゝ疾病治療法として繪畫的器具を造ることに就ては後述する。もつと大仕掛けにニアス島では病氣の場合に此種の事が行はれるらしい。其れと云ふのも第六二圖5に示すが如く、一定種の木で造つた粗末な人形が何個も造られるからである。ニコバル島の此種の第六三圖（フンタ・コイ Hoata-koi）は、一つには惡靈を恐れしめるためでもあるし、又一つには疾病魔の注意を惹くためでもある。ニアスの像の意味は未だよく分らない。然し一方には之れを以て助けて欲しい神又は靈に交通するの賴りとし、又一つには直接な偶像的な意味もあるらしい。

かくの如き治病法の外に多數の民間藥があるのを度外視してはならない。其中には無效、時としては有害なりと思はるゝものも多いが、長年の經驗によりて眞に治效あるものも少なくない。敢て東南亞細亞の民間藥だつた譯ではないが、キニーネの如き、コカインの如き、いづれも土民の經驗藥を研究して其主成分を抽出し得たのである。今後に於ても此種の研究は力めて續行して新發見を加へ度いものである。

私は目下インドネシアの民族醫學に就て起稿中である。

二　死後の靈

死後の靈の生活は死に方、年齡、時として死者の身體狀況（片輪者）、社會的地位、生時に於ける行爲及び取扱ひに關係し、又葬儀及び葬式常習を行つたか否かに關係する。

暴力致死又は普通でない死を來たした場合には、死の世界に於て異常の苦しみを嘗めるか、若くは妖怪となつて迷ひ歩くと思はれる。例へば出產時に死んだ女、溺死者、雷に打たれた人、流行病で死んだ者、虎に喰ひ殺された者等である。死に方によりて種々の程度に於て家族或は一村のタブーが行はれる。此樣な死に方をした者の親類は屢〻何日かに亙つて入費を要する淨めの儀式を行はねばならない。之れは怒れる靈が危難を及ぼし、又は魔力を現はさないためである。

通常斯くの如く不慮の死を遂げたる遺骸は念を入れた方法で葬られる。例へばカチン族では土葬が通常なのに

斯かる場合には火葬するし、火葬が通常な場合には土葬する（バリ島）。

東インドネシアでは、然し戰死者の靈は死の國に行かずして、地上に留まり、此世の者に力を貸して呉れる者として非常に貴ぶ（ハルマヘラ及ルアング・セルマタ島）。非常に幼い兒及び流産の兒の靈は善靈なりと解する處と、惡靈なりと解する處と二樣ある。そして身體の一部が碎けて死んだ者の靈は常人の行く死の國へは行けないとの考へが多い。

死の直後に靈は死の國に行くのでなく、暫時の間は家の周圍に留まるか、或は葬つた後には墓に附いて居つて、葬儀式が行はれた後に始めて彼の世に到るものだと思ふのが多い。從つて靈が死の國に到る迄に種々の障礙に打ち勝たなければならぬし、且つ一定の危害がある。特に靈は死の國の番人の傍を通らねばならぬが、其番人は人の形、或は獸の形をして居る。此番人の許可を得て靈は死の國に入らねばならないのであるが、入國に際しては貝殼或は石片を示して買つてもらはなければならないし、又武人は番人と仕合ひをせねばならない。

其他廣く信ぜられて居る事は、靈は死の國に至る迄に滑り易い木の幹、竹の橋を渡らなければならないとの考へである。此橋は劍、或は蛇から出來て居るとも云ふ。そして惡人、又は生時に後記する如く必要な條件を行はざりしものは、橋から落ちて釜の中、或は煮えたぎつた湯の中で煮られると云ふ。之れはカチン族、ダヤーク族、トラジャ族、ミナハサ人、マライ半島の原始民族に行はるゝ所だ。然し此說は印度教或はモハメッド教の影響から來た所が多いらしく、又ペルシア方面にも之れと似た言ひ傳へがある。

三　埋葬樣式

遺骸の埋葬時には幼兒、奴隷、不慮の死に非ざる限りは、各種の葬儀樣式、犧牲供奉、儀式を伴なつた棺行事、踊、假裝戰等が行はれる。

死者が再び復歸しないために諸種の行事がある。遺骸を縛つたり、戸を開けずに壁を破つて遺骸を送り出したり、灰を遺骸にふり掛けたりする類である。また之れと同一の結果に歸着する方法として生き殘れるものの靈を、死者靈と一所に連れて行かれないために、遺骸が運び出される時に小兒を縛つたり、或はボルネオのイバン族は帶の間に鈎（Haken）を挾んで自己の靈を自分の身體に附着せしめる。

埋葬樣式は種族毎に異なり、同一種族でも社會的地位、年齡、財產等を異にするによりて必らずしも一樣ではない。そして葬法が多樣なことと、比較研究が少ないので葬法に關する系統的記述を行ふのは困難である。

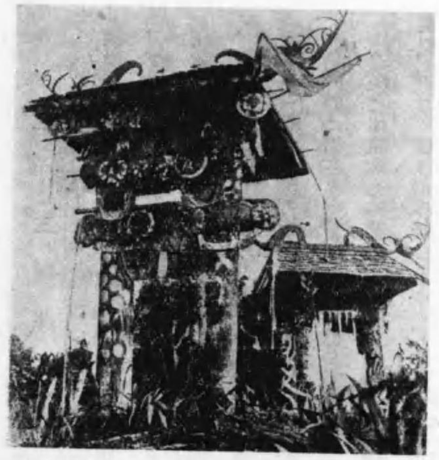
地中に土葬するとは云ふものの、處によりては（アッサムのアボール、紅頭嶼島及び東インドネシアの各處）では蹲葬が少なくない。之れは手足をかがめさせた極めて窮屈な姿勢で土中に埋葬するので、同時に遺骸を縛る事が多い。此葬法は日本の石器時代にも行はれた所であつた。それから又死骸を腐らせる風習、遺骸を床上に置く風習、樹上に置く風習、洞穴埋葬等種々ある。

直ちに埋葬せずに遺骸を棺と共に軟部が腐朽する迄置いておく場合がある。腐敗液はくみ出されるか、或は竹

管で排泄せられる。そして葬祭の機會に初めて之れを埋葬する。之れはクキ・チン族、ダヤーク族、トラジャ族等に見る所である。殊に酋長、貴人、富者の遺骸は數週、數ケ月間は家の中、又は家の傍に保存するが、之れは多數の犠牲を供へての大げさな葬祭を準備するに必要なためである。

棺を使用する風習の場所では木幹を長軸の方向に二つに打ち割つて内部を掘り凹める。或る場合には棺の外面に彫刻を施し、又或る場合には彫刻を施さざる木棺を製作する。ダヤーク族の或る者では蛇、蜥蜴を彫刻し、東北ボルネオ及びルスンに於ては牛頭を彫刻する。又棺の形を舟の形狀とする事がある。バタク族或はセレベス、ボルネオの處々に見る所である。又アオ及びコニアク・ナガ族、それから又バタク族の或るものは犀角鳥の形に棺を造る。

棺を使用せずして遺骸を筵に包み、少し高めて設けた木床にのせる種族も少なくない。そして遺骸を燻すことが大陸、殊にアオ、コニアク及び東部ナガ族に行はれる。



第五五圖　中央ボルネオのケニア族酋長(右)及びその娘の華麗な墓

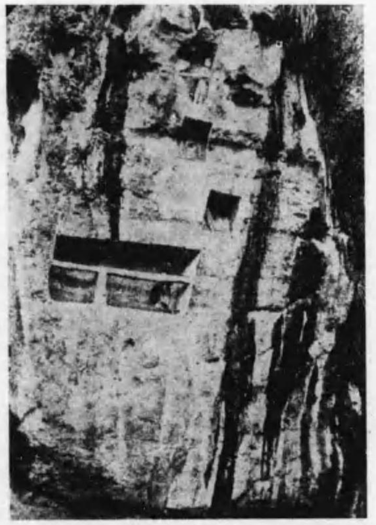
棺は彩色せられた四―六米突の高さの柱上の小室に載せられて、屋根上には意匠化された犬頭が飾られる。左方の墓には多數の衣服と帽子とが吊され、右方の墓には楯及び戰衣が吊される。

樹枝上に遺骸を置く風習も上記ナガ族、マライ半島の北部に行はれるのみならず、インドネシアでも稀でない。すなはちチモール・ラウト、メンタワイ島、ニアス島等である。

床上に遺骸を置く風習はボルネオ、セレベスの一部、ニアス、ブル、セラム、ミソール島等にあるが、燻すことはない。筵に包んだ遺骸或は棺を木材で組んだ櫓にのせる風習がバタク族にある。之れと幾分似て居るのはダヤーク族の酋長或は高貴な人に見る所の華麗な墓(第五五圖參照)で、棺は柱の上に設けられた小室中に載せられ、柱其他には美事なる彩色と彫刻とがある。

多くの種族では死者を直ぐ家の前に葬る。例へばマニブールのカブイナガ族、ビルマのワ族セレベス及び臺灣の一部に於けるが如きがそれである。

ルスン、ボルネオ、セレベス島に於て廣く行はれて居るのは洞穴に葬る風習で、之れは此三島のみならず、東インドネシアに廣く見らるゝ所の事であるが、山の中腹に洞穴を掘り或は絶壁をなせる岩に穴を掘り込んで、此部に棺を置くのである。之れは始めから洞穴埋葬として行はれる事もあるが、



第五六圖　崖に穿たれたる葬穴　中央セレベス

又種々の埋葬法を行つた後に於ける最後の埋葬所として行はれる事もある。そして一つの棺に向つて一つの洞穴が作られるのもあるし、又多數の棺を入れる大きな一洞穴が掘られる事もある。中央セレベスに於けるトラジャ族の使用せる洞穴は殊に美事なものとして有名である(第五六圖參照)。

ミナハサ人は火山岩に掘り込んだ洞穴中に前以つて火山岩で作つた石棺を置いた。其石棺は浮彫の彫刻を以て飾られたる家屋形のものであつて、其中には蹲居せる姿勢にて遺骸が入れられた。

(註)　私はパラオ島で發見せられた石棺が非常に日本古代の石棺に似て居る事を報告した(平野氏合著「太平洋の民俗政治學」日本評論社　昭和十七年發行)。其文中に此種石棺は家屋形を爲して居るが、必らずパラオ以外に盛に製造使用せられたる地があつて、パラオ島の石棺は要するに其地からパラオへ傳來した風習なるべしと論じた。此點に於て上記のセレベス北部ミナハサ人の石棺使用の報告は甚だ價値が多い。

セレベス島の石棺の研究は未だ詳細に行つた報告あるを聞かない。然し將來パラオ石棺と著しく近い形式のものが、セレベス島に發見せらるゝ事は期して待つべきである。それと云ふのもパラオからセレベスに交通するのは極めて近距離であるし、潮流の關係も決して難儀では無い。

私は一日も早くセレベス及び恐らくは又フィリッピンに於ける石棺が詳細に研究せらるゝ日の來らん事を切望する。蓋し此地域は黑潮の流域で日本とは交通至便であるからである。

死體を燒却する風習は、ヒンヅー及び佛教の直接影響を受けたりと思はるゝ民俗を除外しても、印度支那半島に於て少からず行はれる。卽ちカシ、シンテング、ミキル、ガロ、ラバ、カチヤリの諸種族に於ては、土葬と同時に火葬が行はれるし、ボド族のあるもの、カキ族の最も北部に位せるもの、チン族の南部にあるもの、スガウ・カレン族、プオ・カレン族及びカチン族、ラフ族の一部またヤオ及びモン族中のあるものに於ては、專ら火葬が行はれる。

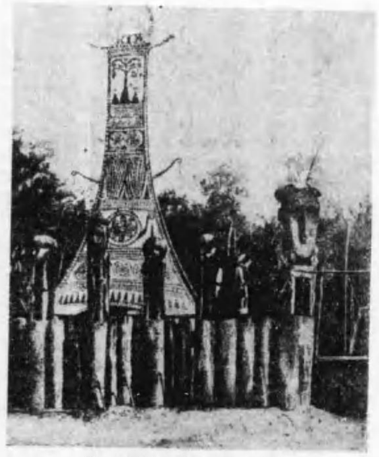
上記のアッサムに於ける諸種族の中には明らかに印度の感化を受けたるものもあるが、必らずしもさうばかりでもない。スガウ及びプオ族では近年に於て、モン族から火葬風習を敎へられたと傳へられる。

インドネシアに於ては、バリ島族もヒンヅーの影響を受けて火葬する事は勿論ではあるが、其他に於てもバタク族の一部、西サラワクに於ける內陸ダヤーク族及びバリト川流域に於けるダヤーク族に於ては火葬が行はれるが、必らずしも印度の影響なりと思ふ事は出來ない。禰津正志氏のインドネシアに於ける考古學的研究(未發刊)に於て明らかなる如く、マライ半島からインドネシアの一部にかけては、石器時代から既に火葬が行はれたるもので、火葬法は此地方の埋葬法としては必らずしも新らしきものではない。

死體を大なる土製甕に入れて埋葬する風習はボルネオ島、殊に其東北部に行はれて、以前には此地方では更に廣く分布せりと傳へられる。セレベス島では今は之れを聞かないが、石器時代のものとして發掘せられたる甕棺がある。從つて此風習も此地方では可なり古くから行はれたものである。

四　墓

埋葬方法が種々であると同様に、墓の形式も亦一様でない。當然土葬或は洞穴葬に於ては地上に立てられたる墓標の類が目を引くものであるが、最も多き墓標としては小家屋が建てられる。之れは多くは甚だ簡單に草或は椰子の葉を以て葺いた屋根を具備するものであつて、暫時年月を經ると腐朽する。然し多くの民族に於ては、殊に其酋長の墓としては注意して長持ちのするものが建造せられ、それには往々甚だ美事な彫刻がある。圖に示したジャライの墓は印度支那の西部にあるもので、小家屋の下には低い墓丘が築かれて居る。小舍の屋根には木綿製の布が張られて且つ附屬彫刻物があり、小舍の屋根には狩の光景の圖が描かれて居る。小舍の周圍に木柵が立てられて、此所に蹲居の姿勢を以て種々の彫像が彫られて居る。そして此彫像の一部には葬祭に用ゐられたる假面が刻されて居る。要するにこれ又念入りの墓舍の一例である。



第五七圖　ジャライの墓

其他墓標として石を積み重ねる處があるし、平たい石を墓上に寢かせる處があるし、石を墓上に突き立てる處があるし、又墓上に土丘を築く處があるし、垣を以て墓を圍む處もある。

墓に立てる彫像は、時として死者自らを表すものもある（アンガミ・ナガ族、バーナール族、ジャライ族、バタク族等）。時として多少ともに死者の隨伴者として又墓地の監視者たる意味の彫像が立てられる事がある（ジャライ族、ダヤーク族のあるもの、トラジャ族等）。

其他墓に死者の所有物であつた各種の器具類其他を副葬する風習は甚だ廣く行はれて居る。

五　葬儀形式

葬儀の形式は埋葬形式の異なるに依りて必らずしも一樣でないが、屢〻行はれる事は一定の時期に於て墓場或は家で犧牲を供奉することである。其他葬儀に殆ど缺く可からざるものは葬祭である。此祭に於て死者の靈は儀式、踊等の擧行に依りて、死の國に送られると思はれて居る。多くの種族に於ては葬祭は死後長短種々の時期の後に各人に對して特別に催される（ガロ族、カチン族、バタク族）。然し他の種族に於ては毎年死者の全部を合して葬祭がある（ナガ族、クキ族、チン族、カレン族、ダヤーク族）。又他の種族に於ては不規則に何年かを經て、此間に死亡せるものを合同して葬祭が行はれる（カシ族、ニコバル島人、ボルネオの處々、ハルマヘラのトベロール）。又何回かの埋葬が行はれる處では、其骨、殊に其頭蓋骨が最後の休息所に齎らされた時に最も大きな意味があるのであつて、かくの如き葬送はニアス、ボルネオ、セレベス、モルッケン、ニコバール等のみならず印度支那半島に於ては、チヤム族、モイ族の一部、クキ・チン族、カシ族に行はれる。そして最後の休息場所としてはダヤーク族、トラヂャ族、ケイ島、アル島では葬穴或は岩窟であり、カシ族では石棺として用意されたる同

族の容器である。いづれにしてもかゝる長期の段階埋葬に於ては、クルイト Kruijt 氏が報告せるところに依れば、身體の軟部が總べて消滅せし後にあらざれば靈は死の國に行かれないと云ふ信念にもとづく。

六　祖先頭蓋禮拜・巨石文化

祖先頭蓋の禮拜には種々の形式がある。處に依りては葬祭の際に之れを行ひ、處に依りては葬後に之れを行ふ。後者はインドネシアに多くして、印度支那半島には少い。

此風習はチモール・ラウト島、バルバール島、セラム島、ブル島の外、トラヂャ族、ダヤーク族のあるもの、其他バタク族、ニアス島人、ニコバル島人に知られて居る。印度支那半島ではアッサムに於けるアオ族、コニヤクナガ族、北トンキンのロロ族に行はれる。

第五八圖　巨石記念碑
十九世紀の初に殺されたクキ族の一酋長の爲に建てられたもの。上部にある數列の人像彫刻は恐らくガヤール頭部は死者の生時に犧牲と死者と其家族及び從者、下部のせし想ひ出　アッサム地方

此死者崇拜と死の國に對する信仰はアッサム及び西ビルマ、並びにインドネシアの或る地方に於て屢〻見られる處の巨石記念碑と關係が深いので、此所に之れを述べる事とする。

巨石を以て築かれた墳墓は、カシ族の同族骨灰を納めるものとして石棺があるし、又ニアス島の頭蓋埋葬所、ナガ族の造れる石を以て被はれたる土丘、或は石で敷いた部屋があるが、其他の地方に往々にして大型の墓石を使用せるものがある。

それよりも重要なのは石製記念物であるが、之れは死者の光榮のために建てられるものである。墓としてではない。犧牲祭の記念物として造られる事があるし、又重要なる出來事の記念として建てられる事もある。

アッサムに於ては、巨石文化の分布區域はガロ族、カシ族、シンテング族、ミキル族、西部ナガ族（ロタ、ベングマ、アンガミ及びマニプールのナガ族）とクキチン族の一部に及ぶ。此地域に於ける西部の巨石はガロ族に於て餘り大きなもので無く、單に神々に捧げる犧牲石として存在し、又戰場で斃れた武士の記念碑として存在する。然しカシ族及びシンテン族では甚だ大きなものとして存在し、時として九メートルの高さに達し、少數の例外を除けば此所に於ては祖先崇拜のために建てられて居る。又此地方で巨石はメンヒルとして常に奇數（三、五、七、九）で

第五九圖　カシ族の巨石記念碑　アッサム
立てる巨石は九箇あつて同族の男性を意味し、横たはる一箇は同族の母祖先を意味する。

一列に建られて居る。そして其柱列の前には、平石或は石机が置かれる（第五九圖參照）。此カシ族では、祖先の靈が休息所として此記念石を用ゐると思つて居る。そして立つて居る石は男であつて、此家族に屬する男の全部を表すものであり、其前に横はれる石は女の石であつて、全氏族の共同母に捧げられたものである。

西部ナガ族に於ては、此石製記念標は時としては一つづつ立つて居るし、時としては非常に澤山の石の組合せである。圓形に圍まれたる石垣或は石の列であつて、メンヒルを形成し、又或部では扁平石、石机、石集積を形成する。此メンヒルは息子等によつて死んだ父の光榮のために建てられる事もあるし、又富者は自分の手で個されたる祭禮の記念のために建て、生存時に於ける世間の名譽と死後安樂國への入國門と思つて居る。

其外各種の歴史的の出來事に對する記念石があり、又各種の禮拜の意味の石がある。ルチエイ及びクキチン族では死せし酋長に對する記念碑としてメンヒル及び石臺が建てられ、又宗教的社會的聖祭の記念石が存在する。ナガ及びカシ族ではこれ等の巨石記念物は極く少數の例外を除けば全く加工せられざる石、或は極くわづかに打ち缺かれたる石であるのに過ぎないが、クキチン族の死者に對する記念碑は屢〻浮彫で彫刻せられたるものであつて、死者或は其家族の所有品、或は戰爭記念、狩獵犧牲に關する經歴をあらはす（第五八圖參照）。此圖はマンカイアの石標であるが、十九世紀の始めに殺されたるアッサムの一酋長のために建てられたるものである。浮彫の意匠は上部には數列の人物を表して居るが、多分これは死者と其家族及び從者とである。石標の下部には牛の頭を表して居るが、死者の生時に捧げた牛（ガヤール）の記念であらう。尚此地方には此種石製物の外に、木製の之れに似た品も存在する。

インドネシアに於ても巨石記念物は可なり多い。例へばフロレス島、中央セレベス（トラヂャ族の犧牲場に於ける環石及び石列或はトナブ及びトバダに於ける粗末なる石像の如き）、ミナハサに於て、又ボルネオ、スマトラの或る場所に於て殊にニアス島に於ける如きもそれである。後者に於ては巨石文化產物として宗教的の目的で作られたる石階段、石床、村道に於ける敷石が云はれて居る。ナガ族及びクキチン族に於けるが如く又ニアス島のメンヒル石机及び平たく置かれた石は死者に對する記念石であるし、又生存者が一定の祭禮の時に自分で建てたものもある。それだから之れ等の石は注意して加工せられ屢〻立派な浮彫があつて、それには固有のインドネシアの藝術を交ふるに印度藝術を以てせる石製の巨像を建設するに至れるものすらある。石の生產場所から石を運搬し來る事は印度支那那半島に於ても亦インドネシア諸島に於ても木製の滑車を以てする。アッサムのロタ・ナガ族では之れの代りに木材で造つた手車を以てし、六十人或は百人で之れを運ぶ。

第十六章　首狩り・人身供奉

一　首狩り

東南亞細亞に於て非常に特色ある首狩りなるものは、一つの社會的及び宗教的の習慣ではあるが、次の理由によりて甚だ重大なる意味を有するものである。それは首狩りが宗教的又社會的生活と密接なる關係を有せるのみならず、神及び靈に對する信仰、エマニスムス及びアミニスムスと大きな關係を持ち、且つ死者禮拜及び死國信仰と密接なる關係あるのみならず、年長序列區分及び結婚並びに社會的の地位に大きな關係を有するからである。

インドネシアに近年高文化の影響が侵入した結果として首狩りは大なる地域から消滅して、今日では極くわづかに行はれるに過ぎない。然し十九世紀に於てはアッサムに於てガロ族、ナガ及びクキ・チン族、西ビルマに於て支那境に近きワ族、臺灣の諸族、北ルスンの諸族、ダヤーク族の殆ど全部、セレベスの自然民族、スマトラのバタク族、ニアス島、メンタワイ島、エンガノ島、スンバ島、チモール附近の島々、ハルマヘラ及びセラム島附近のアルフール人等に於て廣く行はれて居たのであつた。

其他の地域に於て首狩りは歐洲人の渡來前にヒンヅー教、佛教及び支那、イスラム文化の勢力によつて古く絶滅して居たのであつたが、信仰、禮拜の時に首狩の遺殘風習が少なくなかつた。此習俗遺殘から考へると印度支那半島ではボド族、カシ族、シンテング族、メイテイ族、ビルマ人、モン族のみならず、東部印度支那半島の諸所にも首狩りがあつた。アムボン及びウリアスでも此島の發見時には首狩りが行はれて居たのであつた。スル島では一五〇〇年にはタルナート人の力によりて首狩りは止された。それよりも遲れた時期までミンダナオ島に首狩りが行はれて居つた。南スマトラではラムボング人の枝分れたるオラング・アブング Orang abung 族の力で漸く十八世紀に止んだ。そしてジャワ、バリ島にすら首狩りの風習からの遺殘がある。

恐らくインドネシアの首狩りは、印度及び支那文化の侵入以前には全地域に亙つて鋤耕作以下の文化民族に行はれて居つたものと見る可きであらう。そして恐らく首狩りは東南亞細亞に獨自に發生したものではない。又首狩はインドネシアに行はるゝ祖先頭蓋禮拜と直接の關係あるものではない。多分歐洲及び東亞細亞に昔時行はれたる首狩りと起原的關係を有するもので、東南亞細亞に限局して首狩りの起原に關する唯一の動機を求む可きではない。世界的に古代に存在した首狩りとしての動機的原因を求む可きである。

殊に近年支那周口店に發見せられたシナントロプスの頭蓋に石器に因する打擊傷あり、且つ首狩りせられたる頭蓋骨なりと思考せらる。此事實はシナントロプスの頭蓋骨のみが發見せられることによりて裏書きされるので、此風習が舊石器時代のみならず、人類發生の當初から隨伴せる舊習俗の一なる事を明示するものである。

それにしても農耕と死者禮拜とに首狩りが關係あるのは興味ある事實である。首狩りは上述の如く農耕よりは甚だ古くして起原的に農耕とは關係ないが、農耕によつて此風習が盛んになつた事は推測出來る。首狩りを行ふと作物の生長と成熟とが良くなると云ふのは、神々及び祖先靈の作爲によるものだからそれに犧牲を捧げなければならぬと云ふ考に基づいたり、或は馘首に伴なふ靈の直接的な魔力によりて多收穫を生ずる等、その說明は多少異なつては居るが、兎に角此思想の最も著るしいのはナガ族、ワ族、ダヤーク族、トラジャ族、北ルスン及び臺灣の山地住民である。尤も其他の種族にも此思想は存在する。死人に對する犧牲、特に死んだ酋長への犧牲と